

332.22
Ka 86
2 (ウ)

口
複
写



* 0021842000 *

0021842-000

332. 22-K a 86-2ウ

支那經濟史概說

加藤繁・著

弘文堂

昭和19

ADC

332.22

KA 86

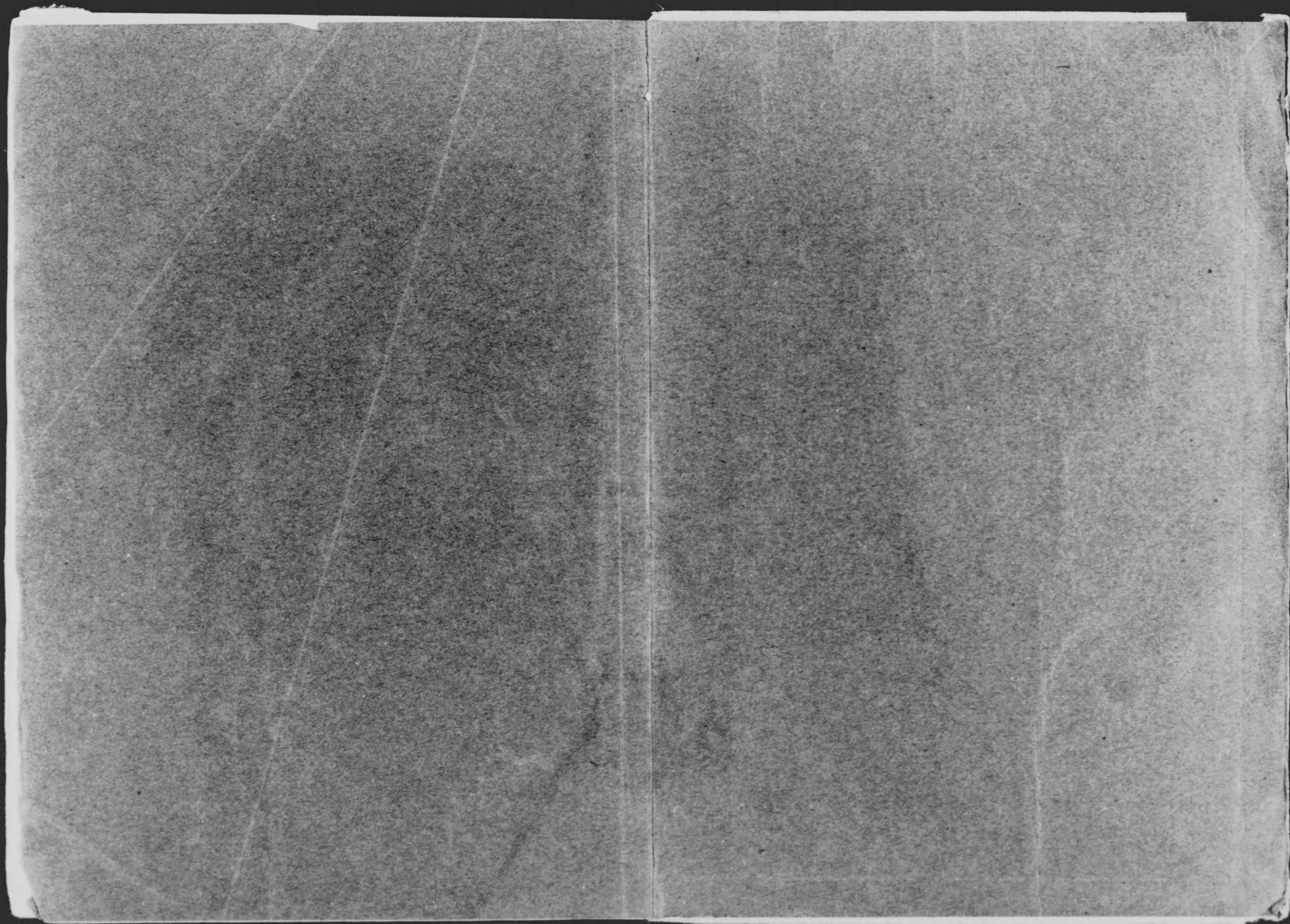
2 (7)



口

複
写

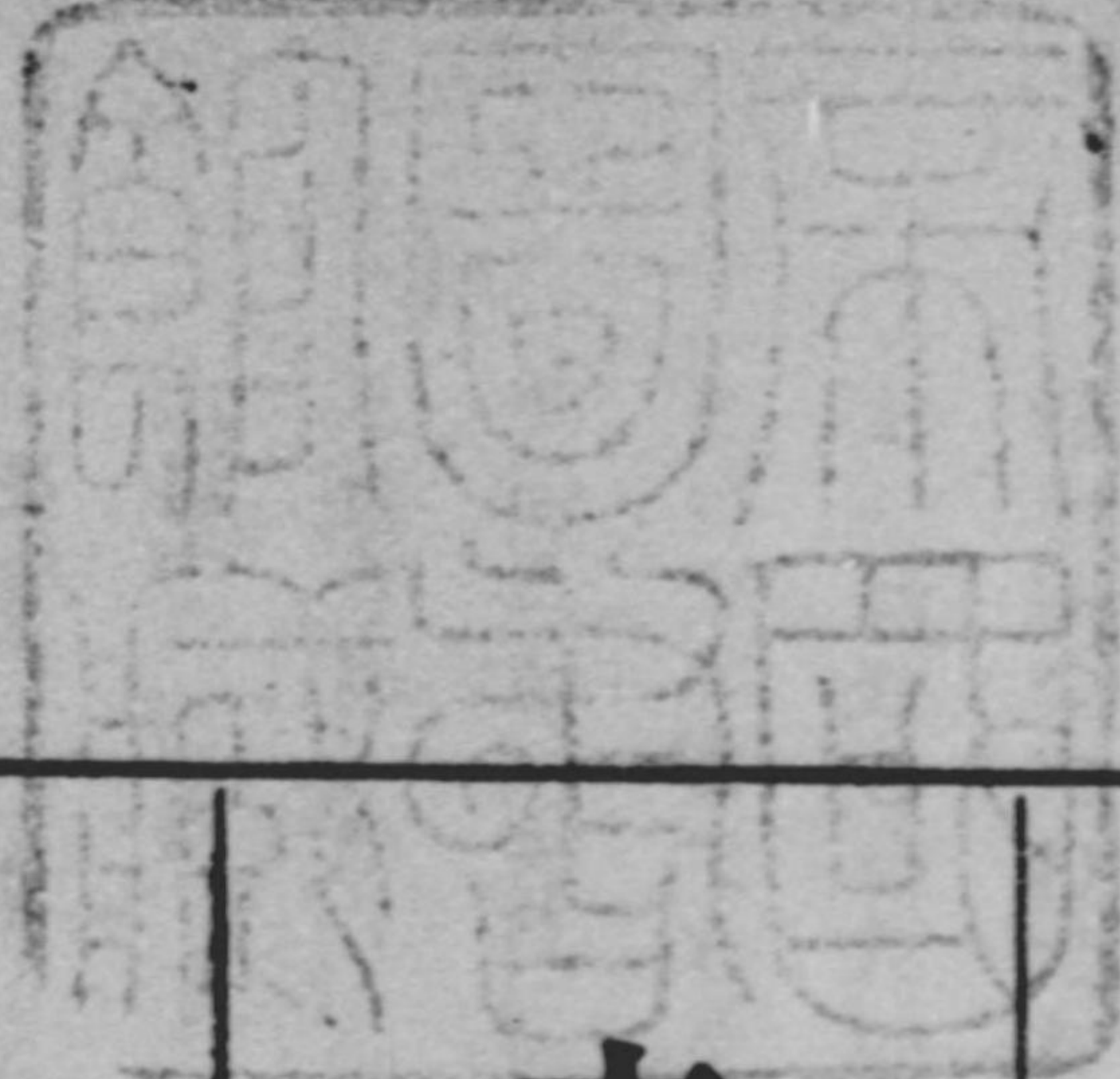
52214



網本

✓
212

332.22
KA86
2



支那經濟史概說

東大名譽教授
文學博士

加藤 繁 著

刊行 弘文堂書房



975
166

小 引

私が始めて支那經濟史の梗概を書いたのは昭和二年の秋で、北支那に遊ぶ直前、倉卒の間に筆を執つたのであつた。その後少しく増補すること二たび、次には大に増補改訂を行ひ、面目を一新せしめたいと思つたが、その暇無く、復た若干の増訂を施して世に問ふこととなつた。これが本書である。最初の本に比べると随分變つて殆ど別のものとなり、量も二倍以上となつて居るが、それにしても極めて簡單で、語つて詳ならざる憾が多分にある。増訂に際してもつと書き足したいと思ふことが澤山有つたが、一部分だけ特に委しくすることも出来ないので、大抵中止した。

經濟史の書方は色々あらうが、私は先づ重要事項について古今を通じてその發達を見ることとした。昭和二年の初稿もさやうであり、本書もさやうである。この外、幾つかの時代に分け、各時代ごとに經濟の發達を跡づけることも勿論出来る。二つの方法にはそれぞれ長短があるが、純經濟現象を簡明に敘述するには前の方が適當かと思つてこれを採擇したのである。し

かしこの次に書く場合には、別の方法を執りたい。即ち三つか四つの時代に分け、その時代時代の政治・社会の情形と経済との關係を明かにし、同時に經濟現象そのものの敘述もかなり委しくして本書の二三倍の分量とし、質に於いても一段の精練を加へたいと考へて居る。

羣籍を涉獵して資料を蒐め、或は分析し、或は綜合して、新事實を闡明するのは、吾等にとつて苦しみであると共に絶大の楽しみである。しかし自他の研究を取りまゝとめて通史を編むことも又た格別の味がある。研究の上から云つても、部分的の考證と全體的の考察觀照とは相須つて誤無きを得るのである。私は特殊問題の研鑽に力を盡す傍、全體の取りまゝとめをも怠らずして、おりおり通史を修めて見たい。さうしてこの次には、取りあへず、上に述べた程度のもので、あまり晩くならぬうちに出したいと思ふ。

終に、本書工藝關係の圖版について御配慮を仰いだ皇室博物館鑑査官矢島恭介氏、陶磁研究所の小山富士夫氏、並に本書の編纂並に出版について援助を賜はつた百瀬弘氏、中島敏氏、藤井宏氏に深く謝意を表す。

昭和十九年一月三日

著 者 識 す

例 言 一 則

本書には間々註解を施した。それは、主として、本文中に引かれた文獻並に數字（人口物價等）に關するものである。著者は、初、重要事項には悉く註解を施して典據を示さうと思つたが、煩瑣過ぎるものがあるので、これを中止して、主として文獻及び數字にのみ註を附けることに改めた。さうしてそれ以外の註解は削除することとしたが、中には難助棄てがたくして残し置いたものもある。各章の註の附け方に多少の相違があるのはこれが爲めである。

目次

第一章 序 説……………一

第二章 戸 口……………七

第三章 土地制度……………三

第四章 食料生産……………五

一 穀 物……………五

二 甘蔗砂糖……………五

三 茶……………五

第五章 衣料生産……………五

一 養蠶製糸……………五

二 麻及び麻布……………天

三 木綿及び綿布……………杏

目次

第六章 工 藝

一 漆 器

二 陶 磁 器

三 絹 織 物

第七章 商 業

第八章 交 通

第九章 外 國 貿 易

第十章 貨 幣

一 貨 幣 制 度

二 通 貨 商 及 貨 幣 市 場

三 信 用 證 券

第十一章 物 價

第十二章 結 語

壹

壹

壹

壹

壹

101

113

113

113

113

116

116

116

圖 版 目 次

第一圖 元鈔金經筵

第二圖 唐吉州窯青白磁壺及び宋磁州窯瓶

第三圖 宋定窯白磁碟及び南宋官窯青磁盤

第四圖 宋景德鎮窯青白磁水瓶及び明萬曆赤繪平鉢

第五圖 清康熙五彩平鉢及び雍正粉彩扁壺

第六圖 宋刻絲山茶圖

第七圖 宋刻絲花卉圖

第八圖 明顧繡松鼠葡萄圖

第九圖 明代之綉線鋪

第十圖 蘇州玄妙觀境内の市及び渡船橋畔の菜市

第十一圖 北京玉器行會館中門

第十二圖 刀 布

第十三圖 錢

第十四圖 元至元寶鈔銅版拓本

第十五圖 大明寶鈔

第十六圖 清末元寶銀

第十七圖 銀票及び錢票

第一章 序 説

私は支那經濟史の大要を述べるに當り、時代別に依らず、重要事項一つ一つについて其の發展の跡を尋ねて見るつもりである。因つて先づ古今を通じた經濟發達の大體の趨勢を略述して序説に充てることとする。

支那の經濟發達の歴史は大別して五つの時代とすることが出来る。第一は戰國以前である。この時代には封建制度が行はれ、王の下に諸侯・士大夫・庶人・奴婢等の諸階級の存した時代であつて、最も主要な産業は農業であるが、牧畜・養蠶も行はれ、手工業及び商業も多少行はれ、貨幣も發生して居た。産業と階級との關係を云へば庶人の大部分は農を業とし、その一部分は工業・商業に従事した。奴婢は初には天子諸侯士大夫に所有使用せられ、後庶人中の富豪にも所有せられ、その使ひ方は色々あつたが、農業労働に使用されることが最も多かつた。周より以前には、土地は天子諸侯に依つて所有せられ、さうして平等均一に人民に分配せられ、使用收益せしめられたといふことは、久しく信ぜられたところであるが、果してさやうであつ

たかどうか疑問である。しかしかかる制度が存しなかつたとしても、貧富の懸隔が少く、人々の土地所有高も均一に近かつたことと想像せられる。

第二は秦漢より唐の中頃に至る時代で、殆ど一千年に及ぶ。封建制度は戦國時代から崩れつつあつたが、秦に至つてこれを全廢し、代ふるに郡縣制度を以つてした。郡縣制度とは、諸侯及び士大夫の階級を廢し、天子が任意に任命するところの官吏をして全國を統治せしめる制度である。封建廢れ郡縣成ると共に自由競争の風大に起り、商人が跳梁を恣にし、土地の兼併も行ひ、貧富の懸隔が次第に大きくなつた。舊封建時代の諸侯士大夫は既に亡びたけれども、代つて新しい官僚階級が興り、富は主として官僚と商人とに集中した。しかしながら政治の方針は必しも官僚階級の利益を圖つたものではなく、自由競争の弊害を矯正し、商人を抑へ、農民を保護し、農業を奨励し、出來得べくば儒家の傳ふる三代の政治、貧しさを患へずして均しからざるを患ふるといふ状態に反さんことを希望したのである。漢の武帝哀帝の限田、王莽の王田制度の如きは、その顯著な現れである。後漢末より支那は騒亂分裂の世となり、西晉に依つて暫く統一されたけれども忽にして五胡の争となり、南北朝の對立となり、動搖に動搖を重ねた。この間、南朝が東南に據つて國を建てたため、南方開發が稍行はれたけれども、大體よ

り云へば、農業も手工業も商業も衰へ、貨幣の流通も萎縮した。この傾向は北方に於いて殊に甚しかつた。されば北朝に於いては土地の荒廢を救ひ、農業を復興せんがため、儒家の唱ふる先王の道に倣つて、土地制度の一大改革を行つた。均田法が即ちこれである。爾來、唐の中頃に至るまで約二百六七十年の間、少くとも制度としては、存続したのである。南北朝は隋に依つて統一され、ついで唐に引繼がれ、支那の國家社會は再び安定した。さうして人口も増加し、農業も商工業も大に發達した。かくの如く、第二の時代は單純でなく、種々の變遷を経たのであるが、大體から云へば、第一の時代に比較して商工業が發達し、自由競争の風がかなり盛であつたが、しかし爲政者はこれを抑制して貧富懸隔の弊を救はんことを望み、農業も商業も制限を被つた時代であつた。

第三は唐の中頃より明に至る時代である。均田法は安史の亂の後、全然崩壊し了り、土地は再び私有に歸した。同時に土地兼併が益行はれ、小作人が増加し、反對に自作農は減じた。工藝の進歩が著しく、陶磁器・漆器は精巧を極め、商業の發展も顯著であつた。支那では、古來、商店は市の内に設くべき定めであつたが、それが唐の中頃より弛みそめ、北宋に至つて全く廢れ、商店は都會の内に入る處に設けられ、同時に從來營業に加へられた時間上の制限も撤せ

られ、商業は極めて自由と爲つた。同時に貨幣經濟は益發達し、紙幣が起り、銀も流通した。元より明にかけて幾多の曲折を見たのではあるが、要するに此の時代の大勢として、産業は國民の自由競争に放任せられ、従つて交換營利の爲めにする生産が盛になり、富は頗る増殖したと見てよいのである。ついでに政治機構について云へば、秦以後は、大體、中央集權的官僚政治といふべきであるが、幾分細やかに觀れば、漢代は建國の功臣並に帝室と關係深き人々を中心とした官僚政治、南北朝は、大體、高門世族を中心としたところの其れ、唐宋特に宋に於いては世族は勢を失ひ、科擧が重んぜられ、人材中心の官僚政治が行はれた。元は種族階級制度を用ひ、蒙古色目を中心として一種無類の政治を布いたが、明はこれを覆して大體宋代の舊に反したのであつた。

第四は明末より清末に至る時代である。この期間の特色は外國貿易が國民經濟上重きを爲したることである。外國貿易が善惡ともに國民一般の實生活に影響するやうになつたのはこの時代のこと、初には絹・茶等を輸出して多量の銀を獲得し、ついで鴉片を輸入して銀の流出を來すと共に國民の心身に無限の害毒を被らしめた。從來殆ど自給自足を營んだ支那はここに至つて國際經濟の仲間に入り、世界的經濟の脈搏に觸れることと爲つたのである。

第五は清末日清戰爭以後今日に至る時代である。この期間には、日清戰爭について北清事變・革命・軍閥の割據鬭争・國民政府の北伐等、幾多の事件がうち重つて現れ、政治的社會的の目まぐるしい變化と共に經濟部面に於いても、機械工業が起り、資本主義的經營が起り、同時に外國との經濟關係が愈密接と爲つた。此等の事業は政治の不善と外國資本の壓迫のため、必しも順調に發達し得なかつたとは云へ、新氣運の發生したことは認めなければならぬ。

以上五つの時代分けは、勿論不完全ではあるが、ともかくもこれに依つて、支那經濟發展の大勢を説明することが出来ると思ふ。

第二章 戸 口

支那の戸數口數に關する統計は、秦以前に就いては傳へられて居らぬ。今日存する最古の其れは前漢平帝の元始二年〔2〕の統計であつて、漢書地理志に見えて居る。即ち戸一、二、三、六、六、二、口五九、五九四、九七八である。漢代には戸籍も存在したが、別に毎年八月人口調査を行ひ、之を案比又は算人と呼んだ。此の人口調査は人頭税の賦課を正確公平にすることを主なる目的としたもので、人頭税は人を算して賦課するが故に算賦と呼ばれたのである。右元始二年の戸口統計も此の人口調査の結果として現れ來つたもので、支那歴代の戸口統計の中で最も正確に近いものと認められて居る。後漢の戸口は續漢書郡國志に見えて居るが、それに依れば、

光武中元二年〔57A.D.〕	戸	四、二七九、六三四
	口	二一、〇〇七、八二〇
明帝永平十八年〔75A.D.〕	戸	五、八六〇、五七三

章帝章和二年 [68A.D.]	口	三四、一二五、〇二一
	戸	七、四五六、七八四
	口	四三、三五六、三六七
和帝元興元年 [105A.D.]	戸	九、二三七、一一二
	口	五三、二五六、二二九
桓帝永壽二年 [156A.D.]	戸	一六、〇七〇、九〇六
	口	五〇、〇六六、八五六

である。光武・明帝等の時代即ち後漢初期に於いて戸口の少いのは、王莽の時飢饉疫癘が相繼いで到り、次いで群雄割據の世となつて、光武の統一に至るまで戦亂が打續いたので、人口が増加せず、場所に依つては寧ろ減少したことに因り、又一つは騒亂の爲め戸籍も紊れ、人口調査も十分に行はれなかつたことにも因るものと解せられる。其の後平和が確立されるに従つて、戸籍や人口調査も次第に確實となり、又た實際人口も増加し、遂に戸数は千萬を越え、口數も五千萬以上に及んだのであらう。

次に三國及び晉南北朝の人口統計は、續漢書郡國志注や晉書地理志や通典などに見え、南北朝及び隋代の人口統計は、通典・隋書地理志・魏書地理志等に見えて居る。此れに依れば、三國時代の戸數は大略百五十萬許、口數は七百五六十萬許と爲り、晉の武帝の太康元年 [280A.D.] 天下を統一した時の調査では、戸二百四十萬、口一千六百萬となつて居る。南朝では宋の孝武帝の大明八年 [454A.D.] に、戸九十餘萬、口四百八十萬餘、陳の末に、戸五十萬、口二百萬餘と傳へられ、北朝では、後魏の末に戸三百三十七萬餘、後周の末年に戸三百五十九萬、口九百萬餘と傳へられて居る。隋は後周に代はつて北支那を掌握し、繼いで陳を滅して支那全國を統一したのであるが、煬帝の大業二年 [605A.D.] の統計では、戸八百九十萬餘、口四千六百一萬餘となつて居る。

右に述べた所に依れば、三國から南北朝の末までの人口統計は、後漢中葉以後の其れに比して非常に減少して居る。さうして隋に至つて遂に激増して居る。此れは如何に解釋すべきであらうか。私は此の時代の或る期間に於いては、實際人口が減少したと推測する。三國戦亂の後、晉が天下を統一したけれども、忽にして五胡の騒動と爲り、支那史上最も暗黒な時代と出現し、戦争虐殺掠奪等が盛に行はれ、漢人は相率ゐて江南に流徙した。此の期間即ち西晉末から東晉に互る時期に於いては支那の人口は恐らくは減少したであらう。所謂五胡の諸蠻族は、塞外から支那内地に移住したので、支那の人口はそれだけ増加したはずであるが、しかし

外民族の移住に因る人口の増加は、大亂の爲めに起つた漢民族の減少を償ふことは出来なかつたであらう。さうして南北朝時代に入り社會が稍安定すると共に、人口は復た次第に増加しつつあつたであらう。従つて宋・陳・後魏・後周・隋等の實際の戸口は前に掲げた數字よりは餘程多かつたのであらうが、當時人頭税廢れて戸口調査の制度も行はれず、又た租税力役が重かつた爲め、人民は戸籍より漏れんことを勉め、従つて戸籍も頗る紊亂して居たので、官府の統計と實際の戸數口數との間に少からぬ隔たりを生じたことと察せられる。隋に至つて戸口統計が急に増加したのは、主として、此時尚書僕射高潁が戸籍を整理し、同時に力役の賦課を公平にして、富者に軽く貧者に重き弊を一洗し、多數細民をして喜んで戸籍に登録せられしめたことに因るのであつて、其の大意は隋書食貨志に見えて居る。

唐の戸口は通典・舊唐書本紀・新唐書食貨志・同地理志・六典・唐會要等に載つて居るが、これに依ると、唐の初には、隋末争亂の餘を承けて戸籍を脱漏するものが多く、従つて戸口統計が頗る減少し、高祖の武徳年間には二百餘萬戸を算へ、太宗の貞觀中にも猶ほ三百萬に満たなかつたが、其の後次第に戸籍が充實され、

中宗神龍元年〔705A.D.〕 戸 六、一五六、一四一（1）

玄宗開元十四年〔730A.D.〕 戸 七、〇六九、五六五

口 四一、四一九、七一二（2）

玄宗天寶十三載〔754A.D.〕 戸 九、六一九、二五四

口 五二、八八〇、四八八（3）

肅宗乾元三年〔760A.D.〕 戸 一、九三三、一七四

口 一六、九九〇、三八八（4）

代宗廣徳二年〔764A.D.〕 戸 二、九三三、一二五

口 一六、九二〇、三八六（5）

同 大曆中〔766—779A.D.〕 戸 一、二〇〇、〇〇〇（6）

徳宗建中元年〔780A.D.〕 戸 三、〇八五、〇七六（7）

憲宗元和二年〔807A.D.〕 戸 二、四四〇、二五四（8）

穆宗長慶中〔821—824A.D.〕 戸 三、九四四、九五九（9）

文宗太和中〔837—839A.D.〕 戸 四、三五七、五七五（10）

等の數字が傳へられて居る。就中、玄宗天寶十三載の統計が最高記録であつて、九百餘萬戸、五千二百餘萬口を算へて居る。しかし通典の著者杜佑は、當時實際には少くとも千三四百萬戸

あつたので、「我朝文藝を以つて官吏を取り、實權胥吏に歸し、貨賄公行し、延いて戸籍確實を缺き、籍外の浮浪日に多かりし爲め、戸口統計の數字が斯かる程度に止まつたのだ」と云つて居る。杜佑は德宗時代に久しく財政を掌り、後遂に宰相と爲つた人で、當時の政治の實情に精通したはずであるから、其の説は大體信するに足るであらう。尙ほ肅宗・代宗の時、戸口統計が激減したのは、安史の大亂の後、人民の流亡するものが多く、戸籍の紊亂した結果であつて、德宗の時稍増加したのは、此時兩税法が施行せられ、戸籍編製の方針が變更せられたことに因るのである。支那では、古くから人民の移住を認めず、人民はすべて其の郷里に於いて戸籍に登録さるべきものとせられた。即ち極端な本籍主義であつたのである。然るに、兩税法施行の際、本籍人と寄留者と、この時代の言葉でいへば、土戸（或は主戸）と客戸とを併せて戸籍に登録することとした。當時の詔に「戸無主客、以見居爲簿」とあるのは、これをいふに外ならぬ。若しこの方針が十分に行はれたならば、戸口統計はこれより後大に増加したはずであるが、事實はさうでなく、僅に三四百萬戸の間を上下して居る。これは何故であらうか。

抑も兩税法は主として地稅と戸稅とから成立つた。地稅は土地所有者即ち主として土著の民に課するものである。戸稅は財産の多少に依つて定められた戸の等級（九等）に照して課せら

れる稅であつて、土著の外、外來の民をも課稅對象とするものである。然るに實際に於いては、人民の財産を調査分類して課稅することは容易でないので、便宜の取扱として戸稅を土地に割當て、土地所有者をして併せて戸稅を負擔せしめることが行はれ、穆宗・敬宗の頃にはそれが一般の規制と爲つて居たやうである。これは唐大詔令集に收められた寶曆元年の南郊赦などに依つて窺ひ知ることが出来る。かくて初には土地及び戸に課稅し、客戸をも課稅對象中に包容せんとしたけれども、後には専ら土地に課稅することになり、客戸は事實上課稅對象の外に置かれることとなつた爲め、地方官は客戸を戸籍に收錄することを勉めず、従つて戸口統計は甚しく増加するに至らなかつたものと思はれる。

次に宋の戸口は、宋史地理志、續資治通鑑長編、宋會要食貨一一・一二、文獻通考卷一一、玉海卷二〇、建炎以來朝野雜記甲集卷一七、包孝肅奏議卷七、侯鯖錄卷一、楓窓小牘卷上等に見えて居る。此れに依つて其の大要を擧げると次の如くである。

太祖開寶九年 (978 A.D.)	戸	三、〇九〇、五〇四 (13)
眞宗天禧五年 (1021 A.D.)	戸	八、六七七、六七七
	口	一九、九三〇、三二〇 (14)

仁宗嘉祐八年 [1063A.D.]	戸	一二、四六二、三一七
	口	二六、四二一、六五一 (15)
神宗熙寧八年 [1075A.D.]	戸	一五、六八四、五二九
	口	二三、八〇七、一六五 (16)
哲宗元祐元年 [1086A.D.]	戸	一七、九五七、〇九二
	口	四〇、〇七二、六〇六 (17)
徽宗大觀四年 [1104A.D.]	戸	二〇、八八二、二五八
	口	四六、七三四、七八四 (18)
孝宗乾道二年 [1166A.D.]	戸	一一、三〇二、八七三
	口	二六、八四五、〇八五 (19)

太祖の時、戸口統計の少かつたのは、唐の初に於ける同じ現象と同様の理由による。其後逐次増加して、大觀四年には戸二千餘萬、口四千六百餘萬に及んだのであるが、但だ異様に感ぜられるのは戸數に比して口數の少いことである。此れに就いては南宋孝宗時代の人李心傳も、其の著「建炎以來朝野雜記」⁽²⁰⁾に於いて、「西漢の戸口は、十戸にして四十八口に當り、東漢の戸口は、率ね十戸にして五十二口に當り、唐の人口も至盛の時十戸にして五十八口有奇に當

る。本朝元豐より紹興に至るまでの戸口は、率ね十戸にして二十一口に當る、一家ただ兩口のみに、則ち是の理無し、蓋し漏口多きなり」と論じて居るが、如何にも左様であらう。右の戸數口數は俱に實際に比して少數であつたらうが、戸數は口數よりは比較的確實であらう。今假りに一家族平均五人として、大觀二年の戸數統計に就いて口數を求めると、一億四百四十一萬一千二百九十人となる。これは勿論精確ではないが、ともかくも稍實際に近いものと見て差支あるまい。この數字が唐の極盛期たる天主十三載の口數統計に比べて二倍であることを見出す時、吾等は宋代に於ける人口の著しき増殖を否定することが出来ない。孝宗時代の戸口の減じたのは、主として、南渡後領土の縮小した結果である。

前に掲げた戸口表には省略したが、宋代の戸口統計には、主戸客戸を區別して主若干戸客若干戸と算へ、これを合計した場合にも數字の上に主客の二字を冠することが多い。主戸は唐代の土戸と同様で、本來土著の戸であり、客戸は外來流寓の民であることは前に述べた如くであるが、唐代でも客戸にして土地を買入れて其の地に定着したものは土戸に編入されたやうである。宋代に於いては主戸客戸の別は主として土地の有無に依つて決せられた。即ち外來の民でも土地を持てば主戸と爲り、土著の民でも土地を失へば客戸とせられ

たのである。唐の兩税法施行の際には主客戶ともに戸籍に收める方針であつたけれども、其後客戶は閑却され籍帳を漏れるものが多かつた。然るに宋代になると復た客戶を戸籍に收め、戸口統計にも加へることとしたのである。これは客戶が身丁錢を負擔し、時として科率をも負擔し、公課割當の上で無視することが出来なかつたと同時に、納稅者として最も重要な主戸の漏籍を防ぐ爲めにも客戶を戸籍に上せ、主客の別を明にして置くことが必要だと考へられたのに因るのであらう。さて文獻通考卷一一、玉海卷二〇等に依れば、眞宗天禧五年の全國總戸數は八、六七七、六七七戸で、主戸は六、〇三九、三三一、客戶は二、六三八、三四六である。この場合、客戶數の總戸數に對する比率は〇、三〇四となる。又仁宗寶元元年の總戸數は一〇、一七九、九八九、主戸は六、四七〇、九九五、客戶は三、七〇八、九九四であつて、客戶の比率は〇、三六四となる。文獻通考に引かれた、元豐三年、畢仲衍の上つた中書備對に依れば、總戸數一四、八五二、六八六、主戸一〇、一〇九、五四二、客戶四七三、一四四で、客戶の比率は〇、三一九である。主戸は土地を持てるものであるから、主として自作農と大地主とから成立ち、數に於いては自作農が多數を占めたであらう。土地無き客戶には様々の人民を含んで居たであらうが、その大多數は小作人即ち佃戸であ

つたらう。されば主戸客戶の比率に依つて自作農と小作人との多少をも窺ふことが出来るはずで、北宋時代には小作人が相當多數であつたと同時に、自作農はそれよりも更に多數で、自作小作の行はれた土地の面積は姑く置き、戸口について云へば、小作人よりも自作農の方が多かつたとして大過無いであらう。それにしても小作人がかなり多數に上つたことは頗る注意すべき現象である。蓋し小作人の發生は戰國の頃から既に見受けられるけれども、其後唐の中頃までは、大地主の田園の耕作には猶ほ主として奴僕が用ひられ、さうして唐の半過から五代・宋代に互つて小作の慣行が急に盛になり、奴僕を用ひることは衰へたのである。右に擧げた客戶比率の如きもそれを示す重要資料の一つに外ならない。元明の戸口は、元史本紀及び地理志、明實錄、明會典、明史食貨志、續文獻通考等に見えて居る。その大略は次の如くである。

元世祖至元二十七年〔1290A.D.〕 戸 一三、一九六、二〇六

口 五八、八三四、七一一〔21〕

明太祖洪武二十六年〔1393A.D.〕 戸 一六、〇五二、八六〇

口 六〇、五四五、八一二〔22〕

同孝宗弘治 四年 [1491A.D.]	戸	九、一一三、四四六
	口	五三、二八一、一五八 (23)
同世宗嘉靖中	戸	九、三五一、九〇七
	口	五八、五五七、二三八 (24)
同神宗萬曆 六年 [1578A.D.]	戸	一〇、六二一、四三六
	口	六〇、六九二、八五六 (25)

元の統計に主客戸の別は無かつた。これは統一の初、新に戸籍を造り、又た租税制度をも改め、舊き主客の區別は不必要と爲つたからである。明の統計は歴代の例と異なつて國初に於いて最も多く、その後反つて減少して居るが、これは太祖が戸籍の整理に努力し、特に洪武二十三年、國子監の學生を各地に派遣し、州縣官と協同して逃移の戸を調査せしめ、それを強制して原籍に歸還せしめたので、二十六年の戸口統計は特に比較的實際に近かつたこと、其後北方では人民の逃移が夥しく、南方では逃戸絶戸を虚報して戸籍を脱漏するものが多かつたが、さりとて洪武二十三年のやうな處置を繰返すことは出來ず、従つて事實人口が増殖して居るに拘はらず、統計は増加しなかつたことに因るものと思はれる。蘭莊の「駒陰冗記」⁽²⁶⁾には、嘉靖中

の戸口統計に就いて、「民間、口の籍に入るもの、十に六七を漏す」と云つて居るが、これに依つても脱漏の甚しかつたことが窺はれる。

清代の人口は、清實錄、東華錄、光緒會典事例、清文獻通考、清續文獻通考、戸部則例、俞正燮癸巳類稿等に見えて居る。次に其の大要を掲げる。

清世祖順治 九年 [1652A.D.]	一四、四八三、八五八口 (27)
同 順治十八年 [1661A.D.]	二一、〇六八、六〇九丁
同 聖祖康熙四十九年 [1710A.D.]	二二、三一二、二〇〇丁
同 康熙五十年 [1711A.D.]	二四、一七〇、九九九丁
同 高宗乾隆十四年 [1749A.D.]	一七七、四九五、〇三九口
同 乾隆二十九年 [1764A.D.]	二〇五、五九一、〇一七口
同 乾隆五十七年 [1792A.D.]	三〇七、四六七、二七九口
同 文宗咸豐 元年 [1851A.D.]	四三二、一六四、〇四七口 (28)

右の統計には或は丁とあり或は口とあるが、いづれも人口を意味するものと認められて居る。さうして人口統計だけで戸數統計を缺いて居るが、これは役の制度の變更と關係あることである。役は宋以來、大體、戸の等級と丁の數とをにらみ合せて割當てられたが、明の中葉以

後役が銀納と爲り、一條鞭法成立の後にはそれも土地に課せられることとなり、戸数の調査及び統計が殆ど無用に歸したので、清朝に至つて遂にこれを廢し了つたのである。又た人口統計は乾隆以後年を逐うて激増して居る。此れは康熙五十二年の税制改革の影響に因ることが多いやうである。即ち此の年、役の後身たる丁銀の制度に一大改革を施し、康熙五十年の丁數に依つて丁銀の額數を一定し、爾後出生の民は盛世滋生人丁と稱して、永く賦を加へず、唯其の數目を報告するに止めしめることとした。此の立法が行はれた後、人口は反つて以前より正直に報告せられ、その統計が實際に近いものとなつたやうである。尙ほこれより先、清朝では人口調査には専ら男子を算へた。この事は清通考卷一九、乾隆十一年の上諭に依つて窺ひ知られる。然るに乾隆五年、從來行はれ來つた五年一回の人口調査即ち編審の外、毎年末、保甲冊に依つて人口を造報すべきことが定められ、やがて編審は廢れて保甲に依る造報が専ら行はれたが、保甲冊には男女とも掲載せられたところから、人口統計も自ら男女兩性を包括するやうになり、その數字を益大ならしめたやうである。乾隆以後、人口統計の激増したのは、かかる事情に因つたものと考へられる。

以上述べ來つたところを概括すれば、支那の戸口は、前漢末に於いて、既に一千二百萬戸、

五千九百餘萬口を算へたのであるが、其後晉末に至つて、大動亂の爲め一時人口の減少を見、繼いで復た次第に増加して、唐の盛時には少くも一千三四百萬戸に達したらしく、宋代には愈増加して二千餘萬戸と爲り、人口は一億以上に及んだやうである。其の後消長はあつたらうが、大體に於いて逐次増殖し、清朝末期には四億の人口統計を得るに至つたのである。

- 1 唐會要卷八四。
- 2 舊唐書玄宗紀。
- 3 同上。
- 4 通典卷七。
- 5 舊唐書代宗紀。
- 6 通典卷七。
- 7 舊唐書德宗紀。
- 8 舊唐書憲宗紀。
- 9 唐會要卷八四。
- 10 同上。
- 11 「通典」卷七丁中。
- 12 宋敏求編「宋大詔令集」卷七〇。
- 13 文獻通考卷一一。

- 14・15・16 同上。
- 17 宋史地理志。
- 18 同上。
- 19 文獻通考卷一一。
- 20 「建炎以來朝野雜記」甲集卷一七、本朝視漢唐戶多口少之弊。
- 21 元史地理志一。
- 22 萬曆會典卷一九。
- 23 同上。
- 24 駒陰元記。
- 25 萬曆會典卷一九。
- 26 蘭莊「駒陰元記」は說郛續編百十二及び五朝小說第二十四冊に收められて居る。
- 27 順治九年乃至乾隆五十七年の人口統計は癸巳類稿卷一二に據る。
- 28 東華續錄咸豐卷一二。

第三章 土地制度

夏殷周三代に於いて、土地が國有であつて一般人民に均一に分配されたことは、「孟子」に見え、その分配額が周代に百畝(假りに周代の尺度が王莽時代のそれと同一であつたとして計算すれば我國の一町九反二畝餘に當る)であつたことは、「孟子」⁽¹⁾「周禮」⁽²⁾「荀子」⁽³⁾「穀梁傳」⁽⁴⁾「禮記王制」⁽⁵⁾「漢書食貨志」等に見えて居る。此等の文獻はいづれも土地が國有であつたと云はれる時代より遙か後世のもので、その中比較的古い「孟子」にしても周の東遷以後四百五十年ばかりに出來た書物である。支那古代に於ける土地國有制度の存在が的確な史料に依つて傳へられて居ないことは改めていふまでもない。但し國家なり公共團體なりが土地を所有するといふ制度は、古今とも經濟發達の低い社會に會いて屢行はれたことで、古代ゲルマニヤを始めとし、少からず例證も存するのであるから、支那古代にもかかる制度の存する可能性のあることは認めなければならぬ。また支那古代には、步・畝・夫といふ耕地面積の單位が設けられ、方六尺を步とし、百步を畝とし、百畝を夫とした(夫は戰國以後頃と改稱された)。此等の單位

の基準となつたものは夫即ち百畝の地面であつて、この夫といふ地面の大きさが先づ決定されて居つて、後これを百等分して畝とし、畝を百等分して歩としたものであることは、畝・歩等の大さ及び此等の語の本來の意義を考察することに依つて推定せられ、さうして夫といふ名稱は一夫即ち一人の成年男子（恐らく一家を代表する有婦の男子）がこの地面を管理し耕作したに本づくことと解釋せられる。一夫が後の百畝に當る地面を早くから管理し耕作したのは、それだけの地面が一夫即ち一家に分配された結果であつたかも知れず、また必しも公邊の分配を須たすとも、一夫婦を中心とする一家の耕作能力が略均等である爲め、その墾治耕作するところの地面が自ら略同じ大さとなり、それが夫と呼ばれるやうになつたのかも知れない。若し夫といふ單位が前の場合に由來するならば、それは土地國有制の存在を立證する好資料となるのであるが、強ちさうと決めるわけにはゆかぬ。要するにこれは疑問である。その事柄自體が古代社會に有り得ることであり、又た土地單位の規定にその痕跡かも知れないものがあるとするば、儒家の理想説として形づけてしまふことも出来ない。しかし「さういふ制度が有つたかも知れぬ」といふ以上に肯定することも出来ないのである。假りにこの制度の存在を認めるとしても、それは周の東遷若しくは春秋初期以前のこととしなければならぬ。それ以後に於いて土

地が人民の私有に歸して居たことは現在の文獻に依つて優に窺ひ知られる。

秦漢から三國・晉にかけて、土地私有制度は引續いて行はれ、其の必然の結果としては土地所有の状態が不均等となり、所謂富者は阡陌を連ね、貧者は立錐の地亡きに至つたので、爲政者は屢これを救濟せんと試みたが、概ね不成功に終つた。即ち漢の武帝は商人の土地所有を禁じ、哀帝は限田の法を立てて王公以下それぞれその地位に應じて土地所有高を制限したが、俱に暫時にして廢れた。王莽が漢に代つて新國を建てた時には、天下の田を王田と呼び、その賣買を禁じ、一家の田一井九百畝を過ぐることを得ずと定めたが、幾もなく取消された。晉の武帝は、三代の古制を恢復せんと欲し、戸主たる男子には田七十畝を占せしめ、其の妻には三十畝を占せしめ、丁男の戸を爲さざる者には五十畝を課し、丁女の妻たらざるものには二十畝を課するなど種々の規定を設けたけれども、十分に實施される暇無く、國亂れて空文に歸した。斯くて南北朝時代に入り、後魏孝文帝の太和九年（484）に至つて均田の詔が發せられ、土地國有制度が愈樹立されたのである。（晉の田制は晉書食貨志に見え、その文に男子一人占田七十畝、女子三十畝、其外丁男課田五十畝、丁女三十畝云々とある。近年、占田は限田の意味で、庶民の所有する田の限度を定めたもの、課田は晉の初に廢せられた屯田を形を變へて舊屯田民

に割當てたものといふ説が唱へられ、賛成者も少くないやうであるが、私はこれに與しない。男子「夫」七十畝、女子「妻」三十畝、合計百畝は當時一家の生活に必要な大さとせられたところで、土地享有の最小限であつて、最大限を定める限田ではない。但だ一家を爲すものは、貧富を問はず概ね若干の田を持つて居たので、規定の數に照して各自に整理せしめ、必しも官より與へないから、占の字を用ひたのであらう。分家しない丁年男女には官より田を與へることを原則としたので、課の字を用ひたであらう。制度の趣旨は萬民の土地利用の機會を均等ならしめんとするもので、私はこれを一種の均田法と見るものである。

後魏孝文帝の均田法の大要は下の如くである。民年十五に至れば、男子に露田四十畝を、女子には露田二十畝を給し、之を正田といふ。さうして通常更にこれと同數の田を増給し、名づけて倍田といふ。従つて露田は正倍合せて男子は八十畝、女子は四十畝となるが、これは穀物を栽種する畑であつて、歳七十に及び若しくは身死する時は官に還さしめる。男子には此の外桑田二十畝を與へる。桑田は樹木を植ふる土地で、右二十畝には桑五十樹・棗五株・榆三株を植ふるべからぬ。さうして身死するも之を官に還さしめず、子孫に傳へることを聽す。桑田若し現在の家口に比して足らざれば、之を補給し、若しくは自ら買ふことを聽し、又餘りあれば

賣ることを聽す。奴婢に對しては良民と同額の露田を與へ、牛一頭には露田三十畝を與へ、但し四頭を限りとする。毎年正月、人口の現状を查明して土地の授與回收を行ふ。地廣く人稀なる地方に於いては、民に定制に依つて田を授ける外、其の力の及ぶ所に従つて別に公田を借り耕すことを聽し、地狭く人衆き地方に於いては其の受くべき田土を酌減し、若し空荒の田ある處に移らんと願へばこれを聽す。地廣き所に於いては妄りに他に移住するを聽さない。民の新に家を爲す者には三口毎に一畝の割合を以つて宅地を給し、奴婢には五口毎に一畝を給する。租税は十五歳に至り、田を受けると同時に負擔し、七十歳に至り田を還すと同時に免除せられる。⁽¹³⁾云云。

抑も先王の制度と考へられた土地國有制の樹立は漢以來の爲政者が行はんと欲してしかも行ひ得なかつたところであるが、後魏の孝文帝に至つて急に實現されたのは何故であらうか。當時、晉末以來の大亂の餘を承け、土地・戸籍・租税・徭役の制が紊亂を極め、豪族や豪吏が私曲を逞しうし、其の結果、人民の流亡・田土の荒廢甚しく、土地に關する訴訟及び鬭争が續出し、何等かの救濟手段を必要としたのであつて、これは太和九年十月に降された均田の詔並に均田の發議者たる李安世の上奏文などに依つて明瞭に看取することが出来る。併し均田即ち土

地國有制の實行は決して容易ではない。孝文帝をして李安世の奏議を採擇し、斷乎として均田を決行せしめた理由は自ら別に存するであらう。帝は後魏の國俗を厭うて漢土の文化を慕うた。即ち儒教を尊び、明堂辟雍を造り、郊廟の禮樂を制し、同時に後魏本來の言語衣服を禁止して、専ら中國の言語衣服を用ひしめた。蓋し孝文帝の志は、漢土の文化に同化し、躬親ら先王の道を行はんとするに在つたのである。されば、帝が儒教の理想たる土地國有制を復興するの議を聞いて之を嘉納し、漢以後歴代行ひ得なかつた先王の遺制を己れ獨り實行するの名譽を擅にせんとしたのは當然であつて、帝をして均田を斷行せしめた有力な動機は其の熱心な儒教信奉であつたと見て妨げなからう。要するに一方に土地制度に大改革を施すべき必要があり、一方儒教主義の實行に熱心な天子があつて均田法は樹立せられたのである。

しかしながら均田法は、實は、あらゆる國民の土地使用を均等ならしめたものではない。上述の如く奴婢に對しても良民同様の露田を與へた。奴婢は其の主人の私有物であることは牛馬と同様で、獨立の人格を認められるものではない。されば奴婢に田を與へるのは實はその主人に田を與へる所以である。奴婢は上古から存在したが、戰國以後、特に増加したもので、後魏時代にも大官豪族等は數十人數百人の奴婢を所有したのである。さうして多數の奴婢を有する

程の人は同時に廣大な田園をも兼併して居たはずである。故に奴婢に田を與へるといふことは、やがて其の主人の土地兼併を或る程度認容する結果となる。かかる次第であるから、均田法が徹底的に行はれたとしても、決して眞に天下萬民の田土を均一ならしめたものでないことは明瞭である。又た當時小作制度も行はれ、大官等は流亡の民を收容して其の土地を小作せしめ、名づけて客戶・蔭人などと云つたが、均田法は小作人并に小作の行はれる土地は殆ど不問に付したやうである。此等に依つて觀れば、均田法は主として中以下の人民の土地使用の機會を均等ならしめたものであつて、其の立法の根本主義は大官豪族等上流階級に對しては殆ど適用されなかつたと謂つて差支無いやうである。

後魏は、晩年、東魏・西魏の二國に分裂し、東魏は北齊となり、西魏は後周となり、北齊・後周並に南朝の陳は隋に依つて統一されたのであるが、東西魏・齊・周を通じ、其の細目には幾多の異同改廢があつたけれども、大體、後魏孝文帝の均田法と同様といつてよい土地國有制度が行はれた。但し北齊は奴婢所有者の身分に從つて土地を與へる奴婢の數を制限して、親王は三百人、嗣王は二百人、以下次を逐うて遞減し、八品以下の官及び庶人は六十人とした。これは、いふまでもなく、奴婢に無制限に土地を給するの弊害に堪へかねて行つた改革である。

(17) 隋の田制は大體北齊の其れに依つたものであるが、男子に露田永業田（後魏の桑田）を給するだけで、婦人には露田を給せず、又た奴婢に田を給することを罷め、諸王以下都督に至る官人に對して百頃以下の永業田を給したことが目だつて相違して居る。婦人に露田を給することを罷めたのは、恐らくは人口の増殖其他の理由に依つて土地の拂底を來す虞れがあつたからであらう。奴婢に田を給するを罷めたのと、諸王以下に永業田を給したのとは深い關係あること勿論で、奴婢に田を給することに依つて間接に大官富豪の兼併を許容する代りに、公然王公以下に相當廣大な土地を授け、從來の弊害を輕減せんと試みたのであらう。尙ほ隋の田制に於いて注意すべきは、後魏以來の均田法が北支那のみに行はれたのに引換へ、南北各地を通じて一律に實施せられたことである。

(18) 唐の田制も、要點に於いては略隋のそれと同様であつたやうであるが、一應其の梗概を述べ置かう。男子十八歳に至れば、口分田（後魏の露田に當る）八十畝、永業田二十畝を給し、六十歳に至れば、口分田の一半即ち四十畝を官に還さしめ、死すれば、其の剩す所の一半をも還さしめる。永業田には桑・棗・榆等を植ゑしめ、老死（六十歳以上を老といふ）に至るも官に還すことなく、長く子孫に傳へることを聽す。篤疾廢疾の者にも亦口分田四十畝を給する。

婦人には田を與へないのを原則とするが、寡妻妾には特に口分田三十畝を給する。篤疾廢疾寡妻妾にして一戸を爲すものには以上の外別に田を補給して丁男の半に達せしめる。十七歳以下の男子にして一戸を爲すものに對しても同様の取扱ひを爲したやうである。一郷の土地が住民に分配するに十分である處を寛郷といひ、分配するに不足である處を狹郷と云ひ、寛郷では如上の規定に照らして田を與へるけれども、狹郷では其の半分を與へる。口分・永業の外、園宅地として家族三人毎に一畝を與へる。右は専ら農民に對する規定であるが、工人・商人に對しては口分・永業俱に農民の半分を與へる。僧侶・道士は口分三十畝、尼及び女冠には二十畝を與へる。官に隸屬する賤民に雜戸・官戸・奴婢の三種があつたが、この中雜戸には農民と同様に土地を與へ、官戸にはその半分を與へる。奴婢には官有私有とも土地を與へない。王公以下の有爵者並に職事官・散官・勳官には地位に應じてそれぞれ永業田を與へ、其の額は最高百頃、最低六十畝である。庶人に與へた土地は、勿論賣買質入等を禁止するが、貧にして葬儀を營む能はざる等特殊の場合にはこれを許す。王公以下の永業田は賣買質入等勝手であつて何等の禁限もなかつた。以上は唐の田制、委しく云へば高祖の武德年間に定められた田制の要旨である。获生徂徠の度考に依れば、口分田永業田の合計は我國の五町六反二畝四十歩許で（後魏

の露田正倍八十畝、桑田二十畝も之と大體相近いものと見てよいやうである。此れに就いては色々考ふべきことあれども略す、純粹の耕地たる口分田だけでも四町五反餘となる。唐代に於いて——溯つては後魏以來——男子一人に對して與へた田土は此の如く廣大な地面で、これを、戰國時代に於いて、周代一夫の田と傳へられ、少くとも戰國の頃には一戸分の田地として適當と認められたであらうところの我が大略一町九反許の土地に比すれば、大いなる懸隔があるが、何故にかかる懸隔を生じたか。その理由は色々あらうが、主なる一つは、六朝時代に牛耕が普及發達し、農民の耕作能力の増大したことであらう。租庸調制度に就いての説明は省略する。

唐の均田制は初から完全に行はれたのではないが、其後時の移ると共に益々破綻を生じた。其れは、要するに、制度と社會の實狀とが適合しなかつたからのもので、當時大官豪族など資力あるものは規定以上に土地を占有せんとするの慾望に燃え、小民は動もすれば規定の口分・永業をも守るの力を失ひ、法に違つて或はこれを質入し、或はこれを賣却し、かくして富貴の士の掌中に入つて均田法の適用を受けない土地が多くなり、隨つて均田法の適用を受ける土地が減少すると共に、一方に於いては、戶籍の整頓、人口の孳殖に因つて土地の分配に與る

べきものが次第に増加した。その結果は大體二つの事象となつて現れた。一つは、均田法の規定に照らして土地を授與回收することが困難となり、新に土地享受の資格を得た人民に對しても僅に規定の土地の幾分を與へるに止める場合が多くなり、天下を擧つて狹郷たらんとするの傾向生じ、制度を維持することが困難であると同時に、強ひて維持することが意義乏しきに至つたことである。今一つは均田法を適用する土地が減少し、且つ規定の如く土地を與へることが出來ない爲め、完全に租税即ち租庸調を徵收することも亦た困難となり、政府の收入が減少し、財政の基礎を危うせんとしたことである。この二個條に因つて、玄宗の開元・天寶時代には均田法は著しく廢れ弛み、僅に其の形式を保持するに過ぎなかつたが、安祿山の大亂の後に至つて遂に全く崩壊し、土地は個人の私有に歸し了り、同時に税法も亦改革せられて兩税法の出現を見ることとなつたのである。

均田法の效果利害を明にすることは容易でないが、その効果の一つとしては、土地兼併の勢を或る程度まで喰止め、多數人民を一種の自作農たる地位に支持したことを擧ぐべきであらう。さうして均田法の崩壊に伴つて土地兼併が盛になり、同時に小作人が著しく増加したやうである。全體大地主の土地を耕作したものは、最初は奴僕であり、ついで小作人が發生し、奴

僕と並んで農業労働に服したのであるが、小作人の發生も頗る古く、戰國時代まで跡づけ上ることが出来る。しかし戰國秦漢は勿論、南北朝時代までは小作人はさまで多からず、大官豪族の大地面は主として奴僕によつて耕種されたのであるが、均田法の崩壊と前後して農耕に奴僕を用ひることが衰へ、小作人の使用が流行した。當時大地主の所有する大地面は、莊・莊田・莊園などと呼ばれ（莊・莊田等の語は後魏の頃から存したが、それが盛に用ひられたのは唐の中期以後である）、そこで耕作に従事したものは主として小作人であつた。彼等は客戸・莊戸・佃戸などと稱へられ、その納める小作料は莊課と呼ばれ、莊課の率は大抵收穫の二分の一であつた。莊田の典型的なものは、その主人の居宅若しくは別莊と耕地と小作人の住居とから成立ち、その地面が廣大で、小作人が數十人數百人に及ぶ場合には居然として一大村落を爲した。小作制度が流行したのは、奴僕よりも小作人の方が能率が高く、たとひ不廉な小作料を拂つても、小作人を用ひる方が地主に取り有利であつた爲めと想像せられる。

宋代に入つて奴僕を耕作に用ひることは愈衰へ、小作制度が益發達した。北宋時代に於ける全國の自作農と小作人との割合は二と一ぐらゐであつたやうで、自作農の方が餘程多かつたのであるが、しかし小作制度も南北に互つてかなり廣く行はれたのである。然るに元になると、

小作制度は主として江南に行はれ、江北の土地は主として自作農に依つて耕された⁽³⁰⁾。これは金人の侵略、蒙古人の南下に依つて北方が騒亂の巷となり、この方面に於ける土地所有階級が没落した結果のやうである。同様の情勢は明末の頃まで續き、清初には、山東省に小作が相當行はれ⁽³¹⁾、ついで他の地方にも幾分傳播した。しかし現在でも小作は南方が盛で、北方には概して自作若しくは自作兼小作が多く、純粹の小作人は僅少であるらしい。明清の小作料は分租包租の二種に分れ、前者は比率を一定し、年々收穫高に照してこれを納めしめ、後者は租の數量を具體的に確定したのであるが、双方ともその標準が二分の一であることを唐宋時代と同様であつた。

唐代均田法の施行せられた時にも、土地不足の爲め必しも規定通り百畝の田が與へられたものではなかつたが、ついで土地が私有に歸して後、自作農一人當りの耕地は大抵百畝以下であつたらしく、宋代の文獻にも、或は七十五畝（沙州文錄補⁽³²⁾）、或は三五十畝（續資治通鑑長編⁽³³⁾）、或は四十畝（吳郡志⁽³⁴⁾）、或は二十五畝（宋史食貨志⁽³⁵⁾）、或は二十畝以下（淨德集⁽³⁶⁾）等の例が見えてゐる。百畝以上も勿論あつたらうが、一寸眼にふれない。かかる情勢は其後長く繼續し、現在でも、南北とも一戸の所有地は、小農で二三十畝、中農で五十畝許と云はれて居る。小作人

一人當りの地面もこれに髣髴たるものであつたやうである。
 土地制度に關聯する特殊問題として、宋の經界、公田、金の猛安謀克田土、元の經理、明の勳戚莊田、衛所屯田、清の旗地等があるが、ここには省略する。

- 1 「孟子」滕文公章句上。
- 2 「周禮」地官大司徒、小司徒、遂人、夏官大司馬等。
- 3 「荀子」王制篇。
- 4 「穀梁傳」宣公十五年。
- 5 「漢書」食貨志上。
- 6 拙著「支那古田制の研究」五〇—六一頁。
- 7 「漢書」武帝紀、元狩五年。
- 8 「漢書」哀帝紀、綏和二年六月。
- 9 「漢書」食貨志上。
- 10 「晉書」食貨志。
- 11 「魏書」食貨志。
- 12 宮崎市定氏「晉武帝の戶調式に就いて」(東亞經濟研究第一九卷第四號)。
- 13 「魏書」食貨志。
- 14 魏書卷七高祖紀上。
- 15 魏書卷五三、季孝伯傳、安世の條。

- 16 「隋書」食貨志。
- 17 同 上。
- 18 「舊唐書」食貨志上。「新唐書」卷五一食貨志。「唐會要」卷八三租稅上。「冊府元龜」卷四九五田制。「通典」卷二田制。唐律疏議卷一三戶婚中。
- 19 これは第二章に述べた主戸客戸の比率に依つての推測である。尙ほ拙稿「宋代の主客戸統計」(史學一二卷三號)を参照されたい。
- 20 「元史」成宗本紀一、至元三十一年十月辛丑の條等。
- 21 「聖祖聖訓」卷二一、康熙四十二年八月甲申上諭等。
- 22 「沙州文錄補」雍正二年戶籍殘卷。
- 23 「續資治通鑑長編」卷一六八、皇祐二年七月丁度上奏。
- 24 「吳郡志」卷一九水利上、熙寧三年、郝直上奏。
- 25 「宋史」食貨志上、農田引丁謂會計錄。
- 26 呂陶「淨德集」卷二、奏乞寬保甲等第并災傷免冬教事狀。

第四章 食料生産

食料若しくは飲料として最も重要な穀物並に甘蔗砂糖茶の生産について、その發展の一斑を述べることにする。

一 穀物

古代支那で栽培された穀物は詩經其他の古典に依つて窺はれるが、その主なるものは黍・稷・稻・粱・菽・麥・麻などである。黍・稻・麥・麻は我國で用ひられる意味そのままに理解すればよい。稷については古來解釋が區々であつたが、今の高粱であることは清の程瑤田の研究によつて確定した。粱はあは、菽はまめである。麻には實を結ぶものと結ばないものとあつて、後者は莖から苧を取り得るだけであるが、前者は、その外、その實を食料に供することが出来る。古代支那人は兩方とも作り、これを穀物の一つに算へたのである。此等の中、稻は主と

して揚子江沿岸以南に作られ、北方黄河地方に於いては、水利ある部分例へば陝西の渭水、涇水の沿岸のやうな處に多少作られただけであつた。黄河地方に一般に栽種されたのは黍稷麥菽等の雜穀であつた。されば南には稻作が行はれ、主として水田が設けられ、北には雜穀が作られ、主として陸田が設けられたので、その境界は大體淮河であつたやうである。これは周禮の職方氏の記事に依つて略推定することが出来る。この後、北方に於いても水田の開発が多少行はれ、又揚子江以南にも雜糧の栽培が發達したけれども、穀物分布の大勢には著しい變動なくして近代まで及んだやうである。雜穀の中で最も重要なのは小麥であるが、明の崇禎中に著された「天工開物」⁽²⁾には「燕秦晉豫齊魯諸道、烝民粒食、小麥半に居る、而して黍稷稻粱は僅に半に居る、西は川雲を極め、東は閩越吳楚の腹に至るまで、方長六千里中、小麥を種うる者、二十分にして一」とあつて、今の河北・山西・陝西・河南・山東諸省に於ける民食の二分の一は小麥であり、従つて小麥の栽培の最も盛であつたこと、四川より蘇浙に亙る南方一帯では小麥が全耕地の二十分の一に當る地面にしか栽種されなかつたことを傳へて居る。顧ふに北方雜穀地帯に於いて小麥が最も多く作られたのは、非常に古くからのことであつたらう。さうして明末清初の頃までは、小麥は主として北方に於いて産出したのである。然るに降つて民國とな

ると、小麥の産額は河南・山東・江蘇・河北・湖北・安徽・四川・陝西・山西といふ順序に爲り、江蘇・湖北等南方の麥作が大に發達したことが、歴年の統計⁽³⁾に示されて居る。これは恐らく清末以來のことであらうが、著しい變化と謂はねばならぬ。

稻は、分布區域にはさしたる變動は無かつたが、品種に於いて重要な發展が認められるのである。稻には古くから黏するものと黏せざるものとがあつて、黏するものは稷又は秬と云ひ、黏せざるものは秠又は稷と云ひ、秠の最も黏せず、且つ早く熟するものを秠と云ひ、これを總稱して稻と云つた。さうして漢代は勿論、南北朝の頃までは、いづれも早く播種されたので、後漢の農書たる「汜勝之書」⁽⁴⁾、晋の郭義恭の「廣志」⁽⁵⁾、後魏の賈思勰の「齊民要術」⁽⁶⁾などには、稻は三四月（陰曆）に種うべきものとせられて居る。従つて收穫も早かつたやうで、廣志には各種の稻が大抵七月に熟するやうに見えて居る。然るに南宋末になると、早く蒔かれて早く實るものもあるが、晩く蒔かれて晩く實るものも多く出来、従つて其の品種が頗る多數となつたことが、南宋の地方志、特に「淳祐玉峯志」⁽⁷⁾、「寶祐琴川志」⁽⁸⁾などに依つて知られ、さうしてそれを明清の農書や地方志の記載と較べると、明清時代の主なる稻の品種が南宋末に既に成立しつゝあつたことが見出される。例へば明の黃省曾の「理生玉鏡」⁽⁹⁾に列擧された稻の主要品種

は、外來種たる占城稻を除いて、三十一種であるが、其中、稻の上品で、九月熟し、粒細長にして白く、味甘くして香しと云はれる箭子稻、粒大にして芒赤く、五月種ゑて九月熟する紅蓮稻、粒大にして色白く、稈軟にして芒ある雪裏揀などをはじめ、約二十三の有名な品種は、悉く南宋末から存したのである。これに依つて、南北朝時代までは稻の栽培が早く行はれ、其の品種も多くなかつたやうであるが、南宋末には、早中晩様々の稻が出来、多くの優秀な品種が成立し、近代支那に於ける主なる品種は既に南宋末に出揃ひ、その結果として味のよい米が多量に生産されたことが窺はれ、さうして南宋末に於ける多數且つ優秀な品種は隋唐から北宋南宋に互る期間、一口に云へば唐宋時代に發達したものと解釋せられ、唐宋の文化は此の方面に於いても燦爛たる光彩を放ちつたことが認められるのである。

尙ほ注意しなければならぬのは、宋以後に於ける占城稻の栽培である。北宋の初期、揚子江沿岸地方が屢旱害に遭ひ、水田の收穫乏しきに困しんだので、宋の眞宗は占城國(Champa)の稻が水旱に耐へるよしを聞き、その種子三萬斛を輸入して、江南・淮南・兩浙の諸路に分配して播種せしめた。この試みは大に成功し、南宋に及んでは、江南東西路では耕地の八九割は占城稻を植ゑるやうになり、兩浙淮南の外、湖南でも廣東でもこれを作つた。かくて元明を經

て清代に至り、占城稻は江蘇・安徽・浙江・江西・湖南・湖北、即ち揚子江沿岸の六省よりして南の方兩廣に及ぶ廣い地域に栽培されたのである。占城稻は早稻の一種で、四月に植ゑ、三四月にして熟するところから、その刈跡に、若しくは刈揚前苗莖の行間に中稻又は晚稻を植ゑることが起り、唐宋以來の中晚稻の優秀品種と占城稻とを組み合せた二毛作が成立した。これは南宋の時から多少行はれて居たが、明清に至つて益盛になり、沿江六省では盛に稻の二毛作を行ひ、兩廣では三毛作にさへ及んだのである。但し江蘇南部では、清末、小作人が己の所得と爲るところの麥作の便を圖る爲め、占城稻の栽培を怠り、その爲め自ら一毛作となつた⁽¹⁰⁾と傳へられる。

二 甘蔗 砂糖

甘蔗の原産地は交趾支那から印度に互る地方であつたので、支那へも此の方面から傳はつたやうである。従つて先づ今の廣東方面で作られ、戰國時代に湖南・湖北の邊に傳はり、南北朝には江西及び江蘇南部に擴がり、ついで四川でも福建でも作られた。甘蔗は、最初は唯だその

莖を噉んで甘い汁を吸ふのみであつたらうが、やがてこれを搾つて汁を取ることが行はれ、その濃厚にして飴の如きものを糖といつた。やがて糖を煎、乾かして凝固せしめることが行はれ、これを石蜜といつた。次には糖を精製して粉末状とすること、即ち砂糖を造ることが行はれたので、それは南北朝の梁代に於いて認められる。梁の陶弘景の「名醫別錄」(政和證類本草⁽¹¹⁾)に引く所に依る)には「取汁以爲砂糖」とあるが、これが現存古文獻に於ける砂糖の文字の初見である。かくて唐から宋へかけて砂糖の製造は次第に盛に爲つた。唐の太宗が使を中天竺の摩揭陀國に遣して製糖の法を學ばしめたことは新唐書⁽¹²⁾に記されて、人口に膾炙し、或はこれに依つて始めて支那に砂糖が出来たやうに解する人もあるが、決してさうでなく、太宗は唯だ進歩した印度の製糖を調査せしめたに過ぎなかつたと見るべきである。甘蔗の種類について宋の蘇恭の「本草圖經」⁽¹³⁾には荻蔗、竹蔗の二種を挙げ、荻蔗は莖細短にして節疏、唯だ生噉すべく、竹蔗は莖粗にして長く、砂糖を造るべしと云ひ、宋の洪邁の「糖霜譜」には、杜蔗・西蔗・芳蔗・紅蔗の四種を挙げ、紅蔗は生噉に堪へるだけであり、他の三種は色々の砂糖を造り得ることを述べて居る。顧ふに初には生噉に堪へるものが多く造られ、ついで甘蔗利用の方法が發達するに伴つて竹蔗に屬するものが多く造られ、優良種が各地方に擴がるやうに爲つたの

であらう。

砂糖の種類について、明の泉州府志汀州府志などに黒糖・赤糖・白糖・冰糖等の名が掲げられて居る。黒・赤・白はいふまでもなく砂糖の色で、粗製のものには黒色赤色で、精製されれば白色と爲る。冰糖は糖水ともいはれ、又糖霜ともいはれ、我國でいふざらめで、霜の如き細粒から成り、製造技術よりいへば砂糖の最も進歩したものである。黒糖は勿論、白糖も唐代に既に存したやうであるが、糖霜⁽¹⁵⁾は宋代に始めて現れ、今の四川・福建・廣東・浙江に産し、就中、四川の遂寧のものが最も優秀であつたといふことである。甘蔗の栽培並に砂糖の製造は初には農家の副業として行はれたであらうが、砂糖が發達すると共にこれを専業とするものも現れ、四川の遂寧(今の遂寧縣の西)の糖霜産地たる嫩山に於いては、住民の十分の三は糖霜戸、耕地の十分の四は蔗田であつたといふ。

砂糖の生産は元明清に互つて益盛になつた。明代では主として福建・廣東・廣西・四川に於いて行はれ、中にも福建の製糖が盛大を極めた。清代でも右四省並に臺灣がその主なる産地であつて、革命前後、瓜哇其他の砂糖の輸入に依つて強い打撃を受けるまでは、此等の地で多量の砂糖が製造され、國內各地に供給されたのであつた。

三 茶

茶の原産地は印度のアッサムと稱せられ、アッサムより雲南・四川あたりにかけて古くから野生したやうである。その芽を摘み取つて湯に浸して喫飲することは、漢魏の頃、四川で起つたらしい。ついで晉から南北朝にかけて、揚子江沿岸に、その風習が擴がり、唐の中頃以後には南北一般に流行し、宋に至つて益盛になり、村閭の細民にまで普及した。同時に外國にも傳播し、唐代では吐蕃・回紇など、宋代では契丹・西夏・金等も茶を愛用し、多量にこれを輸入した。かく内外に於いて茶が流行するにつれて、國內に於いてその栽培製造が旺盛になつたことはいふまでもない。唐代、茶の製造の行はれた地域は頗る廣く、今の省に引直して云へば江蘇・安徽・河南・江西・湖北・陝西・四川・浙江・福建・廣東・廣西・貴州の十二省に亘り、その中、産額の多いのは四川を第一とし、湖北・浙江これに次ぎ、江蘇・安徽がまたこれに次いだやうである。これは唐の中頃迄に著された陸羽の茶經⁽¹⁶⁾に依つて窺はれる。宋代に入つても産茶の地域は大體唐代と同様であつたが、各産地の産額に大分異同を生じた。宋會要⁽¹⁷⁾に南宋の

紹興末年に於ける各路産茶州軍の産額が掲げられて居るが、それを計算して見ると、江南西路（大體今の江西省）が一番多く、次が兩浙西路（浙江省の錢塘江以北及び江蘇の長江以南）、次が江南東路（安徽省の長江以南及び江西省の東北部）、次が荆湖南路（湖南省の約半分）、次が兩浙東路（浙江省の錢塘江以南）で、以下、福建路（福建省）、荆湖北路（湖北省の約半分と湖南省の一部）、廣南西路（大略廣西省）、淮南西路（安徽省の淮河以南と湖北省の東部）、廣南東路（大略廣東省）の順と爲り、兩浙東路以上はいづれも一百万斤以上の茶を産して居る。それは、南宋の初、金人の南侵に因つて受けた製茶業の瘡痕が十分に癒えない時の數字であるが、南北宋を通じた産茶の情形の大體を窺ふには足るであらう。従つてこれに依つて、北宋以來、今の江西地方の製茶業が旺盛と爲り、又た唐代に於いて未だ茶産地として著れなかつた湖南地方に茶業の勃興したことが認められる。右宋會要の記述には四川のことは見えないが、これは當時四川が獨立の會計を營んで居た爲め、政府へ茶の産額が報告されなかつたに因るもので、四川に於いてもやはり製茶が相當盛であつたやうである。茶は初には茶葉に簡單な加工を施し、湯に浸して喫飲するに過ぎなかつたであらうが、その製法は次第に發達し、宋に至つてその絶頂に達した。⁽¹⁸⁾宋の茶は散茶・片茶及び臘茶に分けられる。散茶は茗茶・葉茶ともいは

れ、茶芽を搓揉し乾燥せしめたもの、即ち日本の茶の如きもの。片茶は茶芽を揉み潰して流動體の如くし、これを乾固して或は圓形或は長方形としたもので、その片を爲すがゆるぎに片茶といはれたやうである。臘茶は片茶の一種であるが、上等の茶芽を揉み潰して腦子などいふ香及び膏油を雜へ、銀板にて押し固めて餅状と爲し、その上に又た香油を塗つたもので、福建の建安（今の建甌縣）北苑に産し、最も貴重せられ、主として貢獻に供せられ、民間には多く存しなかつたのである。片茶臘茶は碾して細末と爲し、湯に點じて飲用したので、その細末となつたものを末茶・末子茶などと呼んだ。臘茶は勿論、片茶の優品も主として福建から産したので、福建の産茶の數量はあまり多い方でなかつたけれども、その價格は巨大で、若し産茶の價格に依つて諸路の順番を立てれば、或は福建が第一となつたかも知れない。宋代に於ける茶生産の旺盛は、國內に於ける喫飲鑑賞の發達に加ふるに外國輸出の増大を以つてした結果であつた。さうして政府はこれを財政上に利用せんとして、或は官の專賣とし、或は條件を定めて商人の販運を聽すなど、色々の變遷があつたが、ここには述べない。

製茶の旺盛は大體繼續して元明に至り、清に至つた。元明時代に於いても江西・浙江・福建・湖南・四川から多く優良の茶を産し、福建建安のそれが絶品の名を擅にした。但し臘茶は

明の太祖の命に依つて製造を罷め、その代りに葉茶を貢獻することとなつた。この時代、一般には葉茶即ち煎茶が行はれ、さうして末茶は福建廣東方面にのみ行はれ、それも次第に衰へたのであつた。

清代に入つては、康熙以後、外國貿易が年を逐うて盛に爲り、茶は輸出品の大宗たる地位を占めたので、製茶業も大にその影響を受けた。即ち外人の嗜好に従つて紅茶・烏龍茶及び磚茶が造られて輸出に充てられた。紅茶は黒褐色を呈するが爲め *black tea* と呼ばれ、煎れば紅褐色と爲り、甘味多く苦味少きもの、烏龍茶は紫黒色で、煎れば灰黄色と爲り、香氣強きもの、磚茶は茶葉若しくはその粉末を壓迫して磚状としたもので、主として露西亞に輸出されるものであつて、これ等に從來の葉茶（紅茶に對して綠茶といはれる）を加へて茶の種類は約四つとなつたのである。茶の製造は益廣く行はれ、山東・山西等三四省を除く外、殆どこれを産せざる省無きに至つたが、しかし、特に盛に産出したのは兩湖・蘇浙・安徽・福建等で、中にも湖南の發展が最もめざましく、民國の初に至つては年々二百萬擔前後を出して第一位を占め、福建・安徽・湖北・浙江等がこれに次いで四五十萬擔を出したのである。湖南及び湖北からは主として紅茶を出し、安徽及び浙江からは主として綠茶を出し、福建は紅茶綠茶各相半し、し

かして烏龍茶は浙江・福建等から産出して居る。綠茶では浙江杭州の龍井茶が名茶として入口に膾炙し、紅茶では湖南の安化、湖北の鶴峯、安徽の祁門などが著れて居る。

茶の生産は、人口増殖の結果たる國內需要の増加と、外國貿易の隆盛との爲め、清代に於いて空前の發展を遂げ、光緒の中頃にはその絶頂に達し、輸出額だけでも三億磅（二億三千万斤）で、生産總額は恐らく六億以上に達したと推測せられる。然るに其の後、セイロン及びジャワの茶業が勃興し、日本の製茶も進歩した爲め、その壓迫を受けて年を逐うて輸出が減退し、民國七年（一九一八年）以後に至つて特に甚しく、製茶業者の倒産するものが續出し、以つて今回の事變に及んだのである。

茶の栽培製造は初め農家の副業であつたことはいふまでもなく、その後重要産地では專業とするものも多少あつたであらうが、一般には副業とせられたやうである。現在でも副業が殆ど原則で、唯だ浙江省紹興縣の東山では、專業者に依つて茶が栽培せられるといふことである。茶を栽培するものを古來茶戸園戸と云ひ、宋代文獻などに多く見えて居るが、それは概ね副業として茶を生産したものであつたのである。茶戸園戸（現在では山戸ともいふ）は茶樹を栽培し、嫩芽を摘み取つて粗茶を製するだけであつて、その粗茶は牙人に依つて買ひ集められて茶

行（茶莊ともいふ）に引渡され、そこで精製された後、或は國內各地に販運され、或は茶棧を経て輸出商に賣渡される。これは現在の慣習であるが、茶戸が粗茶を製し、茶商がそれを買取つて加工するといふことは餘程古くから行はれたことであらう。

- 1 程珣田「九穀考」（皇清經解に收めらる）。尙ほ劉寶楠釋穀をも参照せよ。
- 2 宋應星「天工開物」卷上、乃粒、麥。
- 3 孫國東氏「中國食用作物」一三九・一四〇頁。
- 4 「汜勝之書」の稻に關する部分は「齊民要術」卷二水稻の部に引かれて居る。
- 5 「廣志」の稻に關する部分は、「齊民要術」卷二、「初學記」卷二七、「太平御覽」卷八三九等に引かれて居る。
- 6 「齊民要術」卷二、水稻。
- 7 「淳祐玉峰志」卷下、土産。
- 8 「寶祐琴川志」卷九、叙産。
- 9 「理生玉鏡」は丘陵學山（百陵學山ともいふ）に收められて居る。
- 10 占城稻については拙稿「支那に於ける占城稻栽培の發達に就いて」（史學第一八卷二・三合併號）に詳論されて居る。
- 11 「政和證類本草」卷二三、甘蔗の條に引かれて居る。
- 12 「新唐書」卷二二一上、西域傳摩揭它國の條。
- 13 「政和證類本草」卷二三甘蔗の條に引かれて居る。
- 14 「萬曆泉州府志」卷三物産、「崇禎汀州府志」卷四土産等。

- 15 宋の王灼「糖霜譜」卷下。
- 16 「茶經」卷下、八之出。
- 17 徐輯「宋會要」食貨二九。
- 18 「宋史」食貨志下五、茶上。元王楙「農書」卷一〇、茶等。

第五章 衣料生産

一 養蠶製絲

蠶を飼ひ絲を取るといふことは、改めていふまでもなく、支那人の創始するところで、非常に古い時代から行はれた事である。「詩經」には鄆風・鄭風・魏風・唐風・秦風・豳風等に桑のことが見え、それが今の河南・山西・陝西等に栽培され、従つてそれ等の地方で養蠶の行はれたことが窺はれるが、この外、「史記」の貨殖列傳には「齊魯千畝桑麻云云」の語が見え、「書經」の禹貢には兗州（今の河北省南部及び山東省西北部）、青州（今の山東省中部以東）、徐州（山東省南部及び江蘇安徽の北部）、豫州（河南省及び湖北省北部）、揚州（江蘇安徽の南部方面）から絹織物の貢されたこと、従つて蠶桑の行はれたことが示されて居る。この中揚州方面ではたとひ養蠶が行はれたとしても極めて微々たるものであつたらうが、その他の地方で

は、少くとも春秋前後には稍盛に行はれたことと思はれる。漢代、今の山東及び河南の東部に於いて桑の栽培並に養蠶が最も盛に行はれ、この地方が絹織物の本場であつたことは、齊郡の臨淄（今の山東省臨淄縣）及び陳留郡の襄邑（今の河南省睢縣）に朝廷の織物工場たる服官⁽¹⁾が置かれたことなどに依つて窺はれる。四川特に成都地方でもかなり早くから養蠶が行はれ、後漢三國の頃には相當發達して居たやうである。長江沿岸、特に今の江蘇浙江方面では南北朝の頃から徐々に發達したやうである。唐宋時代となつては、北では河北山東、南では兩浙江東、西では四川地方が養蠶の本場、絹類の名産地として鼎立したので、これは「宋會要」⁽²⁾に見える天下各地の上供絲帛の統計や、その他數々の當時の文獻に依つて明に認められる。降つて明清と爲ると、江蘇浙江、特に浙江の養蠶製絲が抽んで發達し、清末には支那に於ける蠶繭の三分の一は浙江より出づるといはれた。浙江では各府州縣、蠶桑無きはなしといふ有様であつたが、湖州・嘉興・杭州が最も盛で、中にも湖州を第一に推した。四川では保寧・潼川・順慶・夔州の各府、兩湖では武昌・德安・岳州・長沙・永州等の諸府でかなり盛に行はれた。山東では宋代のやうな盛況は見られなかつたが、猶ほ東昌・兗州・青州・濟南の諸府で行はれた。河北では明の中頃過まで、南は大名府から、北は涿州・霸州に至る諸地方に行はれたが、明末か

ら清初にかけて頃に衰へ、唐以來の蠶桑の本場たる地位を全く失墜してしまつた。これに引換へて廣東の養蠶製絲は次第に發達し、清末には主要産地の一となつた。

桑の原産地は山東であつたらしいが、數千年を経、四方に傳はる間に、風土の影響と人爲の加工とによつて多くの種類を生じた。その最も主なるものは魯桑と荊桑とであつて、前者は山東の桑で、恐らく桑の原種であり、後者は湖北産の桑であつた。「史記」貨殖列傳に「齊魯千畝桑麻」とある桑は、魯桑因つて出づるところであらう。魯桑・荊桑の名は元代に既に存したので、王楨の「農書」⁽³⁾には「荊桑は樞（實）多く、魯桑は少し、葉薄くして尖り、其の邊、瓣有るものは荊桑なり、凡そ枝幹條葉堅勁なるものは皆な荊の類なり、葉圓厚にして津多きものは魯桑なり、凡そ枝幹條葉豐腴なるものは皆な魯の類なり、荊の類、根固くして心實し、能く久遠なり、樹と爲すに宜し、魯の類、根固からず、心實ならず、久遠なる能はず、地桑と爲すに宜し、然れども荊の條葉は魯葉の茂盛なるに如かず、當に魯桑の條を以つて之に接ぐべし、即ち能く久遠にして又た盛茂なり」と云つて居る。當時桑の研究の進んで居たことが窺はれる。この外、湖桑・川桑・富陽桑・女桑・山桑等無數の種類があり、湖桑は湖州の桑で、荊桑に加工したもの、川桑は四川の桑、富陽桑は杭州府屬富陽縣の桑であつた。魯桑荊桑が桑の

最も優秀なものであつたことは前に述べたところに依つて明であるが、荊桑は枝幹も根も堅勁なだけにその葉を以つて養つた蠶の絲も堅靱であることは元代から著れ、湖州の蠶絲の絶品であるのもこの地方の桑が荊桑に本づいたものであることが興つて力あるやうに認められて居る。桑の栽培の最も盛なのは、明清以來、浙江省であつて、浙江省では湖州を第一とした。

蠶は、廣東では古くから六七熟したが、他の地方は大抵兩熟で、明代以來、これを早蠶・晩蠶若しくは頭蠶・二蠶、春蠶・秋蠶などと呼んだ。早蠶の繭が優れて居た。繭には白繭・黃繭の二種があつて、白繭から取られた絲を白絲、黃繭から取られた絲を黃絲と呼び、白絲・黃絲の名は宋代から存した。⁽⁴⁾ 黃白は、繭の場合でも、絲の場合でも、その色に依つて名づけられ、白の方が貴ばれた。明代、白繭及び白絲は専ら湖州及び嘉興から出で、他の地方からは黃繭黃絲が出でた。他からも往々白絲を産したが、それは黃絲を漂白したもので、品質が劣つて居た。湖州の絲の最も精なるものは頭蠶湖絲、湖州頭蠶絲又は七里絲と呼ばれた。この名稱は現に行はれて居るが、明代に既に存したので、七里絲の名は朱國楨の「湧幢小品」⁽⁵⁾にも見えて居る。湖州の絲は、湖州自らの織紵に用ひられる外、東南の主なる絹産地に供給されたので、農政全書には「東南の機、三吳越閩、最も夥し、給を湖繭に取る」と見え、「八閩通志」⁽⁶⁾「萬曆泉州

志」⁽⁸⁾などにも、これ等の地で湖絲を用ひたことを述べて居る。「廣志釋」には「湖州絲綿の多細、天下に甲たり」とあるが、湖州の絲の産類は随分夥しいものであつたらう。(現に支那の絹織物の經絲には専ら湖州の頭蠶絲が用ひられるさうであるが、恐らくそれは舊い慣習であらう) 四川では保寧・順慶・潼川三府、即ち中央北寄の一帶、並に成都府から黃絲を多く産し、それが舊閩州の附近であるところから閩繭と呼ばれ、明代北方絹産地の巨擘たる山西省潞安府の如きもこれに給を仰いでいはゆる潞紬を織り爲したのであつた。潞安府のみならず廣く諸地方に移出されたものと見え、福建の漳泉二府で倭緞を織るにも川蜀の絲を用ひたといはれて居る。湖廣では武昌・德安・岳州等から多く黃絲を出した。清代に至つては、白絲は浙江・江蘇の外廣州から多量に産出した。黃絲は四川・湖北及び山東から出でた。廣州から多量の白絲を出し始めた時期は詳でないが、清朝末期のやうである。

養蠶は古來農家の副業として行はれ、清代に於いても、廣東を除く外、左様であつた。さうして繭はこれを産した農家に於いて繰車(繰車とも書く、日本でいふ坐繰)を用ひて絲に績ぎ、或は自らこれを織り、或は商人に賣渡した。生絲を商人に賣渡すのは餘程古くから行はれたことで、生絲製造と絹織物の織紵とは唐宋以來大體分離して居たと見てよいやうである。し

かし繭を商人に賣渡すのは、光緒の末葉、日清戦争以後に至つて始めて現れたことである。これは製絲工場が起り、器械に依る製絲が行はれ、繭そのものが多量に需要された爲めであつた。さうして器械製絲の最も發達したのは廣東であつた。(絹織物の生産は便宜上工藝の部で述べることにした)

二 麻及び麻布

麻には實らないものと實るものとの二種がある。實らないものは、古くは泉と呼ばれ、後世では牡麻・花麻・苧麻などと呼ばれ、夏至前後に細い花を開くが、その色が白くして微かに青いので、白麻とも青麻とも云はれ、花落ちて後、抜いて其の皮を取り、績いで苧を造り布を織るのである。實るものは古は苴と呼ばれ、後世では苴麻・子麻・黄麻などと云はれ、皮はやはり苧に造られ、布に織ることも出来るが、纖維が粗大で、むしろ屨や繩索の料とせられることが多かつたやうである。麻は古くから南北ともに作られ、詩經陳風にも麻を漚すとか紵を漚すとかいふことが見え、漢魏時代に南越の苧布が有名であり、荊州揚州方面でも苧麻が多く栽培

されたことは吳の陸璣の「毛詩草木鳥獸蟲魚疏」に依つて知られる。唐の杜佑の「通典」⁽⁹⁾天下諸郡常貢の條には、今の湖北・湖南・安徽・江西・江蘇等に屬する州郡から麻布苧布を貢獻したことを載せ、恰も麻は揚子江沿岸にのみ栽培され、北方には栽培されなかつたやうに見えるけれども、決してさやうでなく、「元和郡縣志」には河東・河北・關内等の諸道から賦として麻布を出したことを載せ、中にも河東道は各州郡殆ど麻布を出さざるは無き有様であつて、麻の栽培、麻布の織経は今の山西・河北・陝西等でも行はれ、山西では頗盛であつたことを認めなければならぬ。宋代でも大體同様であつたやうである。但し南方では主として苧麻が作られ、北方では主として子麻が作られたらしく、元を経て明に至る間に、北方の麻布は南方のそれに壓倒され、明代では麻布苧布は主として南方、揚子江沿岸以南、特に江蘇・浙江・江西・湖南・四川・福建・廣東で生産され、中にも廣東の新會、江西の荆溪の苧布が精巧を以て聞え、前者が最も優れたので、明の廣州府志に「新會の紵布、天下に甲たり、其色、玉の如く、其の縷、絲の如く、紗羅に勝る」と云つて居る。清代では、浙江は稍衰へ、江西・廣東・四川で盛に苧布が造られたが、品質の精に於いては、依然として廣東江西を推した。

三 木綿及び綿布

木綿は本來南アジヤの植物であるが、その花から造られた綿布はかなり古くから支那に輸入せられ、兩漢三國の頃、支那人はこれを白疊・白縑・楊布・蒼布・桐華布・檀華布・吉貝などと呼んだ。全體、木綿には木の木綿 (Bombax tree) と草の木綿 (Gossypium plant) との二種があり、双方とも綿を取り布に織ることが出来るが、布の原料としては後者より生ずる綿が遙に優れて居る。上に掲げた數々の言葉の内、桐華布・檀華布は木の木綿から取つた綿布、白疊その他は草の木綿から取つた綿布であるらしく、但し晉以後は桐華布の類も均しく白疊と呼ばれたといふことである。さうして木綿といふ語も南北朝時代に既に存したことは、「資治通鑑梁紀」に木棉皂帳云々とあるに依つて窺はれる。草の木綿 (以下單に木綿といふ) の栽培並に綿布の織造は、初め兩廣方面で行はれ、ついで福建に傳はり、江蘇に傳はつたのであるが、宋代までは大體福建以南に局限され、元初の頃、始めて今の江蘇の松江に傳はり、一方、中央アジヤを経て陝西へも傳はり、やがて江南・淮南・四川等中部支那一帯に擴がり、明代に入つては

齊魯燕洛の間に及び、遂に支那全土に風行し、「木綿の利、天下に徧布す」(大學衍義補⁽¹³⁾) とか、「率土、其の利を仰ぐ」(農政全書⁽¹³⁾) とかいはれるやうになつたのである。私は尙ほこれを確かめる爲めに、明代の地方志二百餘種を検索したが、その結果、綿花綿布を産すと傳へられたものが、北直隸では二府一州一縣、山東布政司では二府四縣、山西では五府一州、河南では二府二縣、陝西では二州四縣、今の江蘇では二府二州六縣、今の安徽では一府二州一縣、江西では七府二縣、浙江では四府七縣、今の湖北では六府、今の湖南では六府一縣、四川では一府一縣、福建では四府一縣、廣東では八府、廣西では一州、雲南では四府、貴州では一府、尙ほ遼東からも綿花綿布を出したことが、遼東志・全遼志に見えて居る。私の検索したのは勿論明代の地方志の全部でなく、しかも或る布政司に屬する志は多數現存して居る爲め數十種に亙つて涉獵し、或る司に屬するものは傳本が少いので僅々數種を瞥見するに過ぎなかつたのであるから、右に擧げた府州縣の數が當時綿花綿布を産した府州縣の總計でないことはいふまでもなく、又たその數字の大小が必しもその布政司に於ける綿花綿布生産の盛さの度合を示すものでもない。しかしながら、ともかくも此れに依つて、明代のあらゆる布政司から、綿花綿布を産したことが確實に認められ、木綿の生産が支那各地方に略普及したのが明代であつたことが窺

ひ知られるのである。

木綿には現に紫花・白花・紅花・黄花等の種別があるが、紫白二種は明代に於いても南北各地に種藝せられ、而も紫は少く、白が十の九に居つたと云はれる。北方でも木綿の栽培、綿花の製造はかなり盛に行はれたが、織紵の術が拙劣であつたので、多くは綿のまま南方に輸出された。南方では栽綿織布ともに行はれ、就中今の江蘇の松江は綿布織紵の精巧と旺盛とを以て天下に鳴り、「松の布、海内に衣被す」(明松江府志)⁽¹⁴⁾といふは世上の公論であつた。但し綿布の色染は今の安徽の蕪湖が最も巧であつたので、「天工開物」⁽¹⁵⁾には「綿布は寸土皆有るも、織造は松江を尙び、漿染は蕪湖を尙ぶ」と述べて居る。松江の外、武進・嘉定・常熟等でも盛であつた。江蘇については、浙江・江西・湖北・湖南から多く綿花綿布を出した。

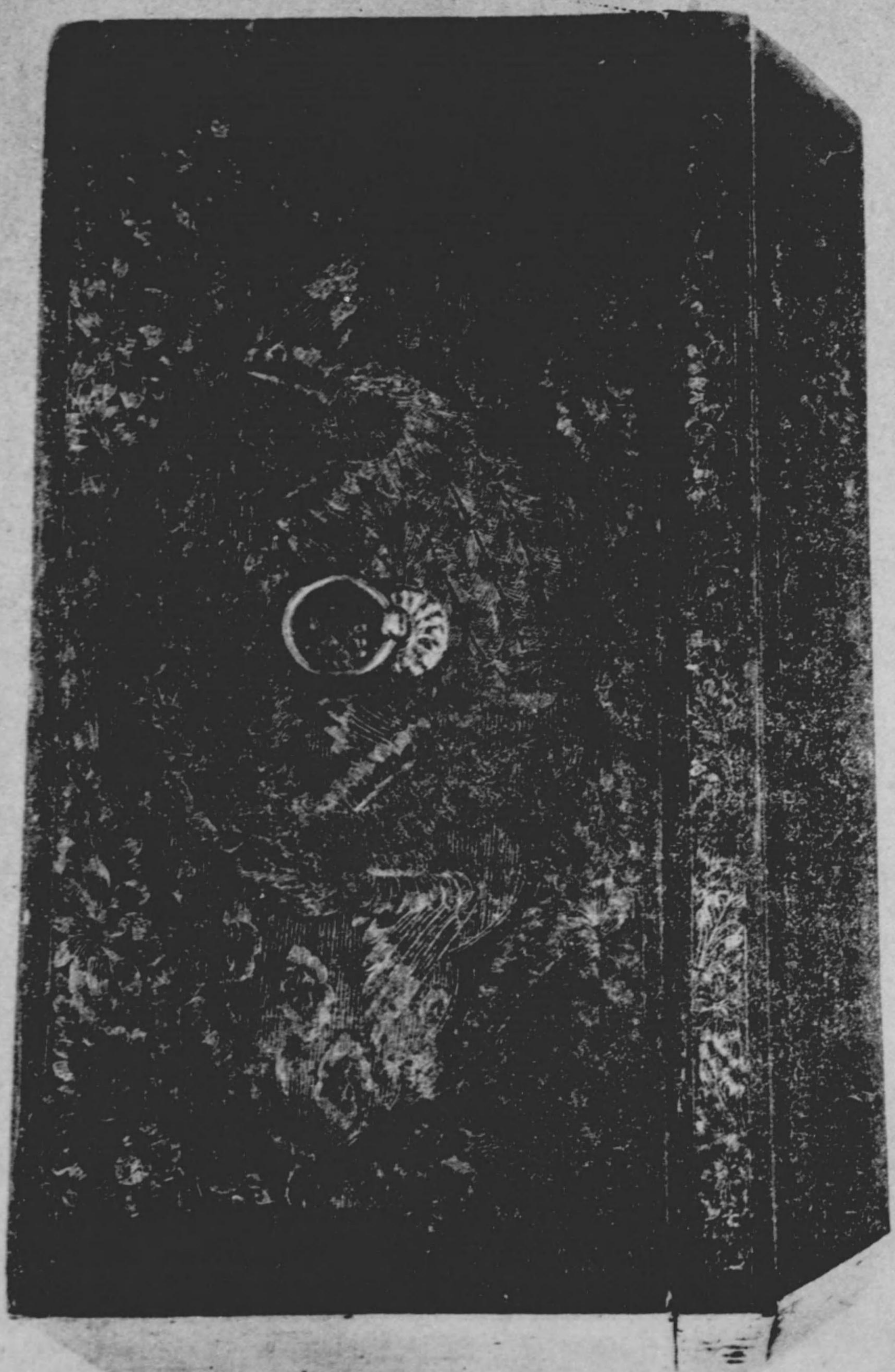
清代に入つては、綿花綿布の生産は主として沿江諸省で行はれ、江蘇・江西・湖北でのそれが最も盛で、浙江は次第に衰へた。北方でも作られはしたが、その性質も量も遙に南に劣つた。然るに民國となつて後、北方五省に於いて米綿種を輸入して綿花の改良増産に努力した爲め、その産綿が大に増加して南方を凌ぎ、民國二十年過ぎには、全國綿産額の約六割を占め、長江沿岸六省は其の約四割を占めるやうになつた。綿花・綿絲(支那では明以來棉紗といふ)。

綿布の製造は、明以來かなり分業となつて居たが、清の光緒末以後、その傾向が愈顯著となり、同時にその經營方法に一大變化を來した。即ち機械工業が起り、支那人並に外國人經營の紡績工場が上海漢口その他の都市に設けられて盛に綿絲を造り、それが輸入綿絲と共に織布業者に供給されたので、從來の紡車(手車)に依る綿絲製造は頓に衰へた。ついで機械に依る織布も發達し、從來の綿布(土布)は年を逐うて衰退した。

- 1 「漢書」元帝紀、初元五年四月。同袁帝紀綏和二年。同卷七十二頁再傳等。
- 2 「宋會要」食貨六四、匹帛。
- 3 王楙「農書」卷五、種植篇。
- 4 「宋會要」食貨一〇、財稅雜錄下、乾道三年八月。
- 5 「海國小記」卷二、農蠶。
- 6 「農政全書」卷三一、蠶桑。
- 7 八閩通志卷二五、土產、及び高麗泉州府卷三、物產。
- 8 王士性「廣志釋」卷四。
- 9 「毛詩草木鳥獸蟲魚疏」卷上。
- 10 「通典」卷六、賦稅下、天下諸郡常貢。
- 11 雍正廣東通志卷五二物產に引くところに據る。
- 12 「大學衍義補」卷二二、貢賦之常。

支那經濟史概説

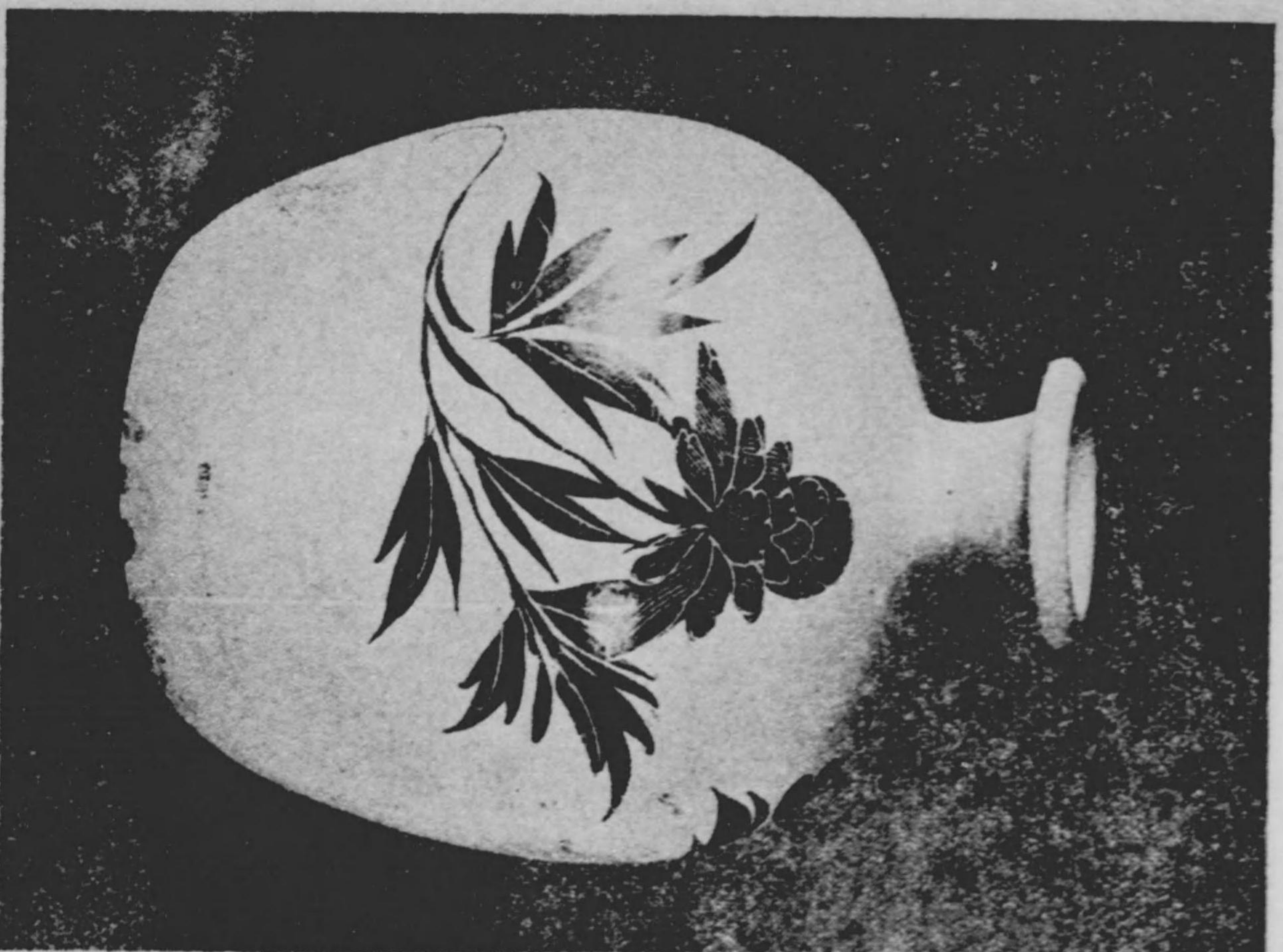
- 13 「農政全書」卷三五、木棉。
- 14 「松江府志」卷六、物産。
- 15 「天工開物」卷上、乃服、布衣。



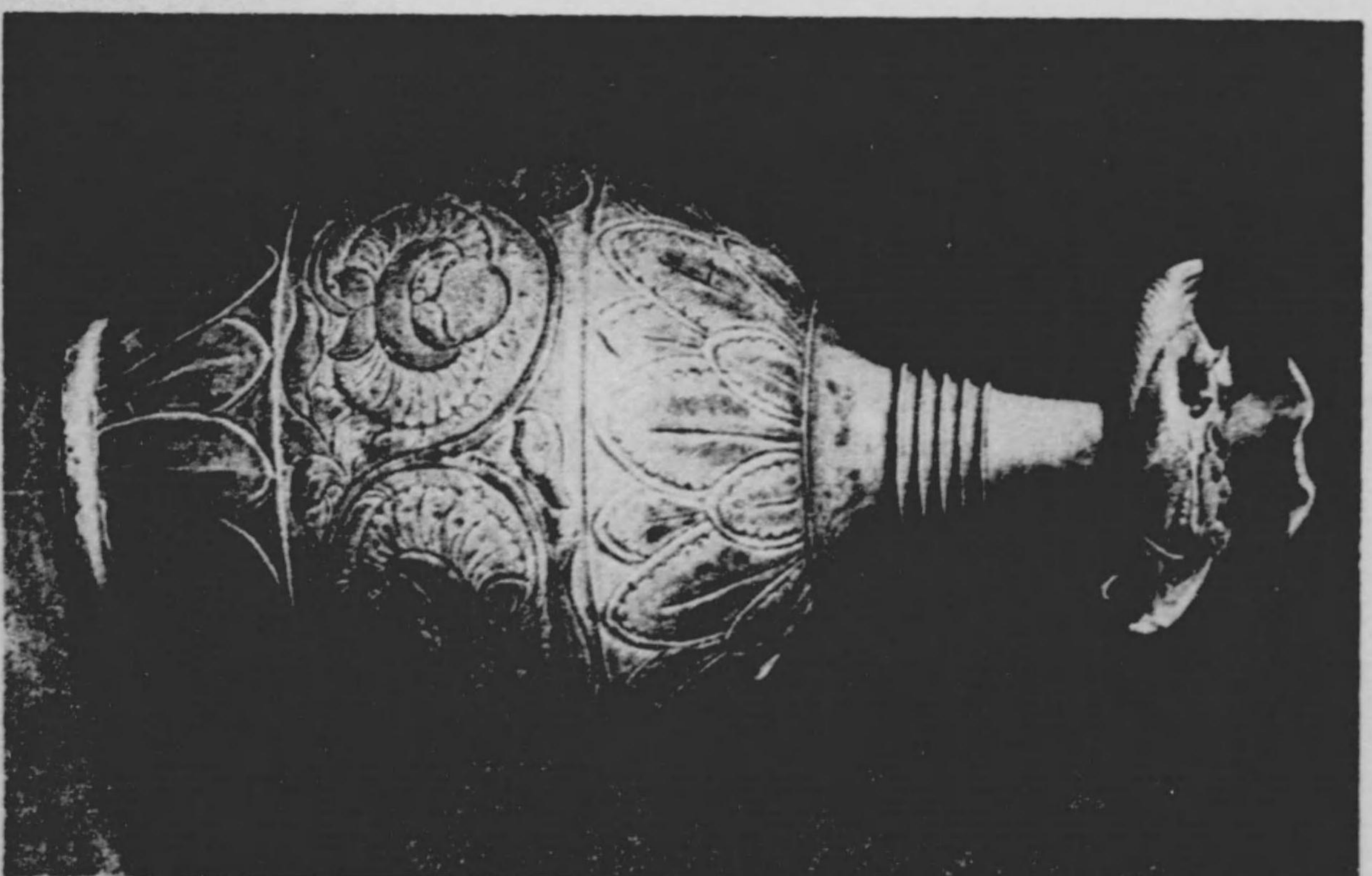
第一圖

（藏寺土澤蓮尾） 宮田金殿製年二冊延元

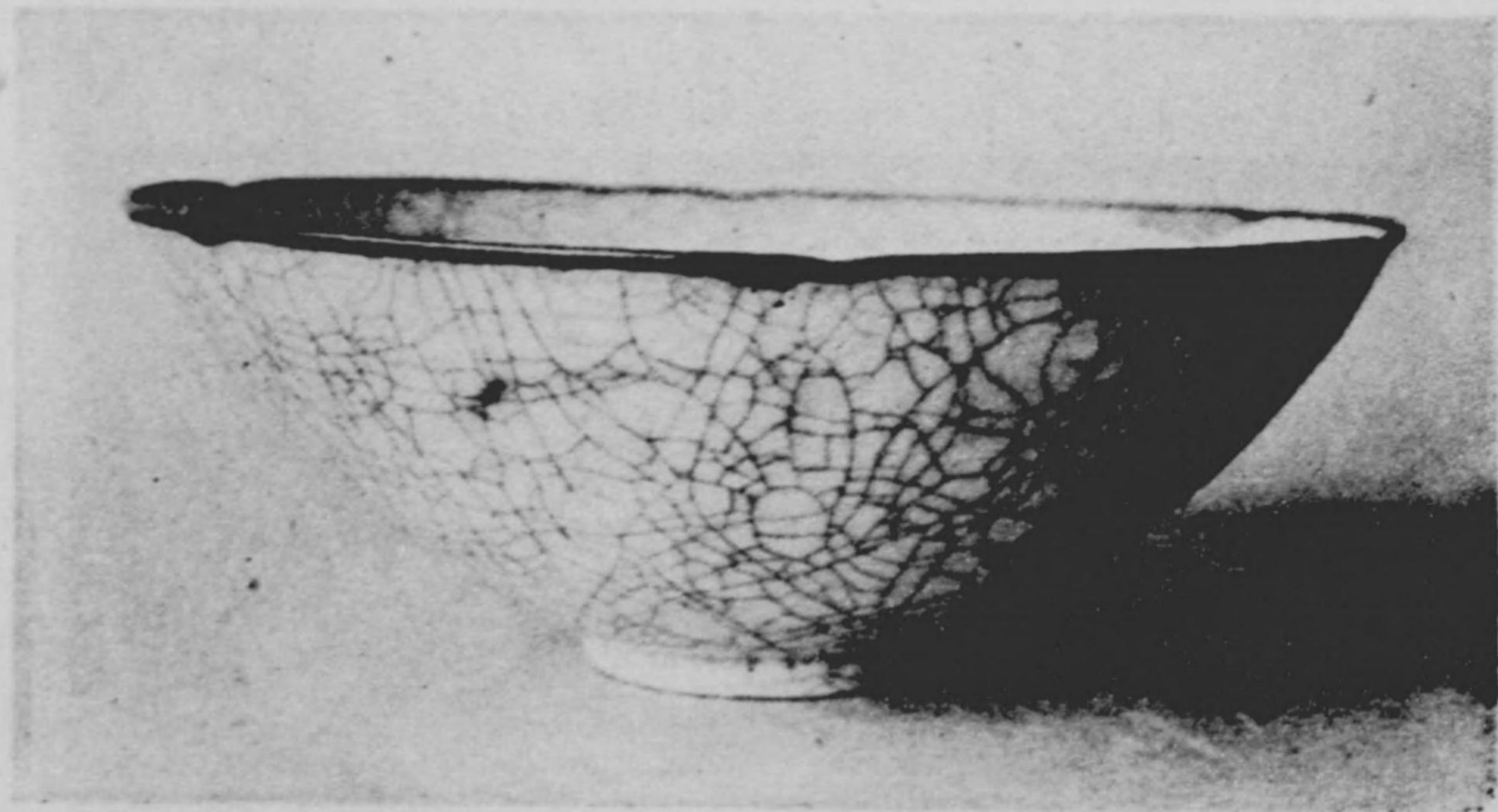
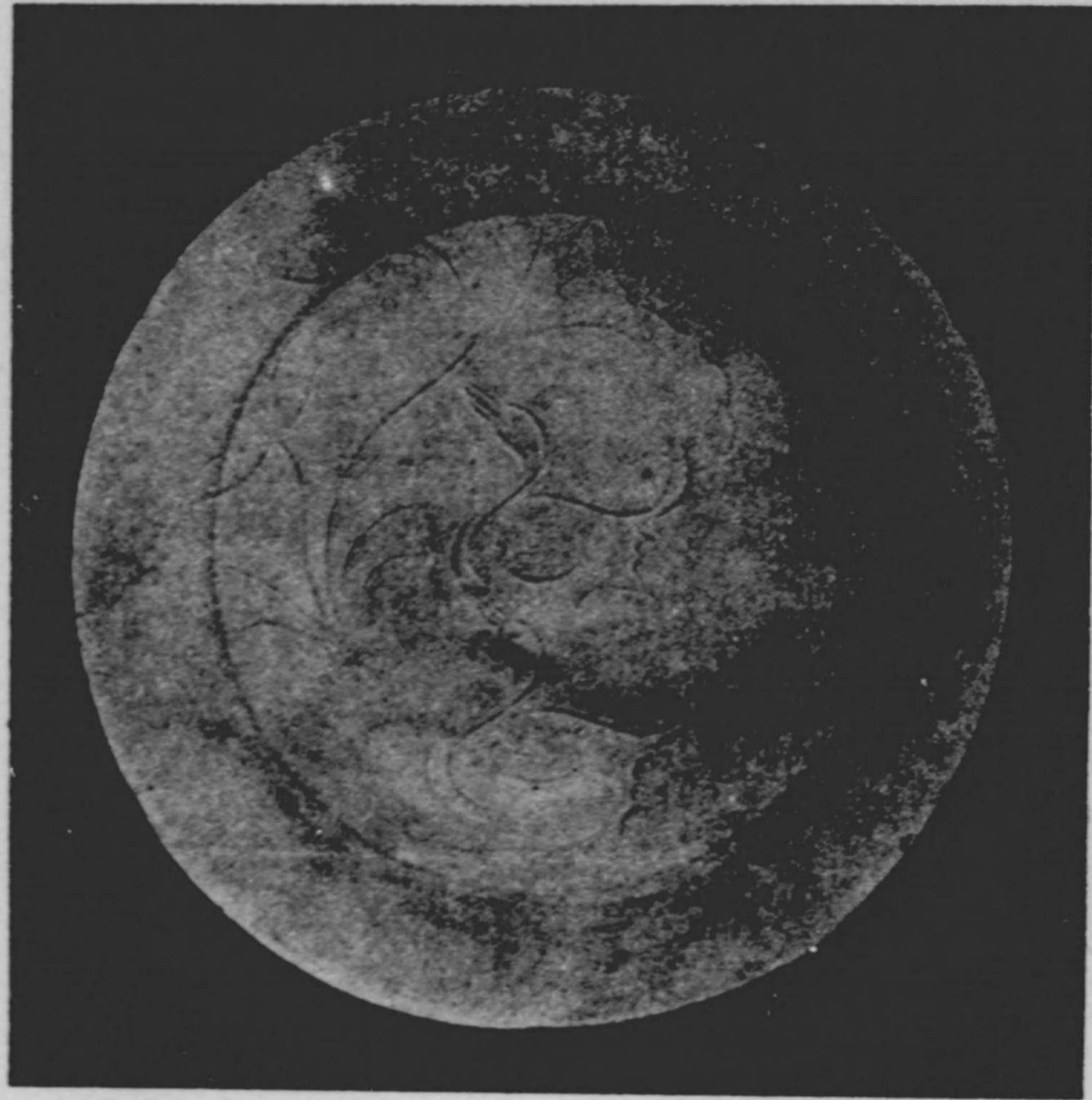
長 一尺三寸一分餘
 幅 七寸三分餘
 高 八寸三分餘
 黒漆塗で、牡丹菟孔雀の餞金が施され、内部には朱漆が塗られてゐる。蓋の裏に「延祐二年（中略）宋家造」とある。



瓶 文華相寶齋州磁宋
 (藏氏一恒上井)



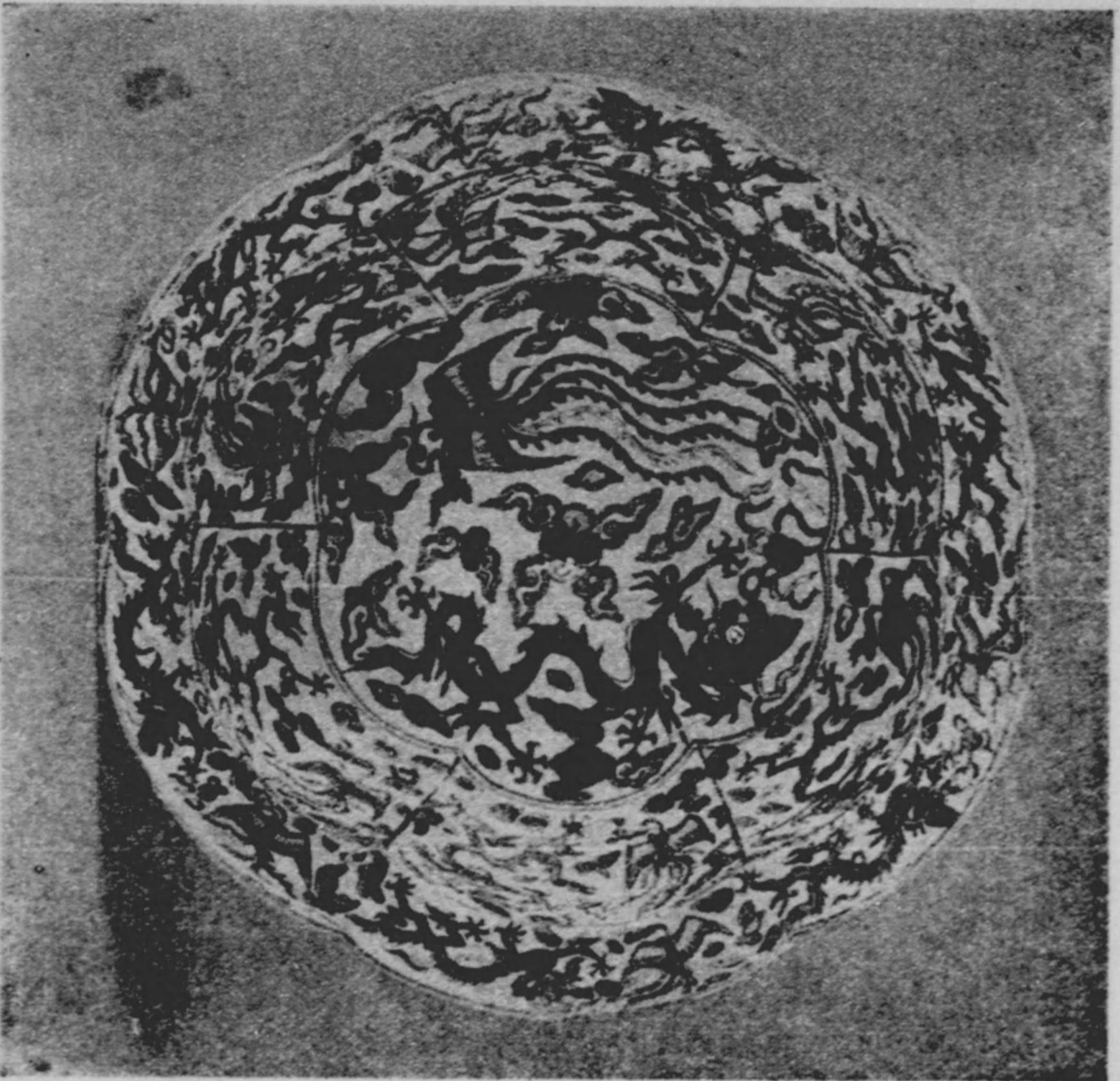
壺 首鳳磁白青齋州吉唐
 (藏館物博英大)



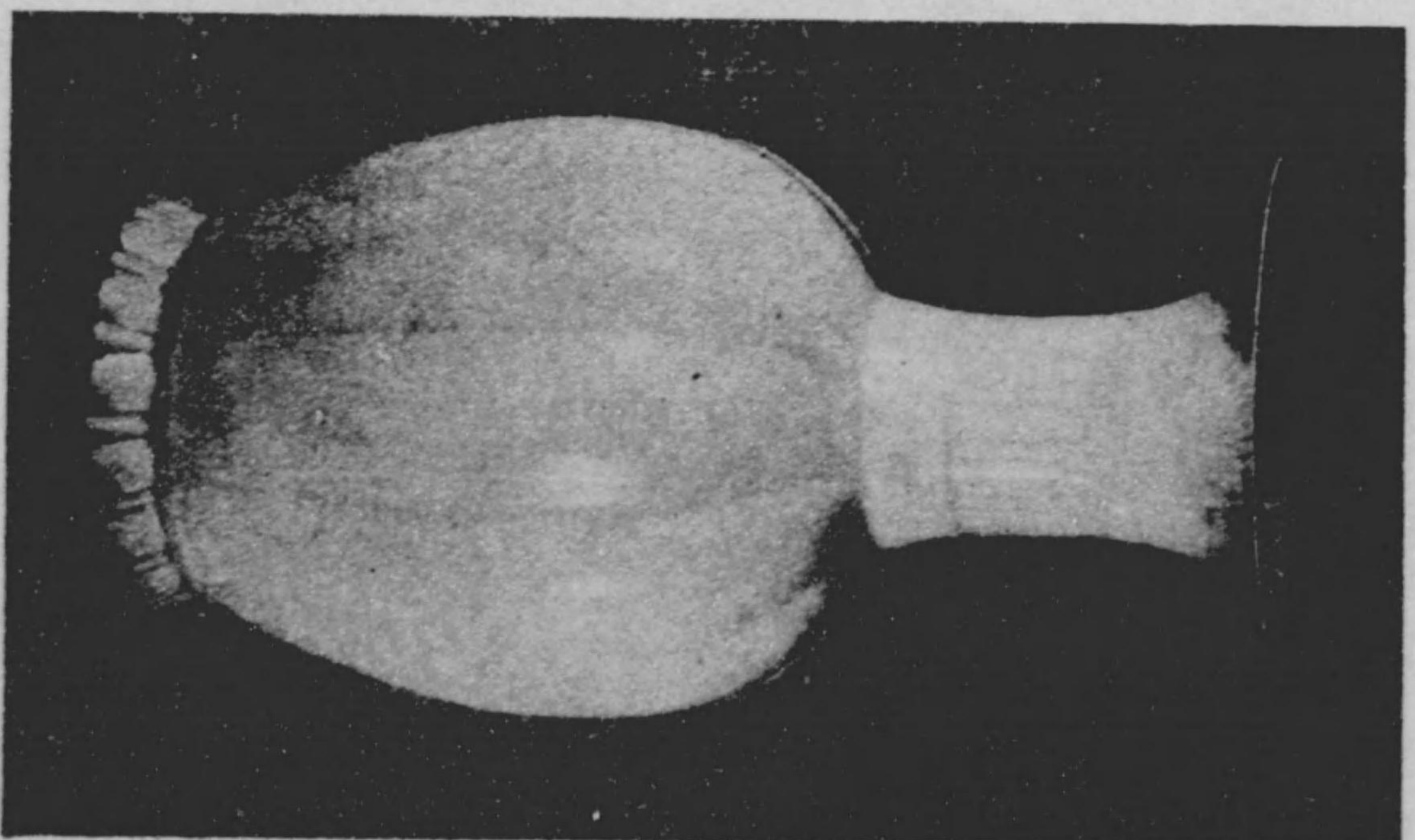
上 宋 定 窯 白 磁 蓮 禽 文 碟
(藏氏-ダンサキレア)

下 南 宋 官 窯 青 磁 盤
(藏館物博室帝)

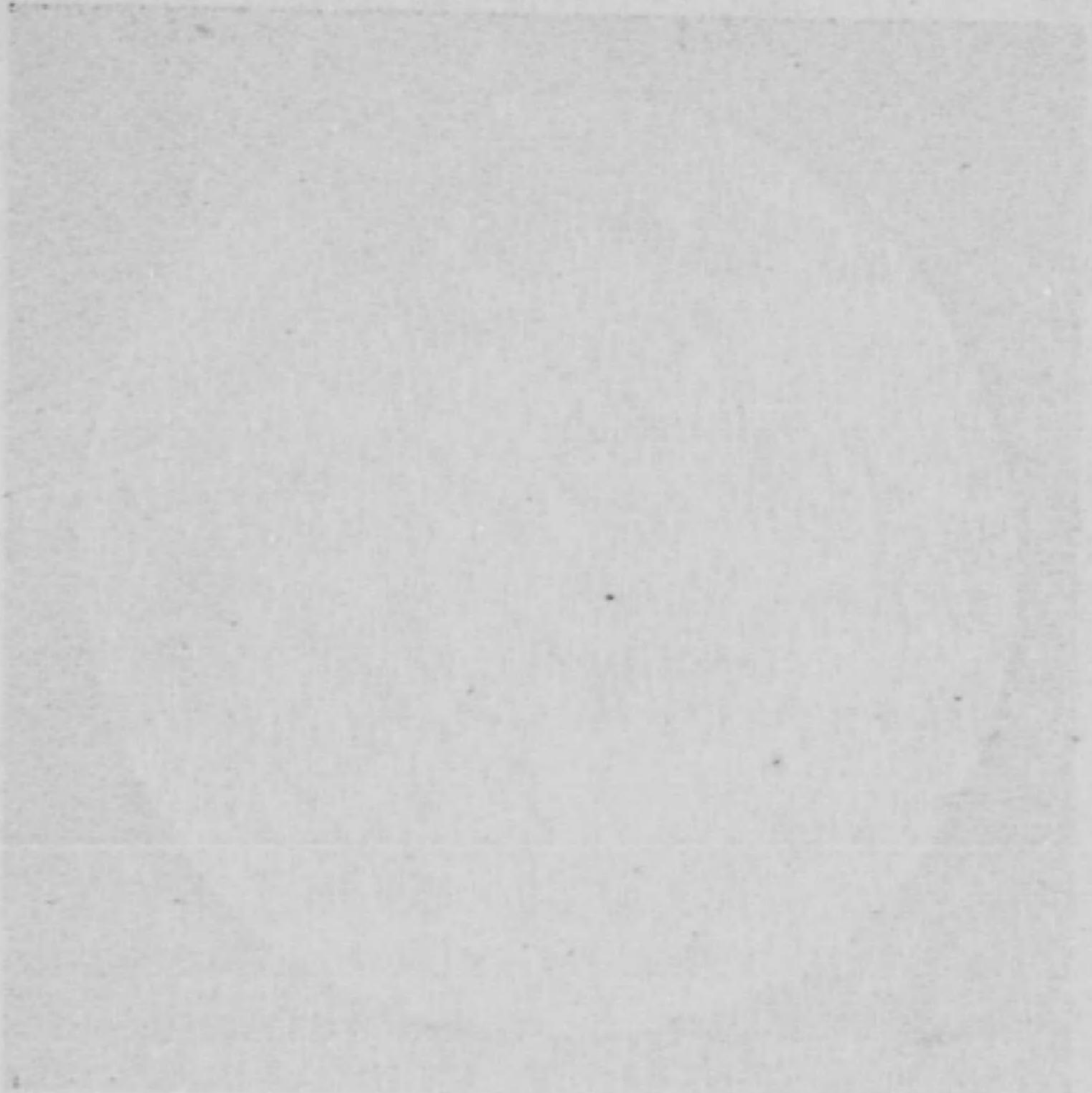


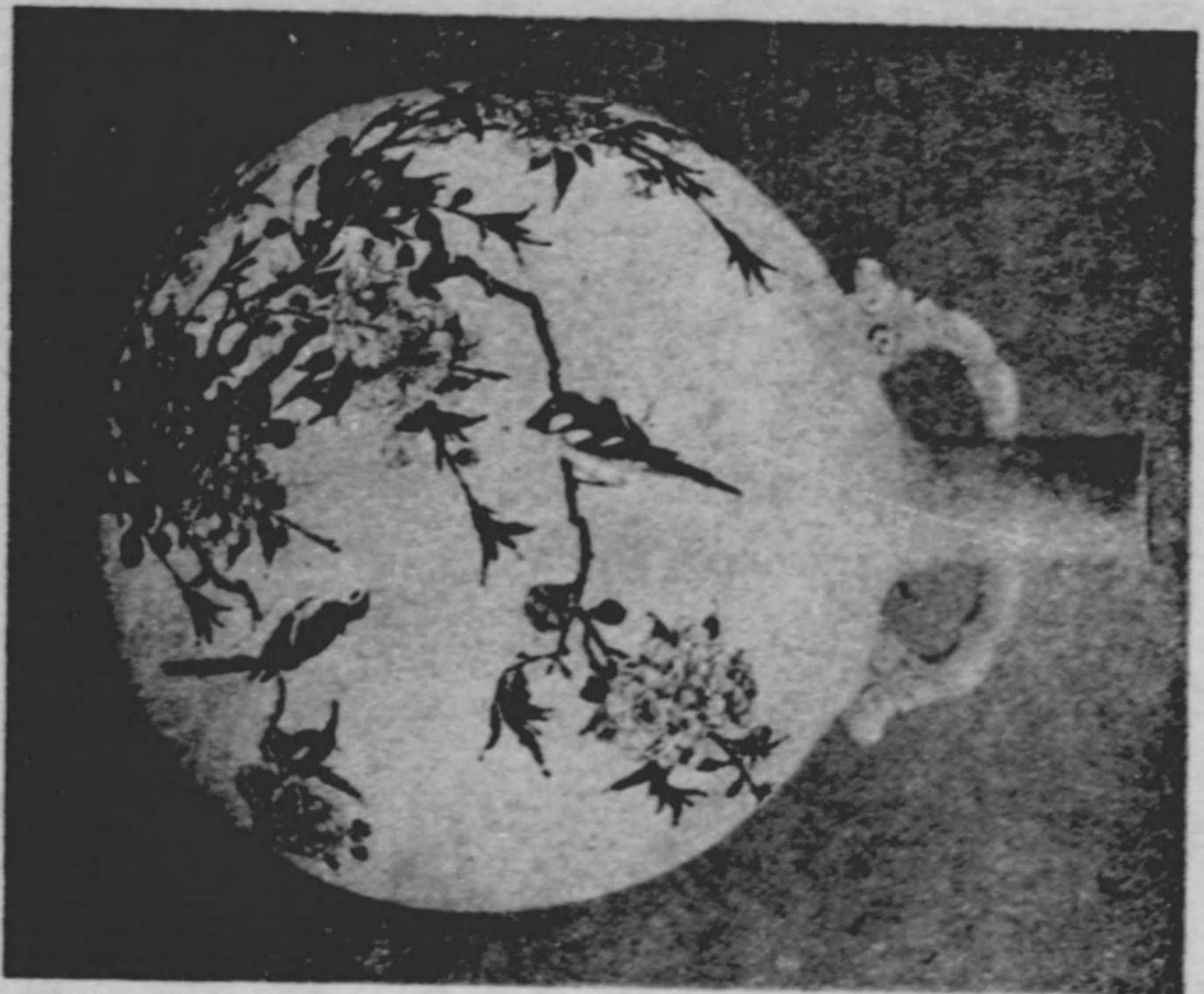


鉢平文鳳龍繪赤厝萬明
 (藏館物博室帝)



瓶水磁白青窯鎮德景宋
 (藏氏永燕命)





壺 鳥文花彩粉正雅清
(藏柳トツキガサチ)



鉢 平文花蓮彩五照康清
(藏氏太彌小崎岩爵男)



第六圖

圖茶山絲刻柔克【朱宋
(管保行銀央中洲滿)



第七圖

圖卉花筆御宗徽絲刻宋
(管保行銀央中洲滿)



第八圖

明 顧 璣 松 風 菊 荷 圖
(清 孫 承 澤 中 洲 畫 譜)

第六章 工 藝

一 漆 器

漆の樹は、上古から支那に存し、それを栽培して漆液を取り、器物に塗るといふことも亦た非常に古くからのことのやうである。「書經」の禹貢には、兗州及び豫州の條に貢として漆が擧げられて居り、「周禮」の地官載師には「漆林の征、二十にして五」とあつて漆の栽培に對して特に重税を課することが示されて居る。「史記」の貨殖列傳には、各地方の産物を列擧した中に、「陳夏千畝の漆」といふことが見え、又た商品を擧げた中に「木器の槩する者」と見えて居る。兗州は大體今の河北省東南部及び山東省西北部に當り、豫州は河南省及び湖北省北部に當る。陳夏は今の河南省の中部地方を指す。大正中、朝鮮平壤城外、漢の樂浪郡治址附近の古墳から多くの精巧な漆器が発見され、それに依つて漢代に於いて漆器の製造が非常に發達

して居たことが確められたのであるが、その中には廣漢郡（今の四川省廣漢縣）若しくは蜀郡（今の四川省成都縣）の工官で造つた乘輿御用のものであることの明記されたものもある。蓋し漆器は先秦このかた今の河北河南等諸處で造られたであらうが、漢代では主として今の河南中部並に成都地方で造られ、成都地方の技術が特に優れて居たのであらう。

降つて唐代になると、襄陽の漆器が最も著れ、これを襄様と呼んで賞翫したと傳へられて居る。宋になると兩浙の漆器が發達し、北宋人の作「袖中錦」に天下の名物を列擧した中に「蜀錦定磁浙漆云云」と見えて居る。兩浙では湖州温州などが著れたが、「夢梁錄」に杭州の名高い店舗を掲げた中に「温州漆器鋪」といふのが一つならずあるのを見れば、南宋末では温州の漆器が殆ど覇を唱へたかと思はれる。成都で依然漆器の造られたことは、北宋人の隨筆「茅亭客話」に成都の漆匠艾延祚の物語が載つて居るのに依つても知られるが、昔に比しては大に衰へたやうである。

元を経て明に至れば、浙江及び福建に於いて漆器が益盛に製造された。浙江では嘉興・寧波・金華・嚴州・温州の諸府、福建では漳州・福州・龍巖州等がその主なる産地であつた。江蘇の蘇州、安徽の徽州、江西の廬陵（吉安縣）からも優秀な作品を出した。北京には官設の漆

器製造所果園廠があつて、永樂以來技術の精巧を以つて著れた。清代では北京・蘇州・鎮江・寧波・福州・漳州・贛州・西安並に廣東などから産出したが、技術は乾隆以來衰替したと云はれて居る。廣東では元の頃から既に漆器を製したが、それが盛大となり、支那屈指の産地となつたのは清代であつた。

漆器製造の技術は漢代に於いて既に目ざましい發達を示した。當時漆工は木地を造るもの、下塗をするもの、上塗をするもの、磨きをかけるものに分れ、順次に素工・髹工・上工・彫工と呼ばれたこと、漆器の面に赤・青・黄等の彩漆を以つて紋様を描き、或は刀を以て繊細なる彫刻、日本でいふところの毛ぼりを行つたことなどは、樂浪出土品に依つて明瞭である。少くとも漆器そのものの製法は、漢代に於いて我國今日のそれと略同じ階段に達したといつてよいやうである。唐から宋元を経て明に至る間には、漆器はその加工裝飾の方面に於いて絶大の進歩を遂げ、宋元二代がその頂點であつた。明末の嘉興府西塘の楊明が「髹飾錄」の序に「今の工法、唐を以つて古格と爲し、宋元を以つて通法と爲す、又た國朝廠工の始製に出づる者多し、是れを新式と爲す」とあるが、これは漆器加工の歴史を述べ、簡にして要を得たものであらう。「髹飾錄」は徽州の名工黃成が漆器の製法、特にその加工の方法を説述したもので、塗抹・

描寫・彫刻・填嵌等の加工方法七八十種を擧げて居る。その中最も著名なのは犀毗・剔紅・餛金・餛銀・撥犀・螺鈿等で、唐若しくは宋元以來行はれ、明代には、此等の宋元名器が少からず存したやうである。犀毗(6)とは黒漆・紅漆・黄漆を重複塗抹し、その上に片雲圓花の類を深く彫刻したもの、剔紅は金屬又は木を胎(下地)と爲し、これに紅漆を厚く塗り、劍環香草又は山水人物等を鏤刻したもので、宋の内府のものは多くは金銀を胎としたといふ。元代では嘉興府西塘の張成・楊茂がその名工として著れ、明代では果園廠でこの方法に依つて盛に合や匣を造り、その優秀のものは元の張楊に劣らなかつたとのことである。餛金は主として朱漆又は黒漆に山水花鳥等を深く彫り、そこに金薄又は泥金を填めたもの、餛銀は餛金の金に換へるに銀薄銀泥を以つてしたものであつて、元代では嘉興西塘の彭君寶がその名工として著れた。撥犀は犀毗に處々人物景致を餛金したもの、螺鈿は漆面に蚌の殻を鏤めて様々の物象を現したものである。螺鈿は、宋の方勺の泊宅編には「本と倭國に出づ」とあつて、日本で創案され、支那に傳はつたもののやうに見えるが、さうではなく、惟だ日本の製作が非常に巧妙であつた爲め、左様な流説が起つたに過ぎないやうである。明代に於いては主として廬陵で造られた。以上の外、明代では、填漆といふものが造られた。これは花鳥の類を刻し、彩漆を填充し、磨

をかけたもので、果園廠の作が最も優秀であつたと云はれる。又た描金・瀟金・縹霞彩漆などいふものがあつた。これは日本の蒔繪に摸したものである。漆器に對する支那從來の加工法は主として彫刻又は填嵌に屬するもので、金泥の類を以つて漆面に物象を描くといふことは殆ど無きに近かつた。金を以つて物を描くこと即ち蒔繪は我國で平安朝以來大に發達したのであるが、明の宣德以後、支那に傳はり、浙江福建並に北京南京等で多く造られ、天順中の工人楊垣がその名手として人口に膾炙して居る。清代では彫琢を主とする彫漆では北京と蘇州とが勝れ、描寫を主とする畫漆では、廣州と福州とが勝れた。要するに漆器は早く發達し、器體そのものは漢代に於いて既に殆ど極度まで進み、さうして唐以後加工に於いて復た驚くべき進展を見せたのであるが、明の末から漸く衰へ、清の乾隆以後更に衰へたのである。

二 陶 磁 器

陶器は石器時代から存し、その由來の遠いことはいふまでもないが、秦漢の際には轆轤を用ひて形を整へること、陶土と灰とで作られた釉を以つて素地を飾ることも知る程度に及んで

居た。しかしその素地には赤味ある粘土が用ひられ、釉も粗製である爲め概ね赤黒く、美觀の乏しいものであつた。偶西域との交通が開け、波斯方面から曹達性及び鉛性の釉薬の製法が傳來し、それは美しい、青・緑・紫・黒等の色を呈したので、大に歡迎され、支那固有の灰薬釉の使用は一時衰へ廢れた。然るに晉の頃から赤粘土を棄てて白陶土（白堊）を用ひて素地とし、純粹に近い陶土と灰との釉を加へ、且つ高温度を以つてそれを焼成することが試みられ、次第に成功し、釉薬に他の成分を混すること及び火の調子如何に依つて青色を出すことも出来るやうになつたやうである。この作業は硝子の製法に刺激されて出で來つたものらしく、廣州越州等南方に於いて行はれ、これに對して北方では主として西域系統の釉を用ひる從來の手法が行はれた。かくて唐代に入つた。

唐代では陶器の燒造は廣く各地方で行はれたが、その内優品を出したのは越州（今の浙江省紹興縣）、邢州（河北省順德縣）、鼎州（陝西省涇陽縣）、婺州（浙江省金華縣）、岳州（湖南省岳陽縣）、壽州（安徽省壽縣）、洪州（江西省南昌縣）吉州（同吉安縣）等であつた。陸羽の茶經に越州の産と邢州の産とを比較して「邢瓷は銀に類し、越瓷は玉に類す、邢、越に如かざる一なり、邢瓷は雪に類し越瓷は氷に類す、邢、越に如かざる二なり、邢瓷は白くして茶色丹

に、越瓷は青くして茶色綠なり、邢、越に如かざる三なり」と云つて居る。中尾萬三博士はこれを解釋して⁽⁸⁾釉の光澤の比較と爲し、銀に類すとは、釉の感じが薄つべらで滋潤の趣又は温みの無いことを指す、又雪に類し氷に類すとは釉の透明不明を形容したもので、邢瓷は白いけれども光澤が無くて失透し、越瓷は光澤があつて透明だとの意味とせられ、越州は還元焰を用ひ、邢州は酸化焰を用ひて、窯の温度に高低の差があり、邢州では支那固有の灰薬釉を用ひるに至つては居るが、まだ還元焰燒成の眞諦に達せなかつたものと見られたが、妥當な考察であらう。要するに唐代では、大體に於いて、やはり南北燒造の方法を異にし、北方では南方の進歩した方法を取入れつつも、十分追隨するには至らなかつたやうである。

五代後周の世宗の時、鄭州（河南省鄭縣）に設けられた御窯から逸品を出した。後世これを柴窯と云ひ又雨過天青窯とも云つた。柴は世宗の姓で、雨過天青は雨過ぎ天青く雲破るる處、者般の顔色を作し將ち來れといふ世宗の言葉に因んだものであつて、青色釉の陶器で、古來諸窯の冠と稱せられたが、今日では殆ど存しないやうである。宋代に入ると、定州（河北省定縣）、磁州（同磁縣）、許州陽翟縣（河南省禹縣）、汝州（同臨汝縣）、壽州（安徽省壽縣）、饒州景德鎮（江西省浮梁縣）、處州龍泉縣（浙江省龍泉縣）、建寧府建安縣（福建省建甌縣）、吉

州（江西省吉安縣）、洪州（同南昌縣）等から優秀な製品を出した。定州のものは定窯と呼ばれ、主として白色であるが、黒のもの紫のものあつて、白きは白定と呼ばれ、黒きは黒定、紫なるは紫定と呼ばれる。いづれも細膩な陶土を焼き締めて薄手とし、表面に牡丹・萱草・飛鳳の類を模様づけたもので、その模様づけには劃花・繡花・印花・錐花・堆花等の方法があり、劃花は刀を以つて刻し、繡花は針を以つて刺し、印花は板を用ひて印し、錐花は錐尖を以つて鑿成し、堆花は筆を用ひて盛上げたもので、筆と顔料とを以つて描寫したものではなかつた（但し白定には間々黒繪づけしたのものもある）。北宋時代の定窯は北定と呼ばれ、宣和・政和間に造られたものが最も佳とせられ、南渡後、景德鎮で焼かれたものは南定と呼ばれる。磁州の製品即ち磁州窯は、いづれも白定の一種に見るやうな黒繪づけ即ち黒い顔料を以つて花卉禽鳥を描いて居り、その奔放な筆致は愛すべきであるけれども、品質は上等でないとせられてゐる。陽翟縣の製品は均窯と呼ばれる。陽翟縣の北門外に夏王啓の遺蹟と傳へられる鈞臺がある。金の大定二十四年以來これに因んで陽翟縣を鈞州と稱し、明末禹州と改めた。景德鎮陶錄には「均窯亦宋初所燒。出鈞臺。宋亦稱鈞州。即今河南之禹州也。」と云ひ、宋の時鈞州と稱したやうに述べたのは誤で、それは金に始まるのである。均は鈞の通用であることいふまでも

ないが、均窯の名が若し宋代から存したとすれば、それは鈞臺に本づいたものであり、金元以後に起つたとすれば、主として鈞州といふ州名に因つたものと見るべきであらう。均窯は大體紫紅色で、その美しさを以つて世を驚かしたものであるが、微妙な變化に富み、殊の如きものは殊砂紅・火焰の如きものは火裏紅色、幾分黒ずんだものは豬肝、紫のものは茄皮紫と云ひ、尙ほ青色のものもあつて、葱翠青、鸚哥綠などと呼ばれた。中尾博士に依れば、均窯は銅呈色灰釉を使用し、且つ南方から學んだ還元焰と久しく北方に行はれた酸化焰とを自由に使ひこなした結果、從來存しなかつた複雑な色彩を現し得たものであつて、支那の窯器は、かくて、南方で發達した青磁の美の外、紅紫様々の色彩の富を誇ることとなつたのである。

汝州窯は、北宋の時、朝命に依つて造られたものと傳へられ、柴窯の系統を引いた青色であつたやうに云はれてゐる。景德鎮の窯器燒造は唐代から行はれたやうであるが、盛に爲つたのは宋の初で、その地も眞宗の時、鎮と爲り、年號を取つて景德と呼ばれることと爲つたのである。ここで窯器が發達したのは、その附近から優良な白堊を産した爲めで、宋代には夙に玉を欺く白磁風のもの造られ、南渡後は北方の熟練工匠がここに移り來つたらしく、南北諸窯の特色を併せ、支那第一の窯器産地と爲つたやうである。龍泉縣からは哥窯と龍泉窯とが出で

た。この地に章生一・章生二の兄弟があつて、兄生一の焼くところを哥々窰又は哥窰と云ひ、弟生二の焼くところを龍泉窰と云ひ、其の色は濃淡様々であるが、要するに青磁であつた。二人亡き後もその手法に依つて焼造が續けられた。建安縣の陶磁は建窰又は烏泥窰と呼ばれ、上に述べた諸窰と異なり、厚手で、黒褐色で、質も粗糙であるが、一種愛すべき滋潤の趣を湛へ、黃兔斑・滴珠などいふ面白い斑點があつて、茶人に賞用せられた。我國ではこれを天目手と云つて居る。吉州・洪州からも此の種のを産したと云はれる。

右の外、官府に依つて管理される製陶場があつて官窰と呼ばれた。それは徽宗の政和中、東京開封府に置かれたのが初で、南渡の後は、臨安の修内司に窰を置いて焼造し、精巧を極めたと云はれて居る。

以上は宋代に於ける著名な陶器の一斑である。宋の陶器も勿論一樣ではないが、大體、素地が堅く締まり、素地と釉とが善く折合ひ、釉の色が言ふべからざる微妙な美しさを持ち、模様が典雅で、全體の形も拔目無く整つて居り、空前の發達を遂げたのであるが、これを科學的に觀れば、支那固有の灰藥釉を完成し、主として高熱を用ひ還元焰を用ひると共に酸化焰をも適宜利用したものであらう。

元代では、他の文化と同様、陶瓷の技術も衰へきみであつたが、明から清へかけて更に發展した。從來の陶器は主として篋又は刀を以つて模様づけられた。宋元の際から黒色稀には赤色の顔料を以て紋様を描くこともあつたが（これは主として磁州窰）、廣く行はれなかつた、明代になると、青色の顔料を以つて様々の物象を描くことが盛に行はれ、これを青花と云つた。青花に用ひられる顔料を日本では呉須と呼んで居るが、これは酸化コバルトとマンガンを含み、還元焰に因る極度の高熱が用ひられ、且つ窰業としての各方面の條件が揃はなければ出來ないもので、青花の發達は支那窰業技術の一大進歩を示すものと云はれる。宣徳以後は別に赤く繪づけすることが出で來つた。これは銅呈色の顔料を用ひたもので釉裏紅と呼ばれた。（我國ではこれを赤繪といひ、萬曆のものを最も賞玩して居る）青花も釉裏紅も釉の下に描かれたもので、いはゆる下繪付けであるが、嘉靖以後になると、釉の上に山水、人物、花鳥等を描き、その上に又た釉を掛ける、いはゆる上繪付けが發生した。明末の五彩と稱へられるものが是れである。五彩は、釉が透明な爲め反つて筆路が露骨過ぎ、落附きがわるかつたが、清の雍正中に至つて、適度に不透明な釉が發見され、畫面に優雅な趣を添へた。いはゆる粉彩が即ちこれである。かくて繪づけが自由自在になり、普通の繪畫と殆ど同様に筆を揮ふことが出来る

やうになり、その技術は絶頂に達した。尙ほ原料が益精選され、堅く焼き締められて、磁器質のものが多くなり、形も大小自在で、従来に無い巨大なものが造られるやうになつたのも此の時代である。

明清の際、陶器の製造は遍く各省で行はれたが、その内、嶄然として擢んで、技術に於いても産額に於いても絶対に他の追随を聽さなかつたのは、江西省饒州府の景德鎮であつた。これは、附近に良質の陶土を多く産出したのと、南宋以來名工が集まつたのと、朝廷の御窯が置かれ、此の地の窯業が直接間接に少からず保護を受けた爲めであつた。

上文に陶器と云つたのは通俗的な使ひ方で、焼物の意味に過ぎない。精密に云へば、陶器は炆器・磁器と並ぶ焼物の一種である。この意味の陶器は一千度以下の火度に依つて焼造され、素地が不透明で吸水性を有するもの、磁器は一千四百度以上の火度で焼かれ、半透明で吸水性の無いもの、炆器は磁器程に焼締められず、幾分吸水性あるものである。小森忍氏の研究に依れば、支那古來の陶器の中、唐以前のもものは陶器で、宋代のもものは炆器若しくは半磁器、南宋の修内司窯、景德鎮窯等は磁器だといふことである。焼物の工藝上の價値は、必しも此の區別だけに依つて定まるものでないことは、いふまでもなからう。

清末、景德鎮では、分業が驚くべき程度に行はれて居た。窯戸（かま元）と工人と分かれて居たことはいふまでもなく、窯戸にも燒窯戸、搭坯窯戸、燒圖窯戸等の五種類があり、一般工人は陶泥工、拉坯工、印坯工等十七種に分かれ、染附工人は乳顔料工、畫樣工、繪事工等六種に分かれたことが「景德鎮陶錄」⁽¹¹⁾に見えて居る。各種の工人は或は窯戸に使用され、或はその依頼をうけて工作に従つたので、事業の中心は窯戸であつた。如上の分業は餘程以前から次第に發達したものに相違ないが、その過程を詳にすることは容易でない。

以上の如き發展を遂げた支那の窯器も道光以後は振はず、技術も衰頽に傾いた。景德鎮は長髮賊の兵火の爲め半ば廢墟となり、亂平いで後稍恢復した。民國となつてからは、他の産業と共に景德鎮の窯業も益不振に陥り、特に共匪の亂を経て殆ど崩壊した。さうして外國の陶磁器の輸入が年々増加したのである。

(本項の記述は藥學博士中尾萬三氏著「支那陶磁源流圖考」に依ることが頗る多い。特に科學的解説は殆ど全く同博士に従つたものである。深く謝意を表す。)

三 絹 織 物

支那は絹織物の原産地であるから、悠遠な古代からそれが生産されたことはいふまでもない。絹織物の中、最も早く造られたのは、平絹で、當時、繒・紵・縞・絹などと呼ばれたものであつたらうが、漢魏の頃になると、この外、錦・綾・羅・縠・紗等の優秀な織物が出来、絹織物の主なる種類はあらし出揃つたやうである。錦は色糸を織つて文様を現したものと云はれるが、その上品には金糸が織込まれたらしく、錦といふ言葉も恐らくそこから出たのであらう。錦は南北朝時代には蜀に始まると云はれたが、それは當時蜀が天下第一の錦産地であつた爲めであつて、必しも事實ではないやうである。錦が中原地方に早くから行はれたことは、詩經衛風碩人に「衣錦褻衣」とあるに依つて知られ、漢代、襄邑（河南省睢縣）でそれが盛に造られたことは説文錦字の條に依つて知られる。綾は一色の糸で織られ、氷のやうな地紋を現したもので、羅は撚織の薄絹、縠（近代では縐といふ）は縮緬の如き縐襪あるもの、紗は極めて軽い薄絹で帽子などに用ひられるものである。尙ほ織成・繒などいふものがあつた。織成は綴

の錦であり、繒は刺繒である。降つて唐宋に及ぶと、又た一大進展を遂げた。染方と織方とが複雑多岐と爲り、各種の絹織物は更に數十種の細別を生じた。宋錦の名色は元の費著の「蜀錦譜」や明の張應文の「清秘藏」など種々の文獻に見えて居るが、便宜上、「博物要覽」⁽¹²⁾に掲げられたのを轉載すれば次の如くである。

紫寶階地錦	紫大花錦
五色篋文錦	紫小滴珠方勝鸞鵲錦
青綠篋文錦	紫鸞鵲錦
紫百花龍錦	紫龜紋錦
紫珠燄錦	紫曲水錦
紫湯荷花錦	紅霞雲鸞錦
青樓閣錦	青大落花錦
紫滴珠龍團錦	青櫻桃錦
皂方圓白花錦	褐方圓白花錦
方勝盤象錦	毳路錦

- | | |
|--------|----------|
| 衲錦 | 柿紅龜背錦 |
| 樽蒲錦 | 宜男錦 |
| 寶照錦 | 龜蓮錦 |
| 天下樂錦 | 練鵲錦 |
| 方勝練鵲錦 | 綬帶錦 |
| 瑞草錦 | 八花暈錦 |
| 銀鈎暈錦 | 細紅花盤鵲錦 |
| 翠色獅子錦 | 盤毬錦 |
| 水藻戲魚錦 | 紅遍地雜花錦 |
| 紅遍地翔鸞錦 | 紅遍地芙蓉錦 |
| 紅七寶金龍錦 | 倒仙牡丹錦 |
| 白蛇龜紋錦 | 黃地碧牡丹方勝錦 |
| 皂木錦 | |

これは青畫の裝潢に用ひられた錦の名色で、恐らく宋代の上等の錦であつたらう。名稱だけ

を觀ても五采燦爛として目を奪つたことが想像せられる。尙ほ同書には宋綾の名目として次の如く記してゐる。

- | | |
|-----|--------|
| 碧鸞綾 | 白鸞綾 |
| 皂鸞綾 | 皂大花綾 |
| 碧花綾 | 姜牙綾 |
| 雲鸞綾 | 樽蒲綾 |
| 大花綾 | 雜花綾 |
| 盤鵲綾 | 濤頭水波紋綾 |
| 仙紋綾 | 重蓮綾 |
| 雙雁綾 | 方基綾 |
| 龜子綾 | 方穀紋綾 |
| 鴻鵠綾 | 棗花綾 |
| 鑑花綾 | 疊勝綾 |
| 白毛綾 | 遼國綾 |

回文綾

白鷺花綾

白鷺雀綾

宋の綾も漢代のそれと同じく一色の絲を以つて織られたものであるが、その色が豊富となり、且つ古の如く氷紋を現す外、自由に花卉禽獸の類を織り出すことが行はれ、名づけて花文綾又は花綾と云つた。花文綾は唐から宋へかけて發達したので、右に掲げたのはいづれもそれである。尙ほ宋代では刺繡が精巧を極め、同時に刻絲といふものが起つた。これは梭を用ひる外、手づから緯絲を綴りこんで織り、山水樓閣花鳥等を意のままに現し、機織を以つて刺繡以上の効果を出したもので、河北西路の定州（河北省定縣）や浙西の秀州華亭縣（今の江蘇省松江縣）で主として造られ、名人としては華亭の朱克柔が最も著れて居る。唐宋二代に各種の絹織物が異常の發達を遂げたが、宋のそれが特に優れたやうで、「清秘藏」⁽¹³⁾にも「唐の絹は粗にして厚く、宋の絹は細にして薄し、元の絹は宋の絹に似て而して勻淨ならず」と云つてゐる。

元より明清に互つて各種の絹織物は引續いて盛に造られた。錦も綾も羅も紗も縠も様々の平絹も造られた。錦では幅一丈に餘る帷帳で、方四寸の大字を以つて滕王閣序や晝錦堂記などを

織り出したものが、元明の際、蘇州・泉州等で造られたが、斯様な闊大な錦は從來存しなかつたであらう。細く強い經絲に太い緯絲を織りこんだ厚手の絹で、或は黒・紺等の無地であり、或はそこに花文を現したのも造られ、明代ではこれを紵絲と呼び、清代では緞又は緞子と呼んだ（日本では縞子といふ）。緞は南宋の時から存したが、發達して最高等の絹布と爲り盛に造られたのは明清時代であつた（同時に緞の稍薄手のものは綾と呼ばれ、さうして斜紋があつて地合の稍堅緻なもの、即ち日本でいふところの緞子は綢と呼ばれた）。緞の發達は古に無きところであるが、しかし絹織物製造の技術全體からいへば、近代は到底唐宋に及ばなかつたやうである。

絹織物は古代から、相當廣い地域に互つて生産されたが、漢の頃には今の山東及び河南の東部がその本場であつたこと、唐宋の頃には、北では河北山東、南では浙江江東、西では四川がその名産地であつたことは、前項に述べた如くである。明代では各省とも相當盛に絹類を産したが、中にも浙江が最も隆盛で、南直隸（今の江蘇安徽）がこれに次ぎ、北では山西の潞安府、西では四川が雄を稱した。清代では浙江江蘇、特に蘇州・杭州・南京が覇を唱へ、四川廣東がこれに次いだ。明清時代で尙ほ注意すべきは、河北山東、特に河北の絹産業が明末以來衰

へたこと、清に入つては潞安府のそれも衰へ了つたことで、かくて精巧な絹織物は専ら南方から産することとなつたのである。絹織物の種類と産地との關係を云へば、錦は初め襄邑などからも産したが、ついで四川の成都に優品が出て、唐宋の頃にも蜀錦の名は天下を壓した。明代でも、蜀錦は聲價を隕さなかつたが、しかし蘇州・嘉興等でも造られ、特に蘇州からは海馬・雲鶴・寶相花・方勝等、五色眩爛、古を凌ぐものが出來たと云はれる。綾は唐代では定州（河北省定縣）を始として河北一帶から多く出で、宋代に河北四川その他から出でたが、明以後は主として東南で造られることと爲つた。羅・紗等は唐宋以來主として東南で造られた。刻絲は初め主として定州で造られたが、ついで南方に傳はり、明代では蘇州・杭州並に湖南の永州等で造られ、定州では滅びてしまつた。紬は、明清では南北各地から産したが、清初までは潞安のものが最も優れ、潞紬と呼ばれて愛用された。緞は主として南京・蘇州・杭州から産出したが、四川の巴緞、福建の漳緞も著名であつた。

絹織物従業者は近代ではかなり細かく分化して居たやうである。清末、南京・蘇州等の工匠には機坊（機戸ともいふ）、料坊、打線匠・染坊・槌絲匠・絡絲匠等の種類があつた。機坊は織り屋で、機匠を用ひて織絨を行はしめた。料坊は紡車を用ひて絲に撚りを入れるもの、打線匠

は車に依らず、架子を用ひて撚りをおけるもの、染坊はいふまでもなく染め屋、槌絲匠は染められら絲を打ち柔らげてつやを出すもの、絡絲匠は槌絲を経た絲を小篋に繰り移すもので、以上の工程を終へて後、絲は始めて機臺に上されたのである。尙ほ模様を考案することも専門と爲り、挑花と呼ばれて居た。明の「萬曆會典」の工部織染所工匠の條には、織物關係の工匠の名稱が少からず載つて居るが、その中に、染匠・機匠・打線匠・絡絲匠・挑花匠の名が見出される。顧ふに染織技術に關する分業は、明末に於いて既に清末のそれに近い状態に在つたと見て大過無いであらう。清末、南京其他では、機坊自ら織機を具へ、生絲を買入れて料坊以下に託して必要な工作を加へしめた上、これを織つて賬房といふものに賣渡すものと、賬坊から機具を借り、且つ絲の交付を受けて織絨するものと、二つの種類があり、後の方が主として行はれた。賬坊は我國の本機屋に當るものである。その起つた時期は明でないが、恐らく初には機業の中心は機坊であり、後、機坊より一層豊富な資本を持つものが賬房として現れ、斯業の實權を握るやうになつたのであらう。如上二つのいづれの場合でも、機坊は、通例三五臺若しくは七八臺の織機を用ひ、機匠を雇つて織らしめたのである。光緒二十五年に印行された「鳳麓小志」に「舊制、一戸の領する所の機百張を逾ゆるを得ず、以つて兼井を抑ふ」とあるが、こ

これは賑坊について云つたので、いはゆる百張の機は多くの機坊に分ち貸されたものと解しなればならぬ。「康熙蘇州府志」⁽¹⁶⁾によれば、工匠には各常主があるが、「主無きものは、黎明、橋に立つて以つて待つ、緞工は花橋に立ち、紗工は廣花寺橋に立ち、車を以つて絲を紡するものは車匠といひ、濂溪坊に立つ、什百羣を爲し、頭を延ばして望む、流民の相聚るが如し、每橋行頭有り、云云」とある。當時賑坊が存在したかどうか詳でないが、いづれにせよ、此等の市に往つて工匠（主として機匠）を雇入れたものは機坊であつたと見るべきである。又た一八三年發行の「チャイニーズ、レボジトリ」(二卷七號)によれば、當時廣東佛山鎮には織物工場が二千五百、工匠が五萬人、一工場平均二十人であつたといふことである。これはあらゆる織物の工場についての統計であるが、廣東地方では麻布絹布の製造が最も盛であつたら、この統計も主として麻布並に絹布の工場に關するものと見てよからう。此の二十人の工匠が用ひた織機の數は、假りに一機に二人づつ従事したとすれば十臺であり、三人づつ従事したとすれば七臺許であつて頗る小規模である。顧ふに南京・蘇州方面でも、機坊一戸に於いて、これくらゐの工人は雇用したであらう。支那の絹織物關係の技術者——必しも絹織物の場合だけではないが——は大抵家庭的に營業し、工場として發達する可能性の多い機坊さへもかやう

に小規模であつて、工場といふ程の形體を具へなかつたのである。(朝廷で用ひられるところの絹織物を作るため、官に於いて大工場を設け、多數の工人を使役することは、漢の頃から行はれ、繼續して近代に及んだのであるが、ここには省く)。

織絨の器具としては、腰機と花機とがあつた。これも由來久しきものであつて、元代に於いて既に此の二つの存したことは明瞭である。腰機は日本でいふゐざり機^{ぼざり}で、工匠一人で織る小さい機である。花機はいはゆる空引機^{そらひきばた}で、二人若しくは三人で織る、かなり高大な機である。清代に於いても、主要な絹産地では主として花機を用ひてその生産に従事したが、光緒の末頃、先づ漢口で洋式織機「チャカード」が輸入使用され、ついで杭州で用ひられて異常の成功を遂げ、緞子の織造に於いても南京を凌駕するに至り、かくて他地方にも次第に擴がるやうになつたのである。

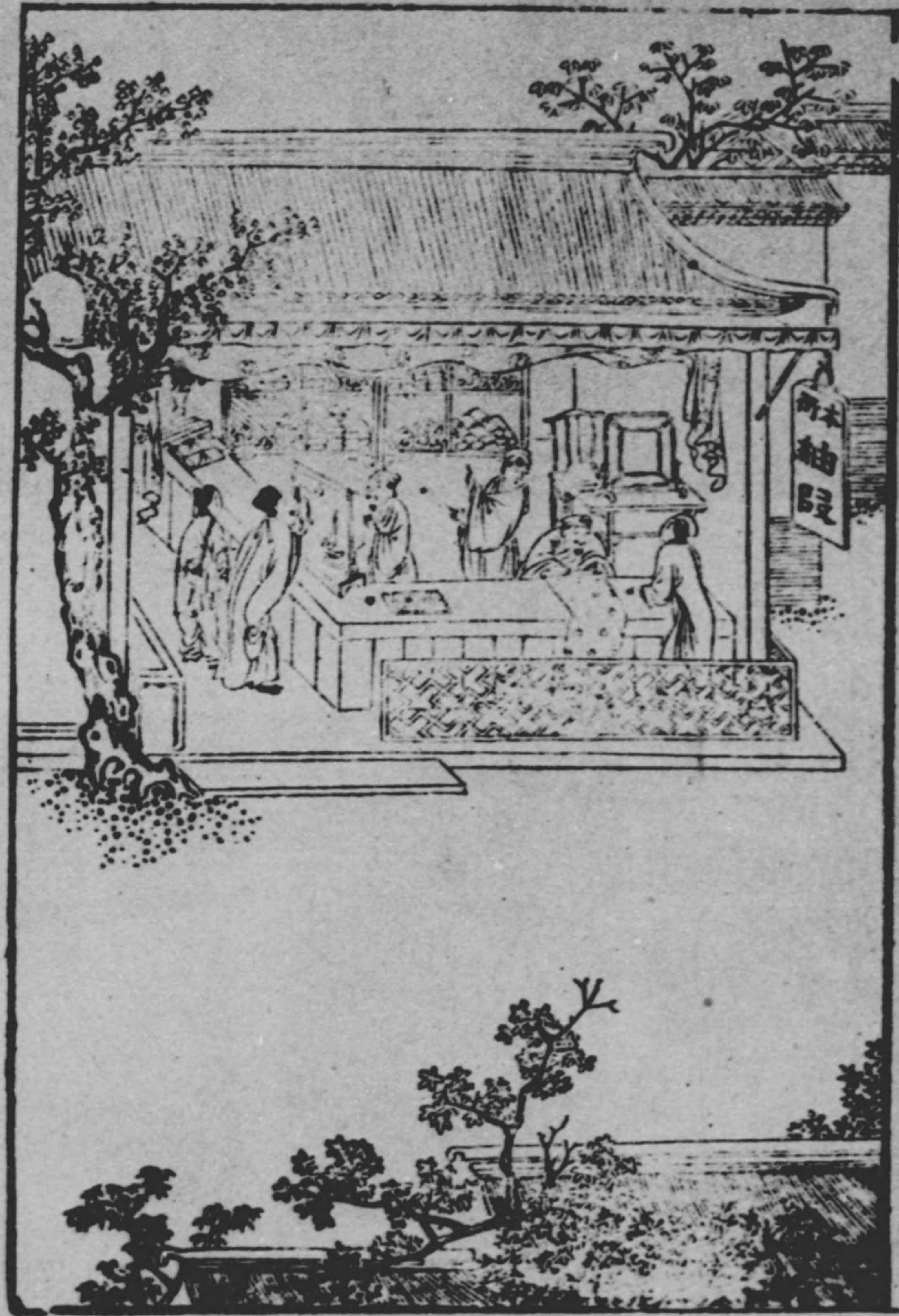
支那の工藝品は勿論以上數種に盡きるのではない。その他、金屬器、即ち金銀器・銅器・鐵器・錫器並に玉器・石器・牙器・竹木器等色々あり、技術の精巧なもの、經濟的に重要なものも少くないが、本稿には省略する。

1 「樂浪」三六頁。

支那經濟史概説

- 2 「袖中錦」は學海類編に收められて居る。
- 3 吳自牧「夢梁錄」卷一三、鋪席。
- 4 黃休復「夢亭客話」卷六、艾延祚。
- 5 「樂浪」三六一—三九頁以下。
- 6 漆器製法の説明は曹昭「格古要論」卷八、高濂「遵生八牋」卷一四、耶瑛「七修類稿」卷四七、「樂飾錄」、高士奇「金齋退食筆記」、「古今圖書集成」考工典第十卷漆工部等、並に西山榮久氏「支那漆器ノ既往ト現在」(東亞經濟研究第七卷第二號第三號)に據る。
- 7 「茶經」卷中、四之器、盃の條。
- 8 中尾博士「支那陶磁源流圖考」二三頁。
- 9 「景德鎮陶錄」卷六、佩仿古窯改、均窯。
- 10 小森忍氏「支那古陶磁の語」(東亞研究會發行)一九二〇頁。
- 11 「景德鎮陶錄」卷三、陶務條目。
- 13 谷應泰「博物要覽」卷一二、宋錦名目。
- 13 張應文「清秘藏」卷上第十八、論古紙絹素。
- 14 「萬曆大明會典」卷一八九、工匠二、住坐人匠。
- 15 陳作霖「鳳麓小志」卷三、記蠶業第七。
- 16 「古今圖書集成」考工典第十卷、織工部に引くところに據る。

第九圖

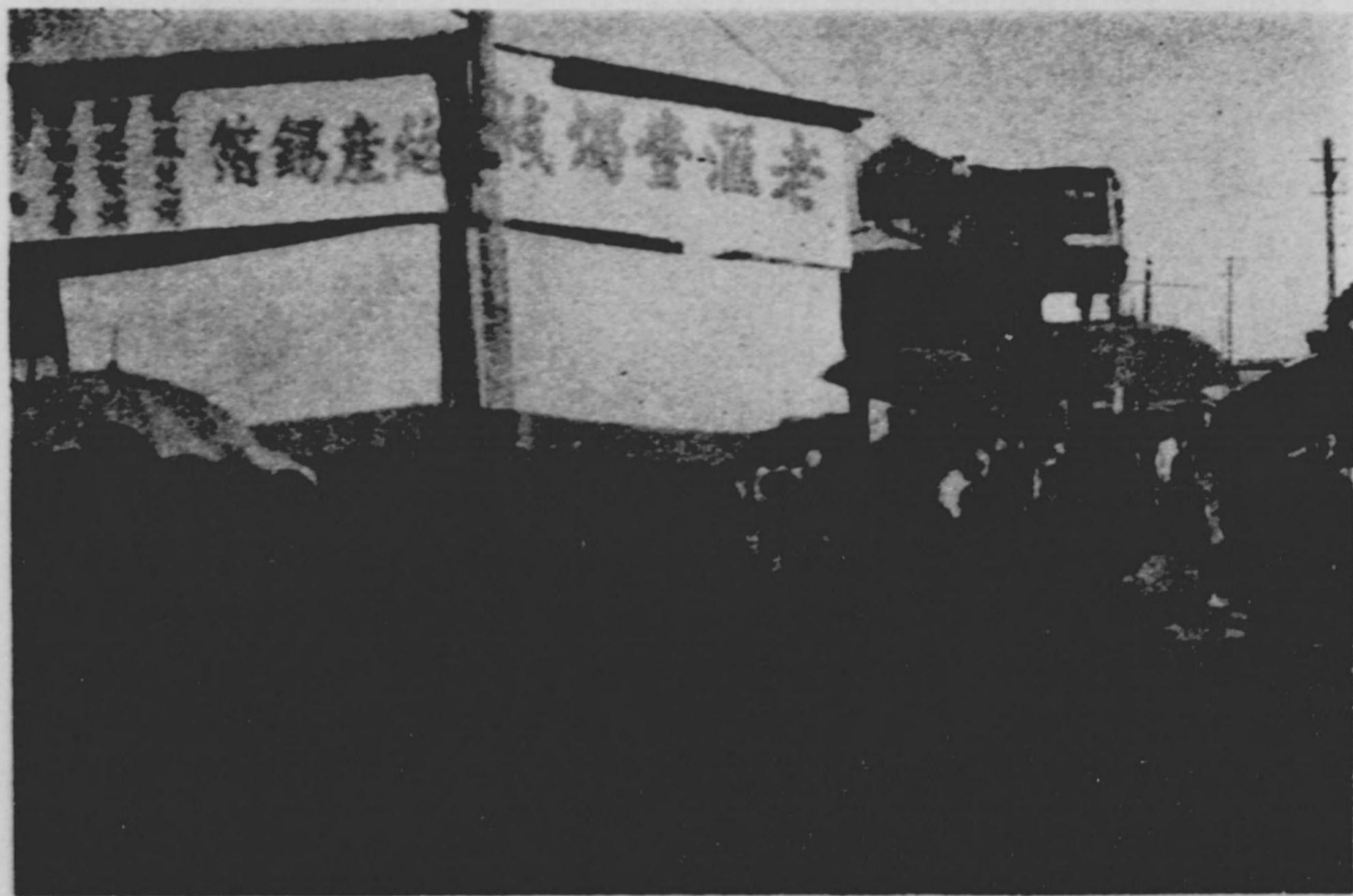


金瓶梅

第六十回

李瓶兒病經死葬
西門慶官作生酒

明の代の綉緞鋪
店頭天秤の銀は盛に用ひられを示す
(萬曆版金瓶梅插圖)



上 蘇州 妙觀境 の内 市の
下 蘇州 閘門 外 渡僧橋 の 菜市
(影撮者著)





第十一圖

門中館會行器王京北
西路內口園土沙廠瑯琥
(影撮者著)



第十二圖
北平琉璃廠沙土園內口西路
(影撮者著)

第七章 商業

包犧氏の時、日中に市を爲し、天下の民を集めて交易せしめたといふことは人口に膾炙して居るが、此れは戦國時代の傳説で、其儘信すべきでないことはいふまでもない。しかし支那に商業の發生したのは悠遠な古代のことで、周代には勿論存在し、春秋戦國の際、列國の交通が頻繁になり、且つ諸侯が強大となつて奢侈を擅にするに伴つて發達し、秦漢に至り統一政治が行はれると共に、種々の便宜を得て、商業は更に發達した。三國から五胡騷亂の時代にかけては、商業は一時衰替し、南北朝時代にも猶ほ振はなかつたが、隋と爲り、唐と爲り、進んで宋に入るまで、次を逐つて發展繁昌し、特に宋代に於いては劃期的の繁榮を示した。さうして其後引續き向上の一路をたどつて今日に至つた。支那の如き幅員の廣大な國土に於いては、東西南北、土宜物産を異にし、従つて有無懋遷の必要を生じ、人口の増加するにつれて商業の旺盛を來すは固より當然である。

支那の商業の歴史を説くには、市の考察から始めるのが適當であらう。市は限定された商業

區域である。支那最古の辭書の一つである「説文」に従へば、垣を廻らした賣買交易の場處を意味し、これをしといふのは之くといふことから起つたのである。此れに依つても、市が上古からその場處が一定して居て、物資の供給者も需要者もそこに行いて取引したことが窺はれる。市は、初には賣手買手が日を定めて集まるだけであつたが、後、それに嫌らずしてその中に商店を設け、商店では毎日商業を營むやうになつた。かやうな有様がいつ頃から起つたかは詳ではないが、秦漢時代には既にさやうであつた。さうして其後久しい間、商店は少くとも原則として市の中に設くべきものとせられた。又た日を定めて開く市即ち定期市は、或は市の内部で、或は市の外の便宜の場處で開かれた。市といふ語は商店の立並んだ立派な商業區域であるところの市に對しても用ひられ、同時に定期市に對しても用ひられた。尙ほ商業區域たる市の營業時間に對しても制限が加へられ、唐代に於いては、正午鼓を撃つて市を開き、日没前又た鼓を撃つてこれを閉づることと定められた。漢の長安の東市・西市並に吳市・燕市・臨淄の市などから、降つて唐の長安の東市・西市、洛陽の南市・北市、揚州の東市、淮安の西市、夔州の西市などと呼ばれたものは、皆上述の如く、場所と時間との制限を被つたものであつたのである。

市の商店について更に注意すべきは、各種の商店が入りまじつて思ひ思ひに設けられたのでなく、これも少くとも原則としては、種類を同じうする多數商店が一個處に集まつて居たことである。即ち同種同業の商店が集まつて一つの町を成して居たことである。この慣習の起源も餘程古いもので、恐らく市に店舗を設けず、生産者若しくは商人が貨物を携へゆき、隨時假店を作つて商賣した時代に胚胎することと察せられるが、要するに賣手買手双方の便宜に促されて起り來つたものであらう。この同業商店の町を秦漢の頃には肆又は列と呼び、隋唐から宋にかけては行と呼んだ。唐の文獻、例へば劇談錄⁽¹⁾や乾闥子のやうな書に見える肉行・鐵行・衣行・鞞行・絹行・藥行・魚行・金銀行・銀行の如きも同様であつて、肉行は肉屋の町、鐵行は金物屋の町、衣行は仕立てた衣服を商ふ店の町、鞞行は馬具屋の町、絹行は呉服屋の町、藥行は藥屋の町、金銀行・銀行は金銀細工屋の町である。行の數がかなり多かつたところから、これを一括して百二十行・百行・六十六行などと呼ばれた。冠せられた數は多數を示すだけで、本當の計數ではない。行には首長があつて行内商店の取締に任じ、行頭・行首などと稱せられた。行は或は市とも呼ばれ、宋代では其の或るものは團とも呼ばれた。

右に述べたやうな市は、唐代では、縣治以上の都會に設けられたのであつて、縣治ならざる

小都市若しくは大小村落に於ける商業地は必しも右の如くではなかつた。此等の場處に於ける商業地區は草市と呼ばれ、商店が不規則に設けられ、さうして定期市が一層の重要性を以て開催されたやうである。

さて市の制度は宋代に至つて一大變化を生じた。唐の後半から既に多少さやうな徴候が現れつつあつたが、北宋の中期以後に至つては、商店の設置を市内に限るの制度は全く崩壊し、都城内に到る處に商店が設けられるやうになつた。行の制度は全然亡びたのでなく、その或るものは、猶ほ同業商店の集合といふ舊い面目を維持しつつあつたが、しかし市といふ地域の制限を離れたことはいふまでもなく、以前のやうな純一性をも持たなくなつたやうである。同時に營業時間の制限も破れ、夜間の賣買も勝手に行はれ、夜市の盛を以つて鳴る都市も現れた。支那の都會は宋代に至つて始めて近代的となつたと謂つてよい。此の都市の規格が元明清と引續いて行はれたのである。

定期市は市制崩壊前に於いてもかなりの重要性を持つて居たが、崩壊後愈それが加はつた。定期市は色々に分類し得るが、都會と田舎即ち村鎮の市とに分けて説明して見よう。都會の定期市は更に一年に幾回か開かれる市と一旬に幾回か開かれる市と毎日開かれる市と、簡単に云

へば、年市、旬市、日市の三種に分けられるが、ここでは日市をも旬市の一種と見なすこととする。年市の例としては、唐宋の際、成都で春秋一回づつ開かれた薬市、同じく成都で正月及び三月に開かれた蠶市を擧げてよい。薬市はいふ迄もなく生薬の市で、蠶市は養蠶器具の市であつた。降つて清代、直隸省祁州（今の安國縣）の薬市も同様である。この薬市は祁州南關の薬王廟で四月と十月とに開かれ、期間は春は二十日、冬は三十日に互り、近くは山陝、遠くは川廣雲貴に及ぶ諸地方の薬商が其の地の生薬を携へて來り、北方各都市の賣薬業者は待受けてこれを仕入れ、長江以北に於ける薬材の供給は主としてここで行はれたといふことである。薬王廟は、乾隆祁州志に依れば、宋の徽宗の建中靖國元年、靈貺侯に封ぜられ、後、王に進封されたとのことであるが、そこで開かれた薬市も恐らく久しい歴史を持つもので、或は宋元以來行はれ來つたのかも知れぬ。旬市の例としては宋の開封の相國寺の市を擧げることが出来る。相國寺では三八の日に市を設け、その中一日だけ罷めて月に五回とし、冠帽・首飾・弓劍・書畫より時果・密煎・脯腊等の飲食品、並に珍禽奇獸の類に至るまで、門といはず廊廡といはず、處狭きまでに陳べられ、士民雜踏を極めたことが宋人の隨筆に見えて居る。この種の市は明清時代に愈流行し、各都市の城隍廟などで盛に催された。寺廟の市には主として雜貨とか嗜

好的飲食品とかが賣買されたが、この外、日常生活の必需品を取扱ふ旬市も古くから有つた。それには土著商人と外來の客商とが外引するのと土著商人がその住民に鬻賣するとの二つの場合があつた。宋の臨安で毎日開かれた米市・蠶團の如きは前者であつて、清代から現今に互り、南北の大都市で開かれる菜市（蔬菜魚介の市）は後者と見てよいやうである。菜市といふ語も唐宋に既に存したのであるが、當時商人同志取引する市であつたか、商人から市民に賣出す市であつたか詳でない。これ等の市は、通常、橋の袂とか城門の内外とか、すべて幾分餘地のある場處で開かれたやうである。以上は都會に於ける定期市の大略である。近代に至つて

次には村鎮の定期市も古くから存し、主として草市で催されたやうであるが、近代に至つて愈旺盛となつた。年市も稀に行はれたが、しかし専ら行はれたのは旬市であつた。清代では各州縣管内に於いて適當な鎮若しくは大村を選んで、十日毎に通例二回、多きは四回の市が開かれた。極めて稀ではあるが毎日市を立てる處もあつた。廣西では十二日に四回、即ち三日に一回市を立てたが、これは十二支に依つて日期を定めたのである。各村落は其の赴くべき市が指定され、少きは十村前後、多きは二十餘村の村民が一つ市に赴くこととなつて居り、村々と市場と距離は三四五支里が普通で、十支里乃至十四五支里に及ぶこともあつた。人口との關係を

云へば、四五千人乃至八九千人に一市の割合となるのが普通で、稀に三四萬人に一市の割合となる場合もあつた。村民はその生産した米糧薪菜並に其他の特産物を携へて市に行き、商人が都市其他から齎し來つた鹽茶布帛農器等様々の物品と交易賣買した。若しその地方が手工業地であれば、農民はその造り得た手工業品を市に鬻ぎ、必要ある場合にはその原料を市に仰いだ。生絲や綿花が生産者から商人の手に渡るのも市に於いてであり、それが商人から絲綿商や機械業者に賣込まれるのも市に於いてであることが多かつた。さうして、商人は大抵五六乃至十以下の一定の市を次から次へと移り廻つて營業したやうである。かくして村鎮の産物は市を通じて都市に運び出され、その地方に存しない生活必需品・手工業原料及び其他の貨物は市を通じて村鎮に供給された。村鎮にも多少とも商店が存したけれども、都鄙の物資の交流は主として定期市特に旬市に依つて行はれたのである。都會の市は都會の經濟活動の或る一部を受持つに過ぎなかつたが、村鎮の市は、近代に至つても、村鎮の經濟活動の大部分を擔當するものであつた。

同業商人の組合も市制變革の後確立された。「市」の制度が立派に存した時代には、或る都會に於ける或る種類の商業は、その行に依つて、委しく云へばその行に存する商店に依つて獨

占された。此れは市の制度の當然の結果である。然るに市が崩壊し、行の制度が殆ど解體するに及んでは、行の商業獨占權は殆ど喪失されんとした。是れより先、市制儼存の時から、同行の商店は、若干共同動作を爲す機會、例へば相共に神佛の祭祀を營むやうなことがあり、一種の緩慢な組合を作つて居たが、市制が潰滅し、同業商人の業務獨占權が脅威されるや、彼等は結束してこれを擁護せんとし、その結果、行は自らかなり鞏固な組合となつた。その時期は十分明でないが、北宋中期には既にさやうであつたと見てよいやうである。同業組合としての行は此後引續いて清代に至つた。従つて行と云へば此かる組合を意味し、延いて或る種の商業をも意味するやうになつた。尙ほ明末から清代にかけて南北の大都市に會館（一に公所）といふものが數多く造られ、輪奐の美を誇つた。會館には同郷官民が協力して設けたものもあり、商人の設けたものもある。さうして商人の場合にも、他郷から來つた商人の設立に係るものと本地商人のそれとの二種あるが、いづれにせよ業種を同じうする商人の團體、即ち行に依つて建造されたもので、歐洲中世のギルドホールに類したものである。行がその集會所として會館といふものを持つやうに爲つたのは、商業が著しく發達した爲めに他ならぬ。行はあらゆる商業に設けられたのでなく、またその性質も地方により業種によつて多少相違したが、大體に於い

て獨占的排他的な相當有力な組合で、南方特に廣東あたりでは殊に左様であつた。

支那の商業には客商といふものが活躍した。客商とは貨物を生産地から需要地方に運搬し販賣する商人で、その大なるものは數十の舟車を連れ、多數の僮僕を役して南北を廻つた。客商は頗る古くから存したので、客商といふ語も韓非子など先秦の典籍に見えて居り、爾來繼續して近時に及んだ。客商に對して、都市に常住する商人は坐賈若しくは鋪買と呼ばれた。此外、牙行といふものがあつた。これも頗る古いもので、漢代では駟又は駟僧と呼ばれ、後ち牙僧・牙人・牙郎・牙行などと稱せられ、近代では主として牙行又は經紀人と呼ばれた。牙行は重要な商業の業種ごとに専門的に設けられ、賣買を仲介し、貨物の價格を評定することを主たる任務とし、取引高に應じて手数料を收めた。都會では、或は定期市に於いて、或は定期市以外に於いて、客商と鋪買（時としては消費者）との取引を仲介し、田舎では主として定期市に於いて客商と村民との賣買を取つた。倉庫も早くから設けられたが、それは主として客商の貨物を預かるためであつた。倉庫は唐より以前には邸又は店と云はれ、主として市の周圍に設けられ、市制崩壊の後は、便宜の處に設けられた。宋代には邸店の外、塌坊・堆垛場などと呼ばれ、明代でも塌坊の語が盛に用ひられたが、清代になると行店・行棧・棧房・堆棧などと呼ば

れた。倉庫は單獨に營業され、若しくは旅館に依つて兼營されたが、そのあるじは、唐宋では居停主人又は單に主人と呼ばれ、客商の荷物を預かるのみならず、荷主の委託を受けて自己名義に依つて賣却し、時としては反對に貨物を買入れ、日本でいふところの問屋の事をも行つた。この頃、委託賣買は、牙行も扱はなかつたのではないが、主として居停主人に依つて行はれたやうである。降つて清代になると、多くの場合、牙行が倉庫を兼營し、従つて行店・行棧などいふ言葉も成立ち、同時に牙行が、一般に、仲介の外、委託賣買をも掌るやうになつた。

專賣官業と商業との交渉について一言して置かう。專賣制度の創始者は漢の武帝である。武帝の時、鹽・鐵及び酒を官の專賣に歸し、昭帝の時、一旦それを罷めたけれども元帝に至つて復た鹽鐵の專賣を行ひ、後漢末に及んだ。三國以後久しく廢れたが、唐の肅宗の乾元元年(768)AD.鹽の專賣を復興し、爾來宋元明に互つて、細目的には種々の變革もあつたけれども、專賣の一事は變ることなく繼續した。その大略を云へば、各地の鹽製造人から鹽を一應悉く官に買上げ、然る後或はこれを商人に拂下げ、或は州縣官に交付して直接に人民に賣渡さしめたので、宋代では前の場合を通商法と云ひ、後の場合を官鬻法と云つた。初には主として官鬻法が行はれたが、後通商法が次第に盛になつた。さうして明末になると、鹽を官に買上げることが廢れ、

製造人から鹽を商人に直接に賣渡さしめて官は嚴重にこれを監督し課税するといふ制度が廣く行はれ、舊い鹽法は若干の地方に餘喘を保つに過ぎないやうに爲り、清朝でも同様であつた。清朝末期には、鹽法は官督商銷・官運商銷・官運官銷の三種に分たれた。官督商銷とは官の監督の下で商人が鹽を運搬し販賣すること、官運商銷とは製鹽場から適當の地點まで官に於いて運搬し、然る後商人に拂下げること、官運官銷とは運搬販賣ともに官に於いて行ふことであつて、後の二種に於いては、鹽は一應官に取上げられ、專賣の舊面目を保存するのであるが、實際にはこの二種の制度の行はれた場合は極めて少く、官督商銷即ち官の監督の下に鹽を製造人より商人に賣渡さしめる制度が一般に行はれたのである。されば明末より清朝へかけて、大體に於いて鹽專賣制度は廢滅し、唯だ嚴密なる統制が行はれたと云つてよい。專賣制が廢れると共に商人の鹽販賣の權利は固定して永久的と爲り、子孫に世襲せしめることも出來、他人に賣渡すことも出來るやうになり、これに關聯して種々の弊害が起つたので、道光以後數次の改革を經、その權利が抹殺され、何人でも出願して税を納むればその販賣を聽されるやうになつた。次に酒の專賣も、唐の德宗の建中年間に復興され、文宗の太和中廢止されたが、宋が興るに及んで、周到な法規を設けて復たこれを行ひ、元もこれを承繼し、さうして明に至つて罷め

た。茶の専賣は、宋朝の初に創始されたが、仁宗に至つて罷められ、四川に於いてのみ行はれた。四川の専賣は元代まで續き、明以後は罷められた。鹽鐵酒茶の専賣は收入増加の爲めに行はれたもので、人民は爲めに高價の支拂を餘儀なくされたが、しかしこれは、大體、國家生活に伴ふ已むを得ない犠牲であつたとしてよからう。

終に近代に於ける富商の出身地方に觸れて置かう。明代に於いては、北では山西、南では新安（今の安徽省歙縣）がそれとして著れ、山西の大賈は、或は鹽、或は生絲、或は粟を嘗にすることに依つて富を爲し、新安の巨商は魚鹽の利を擅にしたと云はれた。清代でも山西と浙江・廣東等の商人が豪富を以つて鳴つた。山西人は絲鹽等の外、票號を以つて大に成功した。廣東人は香藥其他舶來貨物を需いで巨利を博し、浙江人は、舶來貨物を扱ふ外、錢莊業に依つて大資本を積んだ。揚州の鹽商も著名であつたが、その大部分は新安人であつたやうである。

1 八唐の康駢の「劇談錄」卷上、「王鉅活崔公歌妓」に肉行のことが見えて居る。「乾陜子」は溫庭筠の著で、その鐵行に關する記事が「太平廣記」卷二六一に引かれて居る。

2 「乾陜郡州志」卷二、建置。

3 宋の王楙「燕翼詒謀錄」卷二、相國寺。

4 萊市が唐に存したことは、李復言「續玄怪錄」定婚店の條に此の語が見えることに依つて知られる。

第八章 交通

支那本部の交通線を假に揚子江以北以南に二分して觀るに、以北に於ける最も主な交通線は少くとも七つ八つある。第一は北京地方から南して山東西部を經、江蘇西部に入り、揚州地方に至るものである。第二は河北より山東を經、安徽を縦貫して江西の九江地方に出でるもの。第三は河北より河南省中部を經て、湖北に入り、武昌若しくは荊州に至るもの。第四は北京地方より山西に入り、同省を斜に貫いて陝西に入り、渭水の上流寶雞縣地方から左折して漢中を經、四川に入つて成都に達するもの。以上四線は南北に走るものであるが、此等の線を連絡して東西に走るものも勿論數多くあるので、其の最も主なるものは、安徽の北部から河南開封に出でて第二線と第三線とを繋ぎ、開封から西の方洛陽を經て、陝西西安に出で第三線と第四線とを繋ぐもの（之を第五線とす）、荊州から四川成都に入り、第三線と第四線とを繋ぐもの（之を第六線とす）などある。陝西西部渭水の上流から甘肅に入り、蘭州・涼州を經て燉煌地方に赴く線、北京から東の方山海關を經て滿洲・朝鮮に赴く線も、外國交通の要路として閉却すべ

からざるものである。更に揚子江以南を觀るに、重要な線が十許りある。第一は鎮江から蘇州を経て浙江杭州に入り、進んで福建に至るもので、此れは揚子江以北の第一線と連絡するものである。第二は九江から南に直下して廣東韶州に出て、廣州に至るもので、江北第二線に接続する。第三は湖南北部（即ち岳州・長沙地方）から南して廣東韶州若しくは廣西桂林に出でるもので、江北第三線に接続する。尙ほ湖南西部から貴州・雲南に入るもの（第四線）及び四川南部から貴州若しくは雲南に入るもの（第五線）もある。主なる横斷線は廣州から西の方廣西の桂林其他に達するもの（第六線）、江蘇江寧地方から安徽南部・江西北部を経て湖南に入るもの、浙江西南部から江西に入るものなどである。尙ほ揚子江は江北江南の諸交通路を結附け、且つ中部支那を横に連絡する大交通路として最も注意しなければならぬ。以上の交通線は、今日現に存在して使用せられつつあるので、清朝時代には江北第一線及び江南第一線に沿うた道路は福州官路と呼ばれ、江北江南の第三線の其れは桂林官路と呼ばれ、江北第四線及び江南第五線に沿うた道路は四川官路と呼ばれた。しかし諸線に依る交通は清朝時代のみならず、遠く秦漢時代から存したのであつて、支那交通の幹線は——勿論その細部には幾多の變化があつたけれども、——秦漢以來大體一定して居たといつてよ。

上述の交通線には古くから道路が設けられたが、其の或るものに於いては河川湖水を利用し、又は運河を開鑿して行旅運搬の便を圖つた。先づ運河について述べる。支那の運河として最も重要なものは、隋・唐・宋三代に於いては、通濟渠・永濟渠及び江南河であり、元・明・清に於いては、通惠河・會通河・江南河であつた。通濟渠・永濟渠及び江南河は隋の煬帝が開いたものである。通濟渠は今の河南省河陰縣の板渚より黄河の水を受け、東して開封縣を貫き、稍南に向ひ、商丘縣（舊歸德府）を經、安徽省の宿縣・泗縣を通過して、今の洪澤湖の西南部、當時の泗州に於いて淮河に入り、淮河を東に下つて淮陰縣に至り、是れより南して儀徵縣（當時の揚州揚子縣）に達し、長江に注いだ。此の中、河陰・泗州間の水路は汴河を改修したものである。汴河は、初、開封の東南雍丘縣より東に曲り、江蘇省の銅山縣（舊徐州府）に至つて山東より南下した泗水に入り、泗水は更に東南に流れて淮水に入つたので、後世これを古汴河と呼んだ。古汴河も自然の河流其儘ではなく多少人工を加へたものであつたが、煬帝の時には荒廢してゐる上に、水量其他の點に於いて、根本的な缺陷があつたらしく、煬帝は汴河河道を稍西に移し、睢水・渙水等の水を吸収して直に淮に注がしめた。淮陰・江都間には、春秋の時、吳王夫差に依つて刊溝といふ運河が鑿たれ、隋代までも猶ほ存続したので、煬帝は新

に之を修築した。要するに河陰より江都まで、黄河と揚子江とを結附ける水路は古くから存したのであるが、煬帝は汴河の河道を改め、且つ全線に亘つて大修繕を施し、舟行を滑かならしめたのである。

永濟渠は、沁水・衛河・白河等を連結したもので、黄河の本流より今の河南省北部なる武陟縣に於いて沁水に入り、いで衛河に入り、東北流して山東省臨清を過ぎて天津に至り、白河に依つて北京の南に達した。武陟縣は河陰縣の對岸で、汴河を出でて河北に赴かんとする船は、直に黄河を横ぎつて沁水運河に入ることが出来たのである。江南河は今の江蘇省鎮江より起り、常州・蘇州を経て浙江省に入り、杭州に至るもので、鎮江に於いて揚子江を隔てて通濟渠に接したのである。此の地方には昔から小河流が多かつたので、之を連結整理して一つの運河としたものが、即ち江南河であつたのである。右通濟渠以下の三運河は、煬帝の大業中、僅僅數年間に、沿道の民數百萬人を人夫として造らしめたもので、其の爲め人民は非常な困苦を嘗め、不平骨髓に徹し、所在反亂を起し、遂に隋の滅亡を見るに至つたのであるが、しかし支那の交通はこれが爲めに一大進展を遂げた。煬帝は運河の沿岸數十所に離宮を設け、運河に船を浮べて南北に遊幸したが、唐以後に於いては首として官有貨物の輸送と官吏の旅行とに用ひ

られた。しかし一般民船の爲めにも開放せられたから、旅客の往來は固より、民間各種の貨物も亦た此等の運河に依つて運搬された。即ち公私の交通運輸に利用されたのである。中にも通濟渠は、初に説明した江北第一線に屬するものであるが、北部支那から南のかた揚子江沿岸以南に赴くものは、陝西から四川に往くを除いて、殆ど皆な此の運河を利用し、江北第二・第三等に依らないのが通常であつた。江南から黄河沿岸以北に赴くものも、四川より陝西に出づるものを除いて、殆ど皆なこれを利用した。即ち江南第一線は固より、第二線・第三線に依つて長江沿岸に來つたものは、總べて儀徴より此の運河に入つて北上したのである。されば唐宋二代に於いて支那の社會が通濟渠の恩恵を受けたことは實に莫大であつて、宋の朝廷も、これあればこそ、開封に都し、南方の物資を運び寄せて數十萬の兵士と人民とを養ふことが出来たのである。通濟渠について便益の多かつたのは江南河である。江蘇・浙江・福建は穀物・織物・茶等色々の物産に富んで居たが、此の地方の産業が大に發達し、其の物資が北部支那・中部支那の各地方に配給されたのは、此の運河に須つことが多く、南宋が杭州を都とすることを得たのも、宋元時代、浙江・福建の海港が大に發展したのも、亦た此の運河の賜に外ならぬ。

隋の三運河の中、江南河は其後隨時修繕を加へられながら、清朝末期海運の起るまで、大體

其儘に盛に使用された。通濟渠は唐宋二代は盛に使用されたが、金が北支那を占領するに及んで手入を怠つた爲め、次第に淤塞して用を爲さざるに至つた。而して金の章宗の明昌五年（南宋光宗紹熙五年1194A.D.）黄河が洪水の爲め河道を改め、今の河南省修武縣より東南に流れ、汴河の故道より泗水・淮水に合して海に入ることとなつたので、元の世祖が支那を征服するや、隋以來の運河系統に大變改を施し、泗水に依つて徐州より臨清に至る運河を鑿ち、これを會通河と呼び、北は舊永濟渠に接続し、南は黄河に接続せしめた。同時に北の方今の河北省昌平縣なる神山の水を引いて大都（北京）より通州に出で、白河を経て天津に至る水路を作成し、これを通惠河と名づけた。是に於いて刊溝より黄河に入り、黄河より會通河に入り、舊永濟渠及び通惠河を経て大都に至る大運河が出現した。但し此の大運河にも故障が多かつたので、元は別に海運を興し、河海兩運を併用しつつも、主として海運に依つたのであるが、明の永樂帝の時、大に會通河を濬治し、爾來河漕も頗る便利と爲り、明一代は勿論、清の道光中に至るまで、専ら此の運河を利用した。元以後も、運河を官に於いて使用する外、民間に對して開放することは、宋以前と同様であつた。

右の運河以外に於いて、交通上重要な地位を占めた自然河及び運河は、揚子江を第一とし、

黄河・渭水・渭水運河・洞庭湖・湘水・靈渠・西江・贛江・漢水・錢塘江などであつた（衛河・泗水・淮河等は前に述べたれば略す）。黄河のうち、東南地方と長安地方との交通の咽喉に當つて居るのは、河陰縣から渭水の吐口に至る部分である。しかし此處には名にし負ふ三門山（一に砥柱といふ、今の山西省平陸縣の東南、黄河の中に在り）の險もあり、舟行が容易でないので、旅客は通過せず、主として官物輸送の爲めに用ひられた。三門山は、その中に水路が三つあり（神門・鬼門・人門）、山の名も其れから起つたのであるが、動もすれば舟筏を覆すので、古來漕運の當局は痛く困しめられ、唐の玄宗の開元中（713-741A.D.）には黄河北岸の山を開いて路を通じ、三門の東に於いて貨物を車に積み換へて其の西に運び、復た舟に積込んだこともあつた。渭水は沙を流し、淺瀬が多いので、漢の武帝の時、既に南山に沿うて運河を設けたと傳へられるが、其の後隋の文帝の開皇四年（584A.D.）渭水・瀨水・涇水等の水を引いて渭水の南に運河を造り、東の方華陰縣に至つて黄河に流入せしめ、之を廣通渠と呼び、唐の天寶中更にこれを修治して廣運潭と名づけた。要するに隋唐二代は、黄河と渭水若しくは渭水運河に依つて通濟渠と連絡し、東南の物資を首府長安に輸送したのであつた。洞庭湖及び湘水・桂江（西江の支流）は私のいはゆる江南第三線に當り、西江は同第六線に當り、此の二線は自然の

水路に依つて殆ど貫かれ、舟筏を通じ得るのであるが、唯だ湘水の上流に於いて航行不能の處があつたので、秦の始皇帝の時、監御史祿、始めて運河を開いて湘水と桂江の上流灘水とを連絡し、ついで後漢の馬援も交趾征伐の際これを修治した。その後幾たびか修繕せられて現に猶ほ使用されて居る。この運河は今の廣西省興安縣の北方に位し、唐の頃から靈渠と呼ばれて居る。靈渠に依れば、廣州から舟に乗つて直に揚子江に出づべく、尙ほ東して通濟渠に入れば、長安にも北京にも達することが出来た。舟は途中で幾たびか乗り換へなければならなかつたに相違ないが、ともかくも水に浮んで一路南北を窮めることが出来たから、古來旅客も貨物も此の線路を擇ぶものがかなり多かつたやうである。

支那では河川運河のそれに引換へ、海上の交通は容易に發達しなかつた。吳王夫差が海路齊を攻め、漢の武帝が嚴助をして海に浮んで東甌を救はしめたことに依れば、海に依る交通も古くから行はれたのであるが、それがかなり發達したのは唐宋特に宋の頃であつたやうである。支那の近海は地理上自ら二つに分れて居る。揚子江口以北と以南とである。江口以南は島嶼は多いが、水深くして航行に適する。以北は沙洲が多く、水淺くして動もすれば舟の擱坐を見る。この外、種々の關係が加はつて、江口以南の海上の航行は比較的早く發達し、以北は發達

か後れた。宋以前は勿論、宋代に於いても南方の船は、江口以北では密州板橋鎮（今の山東省舊膠州）まで往つて南北の貨物を交易したので、登州方面に赴くものは極めて稀であつた。元代には海運を用ひ、糧船は成山角を廻つて渤海に入つたが、明になると、海運が罷められた爲め、此の航路も廢れ、商船は大抵膠州で止まつた。南方の商船が江蘇山東沿岸の沙磧の間を巧に乗りまはし、且つ登州の沖を過ぎて天津や奉天にかなり頻繁に赴くやうになつたのは、清代のことであつた。此の海上交通線を加算すると、支那本部の交通線は、江北江南とも、更に一つづつ増すことになるのである。

河川運河に用ひられた船は、地方に依つてそれぞれ特殊の發達を遂げたやうである。吳自牧の「夢梁錄」⁽¹⁾には、臨安（今の浙江省杭州）から蘇州常州等並に江淮方面に赴くものは銅船・舫船・航船・飛篷船等を雇ふべきことを述べて居るが、各船の間にどんな差異があつたかは明でない。尙ほ此の書には、浙西諸州縣から臨安へ上供米斛を運ぶところの網船は、千餘石或は六七百石を載せたこと、民間米商の船隻も多くは鐵頭の舟で、五六百石を載せたことを記して居る。明末崇禎中に著された「天工開物」⁽²⁾には、三吳には浪艇、東浙には西安艇、福建には清流艇・稍篷艇、四川には八槽艇等、廣東には黑樓艇・鹽艇、黄河から淮河へかけては滿篷稍・

秦缸、揚子江から漢水へかけては課缸等があつて、官私の用に應じ、滿篷稍の大なるものは三千石、小なるものも五百石を載せたこと、南方の漕米を運ぶ漕舫（糧缸ともいふ）は初制は底の長さ五丈二尺で、米二千石を積んだが、後には長さ二丈を増して積載量三千石に達したことを掲げて居る。海に浮べられる船は、上に述べた南北情形の相違に因つて自ら二種類となり、江口以北を航するものは吃水浅く、以南を行くものは吃水が深かつた。これは非常に古くからの事であつたらうが、「建炎以來繫年要錄」の紹興三年五月丙辰の記事などにも現れ、それには海門（今の江蘇省海門縣）地方の底浅き舟を湖缸と云ひ、明州（浙江省勤縣）方面の舟を南船と云つて居る。清代では、揚子江口以北を航する崇明・海門・上海等の船は沙船と呼ばれ、以南を航する閩浙粵東の船は鳥船と呼ばれた。沙船は吃水四五尺で、沙洲多き海面の航行に適し、米千五百石より三千石を載せ、關東との通商に最も活躍し、道光中にはその總數三千五百隻に及んだと云はれる。但し鳥船も沙洲を避け、沖合を航して北方に赴いたので、北方への航海通商が沙船に獨占されたわけではなかつた。

以上は支那内地の主なる交通線、その一部を爲す主なる水路、近海交通、船舶等についての簡単な説明である。この外、道路・橋梁・車輛・關堰・港灣・驛傳・漕運制度、並に陸路海路

に依る外國交通、清朝末期に於ける汽船汽車の採用など、述ぶべきことが頗る多いのであるが、ここには省略し、唯だ咸豐の頃から英吉利其他の汽船にして長江及び近海に定期航海業を營むものが現れたので、これに對抗する爲めに招商局其他の汽船會社が起り、汽船による交通業を營んだこと、光緒の初、開平炭礦採掘の爲め、李鴻章に依つて唐山・胥各莊間に鐵道が敷設せられ（光緒七年〔1881A.D.〕竣工、後の京奉線の一部）、始めて汽車に依る運輸が行はれ、ついで光緒の末、京漢鐵路（光緒三十一年〔1905A.D.〕竣工）・津浦鐵路（宣統四年〔1912〕A.D.竣工）其他數々の鐵道が敷設せられ、支那の交通史上に新時期を開いたことを一言して置く。

1 「夢梁錄」卷一二、河舟。

2 「天工開物」卷中、舟車。

3 「建炎以來繫年要錄」卷六五。

第九章 外國貿易

外國貿易は大別して陸路貿易と海上貿易との二つとすることが出来る。陸路貿易は滿洲・蒙古・西域・四川・雲南等の方面で行はれ、海上貿易は初は廣東方面で、ついで浙江福建等でも行はれたのであつて、各方面の貿易には時代によつて消長盛衰があつた。次にあらまし其れを述べて見よう。

滿蒙方面の諸民族と支那人との間には、古くから一種の經濟關係が成立つて居たやうである。秦漢の際には塞外一帯の地は匈奴に依つて統一され、匈奴は屢支那の農業地帯に入寇して掠奪を恣にしたが、支那の備が固ければ和を講じ、邊塞の下に來つて支那の商人や官吏と貿易した。漢代の文獻にはこれを關市と云つて居る。支那からの主なる輸出品は穀物・酒並に各種の絹織物で、輸入品は馬・羊・毛皮の類であつた。支那と西域との交通も随分古くから存したやうであるが、しかしそれは極めて微々たるもので、稍發達したのは、漢の武帝の時、張騫が命を奉じて大月氏に使用して還つてからのことで、これより後、漢の政治的勢力が今のシナトル

キスタン、ロシヤトルキスタン、波斯等の地方の諸國に波及し、その入貢を見ると同時に通商も行はれ、中央アジア若しくは波斯の隊商は甘肅西部に來つて支那商人と貿易し、波斯の眞珠、羅馬の織物等は支那の市場に現れることとなつた。かかる状態は、その後、或は榮え或は衰へたが、ともかくも繼續して隋唐の時に及んだ。

廣東方面と印度支那との間には上古より交通があつたが、秦が嶺南に三郡を置き、漢がその後を承けて經營を進めるに及んで、それが益發達し、廣東から印度支那近海を経て、マレー半島を廻り、マラッカ海峡を過ぎて印度のカンチプラに至る航路が開かれ、印度人・埃及人等が廣東に來航し、支那人も印度南端まで往くやうになつた。ついで西曆一世紀の中頃、即ち後漢の初期、埃及人に依つて恒信風が発見され、利用されて後は、印度の航海、延いては支那と波斯埃及方面との交通が年一年と發達し、後漢桓帝の延熹九年(166A.D.)には東羅馬皇帝マルクス・アウレリアス・アントニウスの使節が海路交趾に來り、それより陸行して長安に入り、象牙犀角瑇瑁を獻じたことさへあつた。當時海上貿易に於ける輸出品の主なるものは、やはり絹織物であつた。輸入品は印度及び印度支那方面の眞珠、寶石(例へば南印度の特産物たるペリル〔支那で璧流離といふ〕の如し)、象牙・犀角・木棉布並に希臘羅馬の織物工藝品等であつた。か

くして南方海上に於ける交通及び貿易は、大體發展の一路をたどつて、南北朝を経て隋唐に至つたのである。

唐代になると、支那を中心とした大帝國が建設された爲め、交通と貿易とは一大進展を遂げた。恰もこの時、アラビヤに回教の大國即ち支那でいふ大食國が起り、その國人が大に海上に活動したことも頗る此の勢を助けた。アラビヤ人の支那への通商は唐の初期から始まつたが、その末期、西曆八世紀の末、アバス王朝が都をバグダッドに遷して後、特に旺になり宋代に入つて益旺盛と爲り、元に至つて殆ど絶頂に達した。貿易港としては、唐代では廣州(今の廣東、即ち南海縣)、明州(浙江省寧波即ち鄞縣)、揚州(今の江蘇省揚州、即ち江都縣)等が著れ、就中廣州には貿易事務を掌る市舶司が置かれ、宋代では、此等の外、杭州(今の杭州、即ち杭縣)、泉州(福建省泉州、即ち晉江縣)、秀州青龍浦(江蘇省青浦縣)、密州板橋鎮(山東省膠縣)等が著れ、そのいづれにも嘗つて市舶司若しくは市舶務が置かれた。此等の諸港にはアラビヤ人・印度人・南洋諸國人等が多數渡來し、爲めに居留地が設けられて蕃坊と呼ばれた。居留外人の數は、一箇所で、多きは數萬より十數萬にも上つたらしく、唐宋、廣州で黃巢の亂に遭うて殺された蕃人は十二萬と傳へられて居る。さうして彼れ來ると共に我れも亦た往

き、支那の商舶はジャワ・スマトラ・セイロンを経て波斯灣に達し、その船體は巨大堅牢であつて、乗組員の數六七百人乃至一千人に及ぶものもあり、帆の外簡単な推進機を用ひるものさへ生じた。これより先南北朝時代までは、南海の通航を掌つたものは主として印度人であつて、支那商人もその船舶に便乗したのであるが、唐宋の際には、支那印度間の航海は支那人に依つて壟斷され、波斯灣の航行に便利な小型の商船しか持たなかつたアラビヤ商人は、印度のキロンで支那船に乗換へて東方へ來つたのであつた。支那へ輸入されたものは、象犀・眞珠・蕃布（木棉）等の外、降眞・沈香・檀香等の香料、荳蔻・畢澄茄其他の藥材で、香料藥材は唐宋に至つて特に盛に支那に流入したのである。支那からは、絹織物の外、錢並に陶器が輸出された。陶器の輸出は、支那の窯業がこの時代に於いて目ざましい發達を遂げた結果であつた。錢の貿易は嚴禁されたのであるが、禁を犯して輸出されるものが夥しく、爲めに國內に於ける錢荒を誘致したのであつた。以上は唐宋時代海上貿易のあらましであるが、陸路のそれも唐代に至つて益發展した。この方面では康國（サマルカンド）商人の活動が目だつて居た。彼等は從來専ら用ひられた天山南路の交通路に依らず、天山北路よりして盛に支那に通商し、中亞イラン系諸民族の支那通商の最盛期を出現した。但し唐の半過ぎ、唐朝の西域に對する支配力が

弛み衰へると共に、此の方面の通商も亦た衰微し、その情勢はひき續いて宋の終の頃までに及んだ。宋代に於いては北方の狩獵遊牧民族が發達してかなり見るべき國家を形成した。契丹・西夏・金等がそれである。此等の國々と宋との間には貿易が盛に行はれた。宋はそれが爲めに榷場と名づける貿易場を設け、嚴密なる統制の下に官私の貿易を行つた。北方から支那への輸入品は馬を主とし、其他、毛皮・眞珠・人蔘等で、支那からの輸出品は絹織物・茶・錢・陶磁器等で、中にも茶と錢とが著しかつた。茶が盛に輸出されたのは、飲茶の俗が北族の間に傳播し、同時に支那内地に於ける製茶業が急に隆昌と爲つたからであつた。錢は南海貿易に於けると同じく、禁を破つて密に輸出されたものである。

元代になるとアジヤの大部分から歐洲の一部までを包容する大帝國が築かれ、さうして元の朝廷はその龐大な領土各部分との連絡を圖る爲め完備した驛傳制度を樹立したので、唐の中期以來衰へて居た東西の陸路交通は再び活潑となり、サマルカンド其他のイラン系諸民族は盛に支那に來り、北京はいふまでもなく、南の方杭州あたりまで入りこんで貿易し、支那の商人や工匠でカラコルムや天山の方面まで出向くものもあつた。但し十三世紀の末近い頃、海都汗を中心とする反亂が中央アジヤに起り、容易に平定しなかつたので、陸路に依る支那と西域との

交通貿易はその打撃を受けて次第に衰替した。南方に於ける海上貿易は南宋の後を承けて更に隆盛と爲り、彼より來るものも益多く、例へば杭州住民の二十分の一は回教徒であつたと傳へられ、さうして我より往くのも愈多く、福建廣東地方からジャワ・スマトラ・リンガ等に移住するものさへ少くなかつたと云はれる。元代に於いては海陸の通商ともにその絶頂に達したともいふべく、さうして海路のそれは終始その盛況を維持したのであつた。

進んで明代に入ると形勢は復た一變した。中亞よりする東西の通商は殆ど杜絶した。これは中亞より印度に互る地域にムガル帝國が勃興し、明朝を敵視してアラビヤ人通商の道路を梗塞した爲めであつた。但し蒙古人滿洲人との貿易は繼續され、その機關として宣府・大同・遼東等に馬市が設けられた。東南の海港へはアラビヤ人南洋諸國人等が來航して貿易を續けたが、支那商人の海外渡航は洪武以來嚴禁された。これを海禁といふ。海禁は海賊並にいはいゆる倭寇の跳梁を防がんとするものであつたが、これが爲め、宋元以來の支那商舶の活動が一時殆ど停止せしめられた。しかし明の中頃以後になると、福建廣東地方の巨商であつて、官吏に賄して、フィリッピン其他南洋方面に密航して貿易を營むものが少からず現れた。この時、更に情勢の一大變化を促したものは歐人の東漸であつた。

歐洲に於いては、十五世紀の末、明の成化弘治の頃から冒險入海の風大に起り、葡萄牙人に依つて希望峰が発見され、印度航路が開拓され、伊太利人に依つてアメリカが発見され、その結果、一攫千金を夢みる冒險者流が續々として東洋に殺到した。その先鋒は葡萄牙人及び西班牙人であつた。彼等は南洋及び印度に猶ほ殘存しつつあつたアラビヤ商人の勢力を驅逐し、進んで支那に來つた。支那では葡萄牙人が先づ成功し、嘉靖三十六年(1557)澳門居住と通商とを許され、爾來約百年の間、支那貿易を殆ど獨占し、マニラに根據地を築いた西班牙人は僅にこの地に密航する支那商人と交易するに止まつた。ついで萬曆崇禎の際、即ち十七世紀の初期に和蘭人が來り、英吉利人が來り、その末期(清の康熙時代)にはフランス人・オーストリア人・プロシヤ人・デンマーク人・イタリヤ人等も來つて支那貿易に参加したのであるが、此等の中、和蘭が先づ勢力を占めて葡萄牙人を押しつけ、次には英吉利人が強力となつて和蘭人を蹴落し、十八世紀の末(乾隆末葉)には支那の海上貿易は殆ど英人の獨占に歸せんとする趣があつた。亞米利加は後れて、十八世紀の半過ぎ(乾隆の半過ぎ)から支那貿易に従事したが、次第に成功し、十九世紀(嘉慶以後)に入ると英國に對して一敵國の觀を做すに至つた。かやうに明の後半以來、歐人が東洋に進出し來つた結果、一時復興しつつあつた支那商人の南海通

商は其の壓迫を受けて衰へ、日本朝鮮との貿易に僅にその餘勢を留めるのみとなつた。清の初には鄭成功が沿海の地を侵し、ついで臺灣に據つて克復を圖り、清廷はこれに對して海禁を嚴にし、遷界を行ふ等の事があつたので、福建以北での貿易は殆ど杜絶し、唯だ葡萄牙・和蘭が澳門で通商を許され、其他の西洋諸國人は此の方面で密貿易を行ふに過ぎなかつた。然るに康熙二十二年鄭氏が滅びたので、翌二十三年(1684A.D.)海禁を開き、和蘭を首とし諸國人に對して稍寛大な條件の下にその通商を認め、廣東の澳門、福建の漳州、浙江の寧波、江蘇の雲臺山(東海縣即ち舊海州の東)を互市場とし、ついで廈門・定海でも互市を聽した。雍正二年(1724A.D.)には洋船の廣東省城即ち廣州に來泊貿易することを聽した。しかして乾隆二十二年(1757A.D.)には外國貿易は廣州一港に限ることとせられた。從來より廣州は外國貿易の中心であつたが、ここに至つて唯一の貿易港となつたのである。廣東の對歐米人貿易は行商若しくは洋商と呼ばれる一羣の特許商人に依つて行はれた。英人等はこれを Hong merchant と云つた。その數は時に依つて相違し、少きは四五人、多きは二十餘人に及んだが、通例十人前後であつた。行商等は明末以來「十三行」とも呼ばれたが、これは正しく十三人を意味するものでなく、多からず少からざる若干數を漠然と現すに過ぎないので、十三は言はば一種の接頭語であ

る。(明末の隨筆「涇林續記」⁽¹⁾に香山(澳門を指す)の三十六行が命を受けて關稅を徵收したことを載せ乾隆中に編纂された「澳門紀略」⁽²⁾には弗朗西人呂武勝が澳門十三行に往來すること二十餘年、華語漢文にも諳曉したことを載せて居るが、いはゆる三十六・十三も一種の接頭語であることは本文に照して明瞭である、廣州の十三行も同様と思はれる。)然るに後には、國初眞に十三人の行商を置いたやうに考へたらしく、道光中には行商の定員を十三としたのであつた。行は本來牙行であつたので、それは粵海關志⁽³⁾や澳門紀略⁽⁴⁾などにも明記されて居る(澳門の三十六行・十三行も同じである)。支那では、古來外國貿易に内地商業と均しく牙行を用ひたが、廣州でも同様であつたのである。但し牙行は商事の仲介を行ふだけで、自ら賣買を行ふものではないが、廣州の行商は自身貿易を行つた。願ふに初には仲介を事としたであらうが、情勢の推移はやがて彼等をして貿易の主體たるに至らしめたので、康熙の頃には既に左様であつた。行商は貿易營業の特權を許されると同時に、歐米商人の國法遵守と滯り無き納稅とを保證せしめられ、此の制度は久しきに亘つて繼續した。康熙の末、行商をして公行 Co-hong とよぶ組合を結成せしめ、聯帶責任に依つて貿易を營ましめることと定められ、一年許にして廢せられた。其後これに類似したことが幾たびか繰返されたが、組合の存否如何に拘はらず、行商の

特權は存続した。さうして道光二十二年〔1842年〕の南京條約に於いて始めて廢止せられ、支那の國民は何人も自由に歐米人と交易するを得ることとなつた。尙ほこれと共に、同條約に於いては、廣州に厦門・上海・福州・寧波を加へて、計五港を互市場として開放することを定めたのであるが、其後互市場は益増加し、清末には九十餘の多きに達した。

葡萄牙人・西班牙人・和蘭人等が支那へ輸入したものの、並に英吉利人が初に支那へ賣込んだものは、中世にアラビヤ人が支那へ輸入したものの外、少量の羅紗・時計等を加へるに過ぎなかつた。さうして彼等が支那から輸出したものは多量の茶・生絲（特に湖絲）及び陶磁器であつた。輸入品の價値は輸出品のそれより遙に小額であつたので、その不足額は主として西班牙銀貨を以つて支拂はれた。康熙の半過ぎ、英國の對支貿易が発達するや、絹の輸出は増加せず、陶器のそれは歐洲での生産が増加した爲め反つて減少したが、茶の輸出が激増した。英國は綿製品並に印度の綿花を以てこれに對抗しようとしたが、その目的は達せられず、結局銀に依つて債務を償却する外無かつた。銀は、歐人の支那貿易が始まつて以來年々二百萬弗も支那に流入したが、嘉慶年間（十九世紀の初）には増して四五百萬弗に及んだ。この形勢を一轉せしめたものは鴉片の輸入であつた。鴉片は、乾隆中、英國が印度を領有してから、東印度會

社に依つて盛に支那に輸入されたもので、その額は年を逐うて増加し、道光十年より特に甚しく、十五六年頃には廣州一港からの輸入額だけでも、一個年一千万兩に達し、多年の輸出超過は急に輸入超過と變り、國內經濟も爲めに混亂を來した。これが原因の一つと爲つて鴉片戰爭は起つたのである。

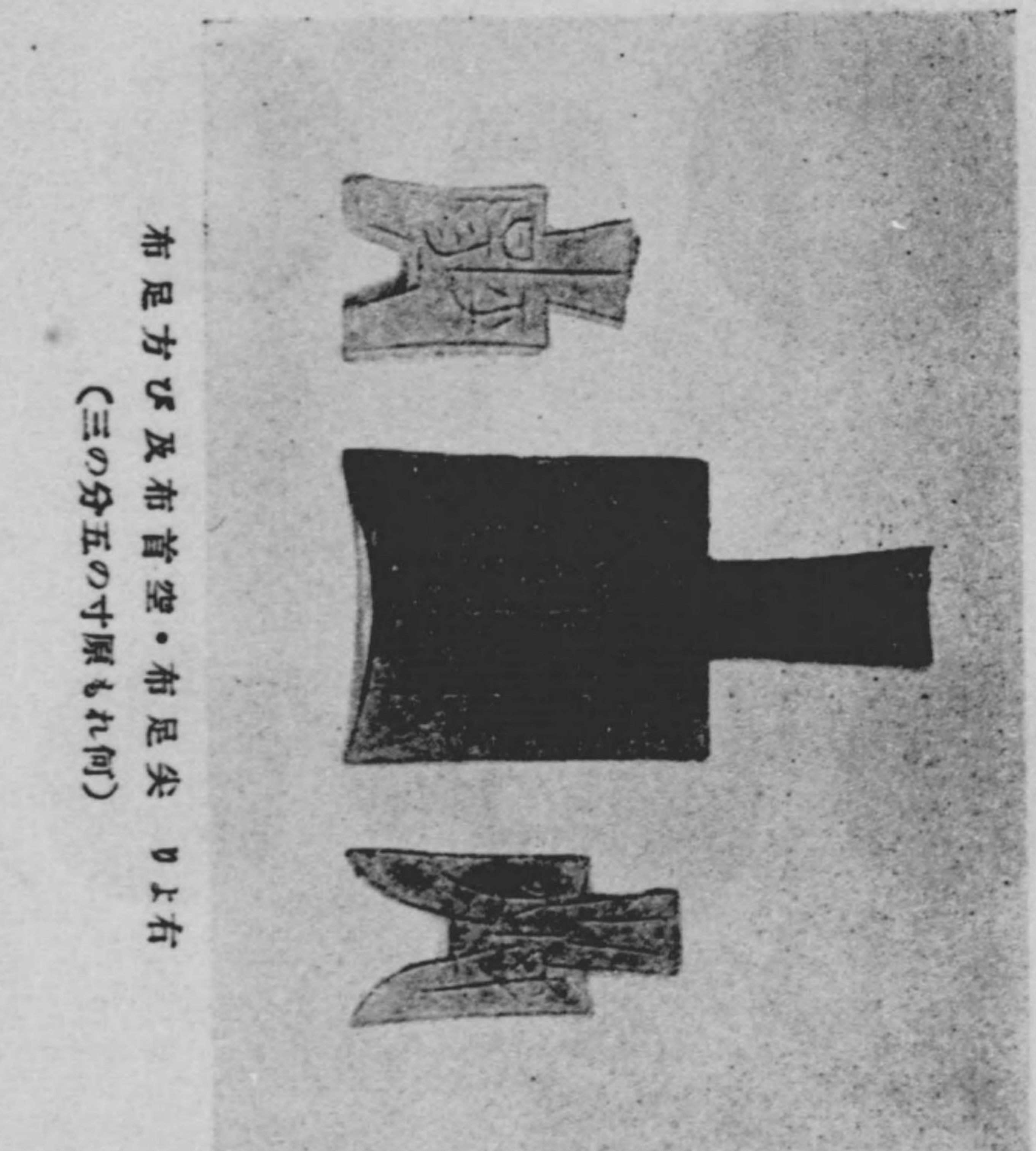
ここで清代の陸路貿易について一言して置かう。清朝が滿蒙を包む大帝國を建てた爲め、此の地方と支那本部との通商は國內商業と爲り、馬市も廢せられた。しかしやがて露西亞の勢力が東進し來り、清朝のそれと接觸し、葛藤を生じたが、康熙二十八年〔1689年〕ネルチンスタ條約が締結され、露國は使を北京に遣して朝貢し且つ貿易を行ふことと爲つた。ついで雍正六年〔1738年〕恰克圖條約が結ばれ、恰克圖・賣買城等に於いて互市を行ふことと爲つたが、その重要性が南海貿易に遠く劣つたこといふまでもない。この方面で支那へ輸入されたものは馬・牛・毛皮等、輸出されたのは絹・茶・煙草等であつた。

鴉片戰爭の結果として出で來つた南京條約には、歐米人の商業活動に有利な多くの條件が規定され、爾來外國貿易は益盛大に向つた。貿易の大勢は常に輸入超過であつた。鴉片は引續いて多量に輸入されたが、やがて支那内地に於いて罌粟の栽培、鴉片の製造が盛に行はれたの

と、銀價が下落して外國製品の價を高からしめたのについで、光緒中期以來その輸入は大に衰へた。しかし近代工業に依つて大量生産された低廉な綿製品が代つて多量に輸入され、米穀・綿花・砂糖・雜貨等も相當輸入された。輸出品の主なるものは生絲・茶・大豆及び豆粕・絹織物等であるが、絹織物は日本及び歐洲の機業が発達したのでその影響を受けて輸出額が減少し、生絲もその傾向を免れず、茶も同様であつた。かくて數十年に亘つて輸入超過が繼續し、移民の送金・持歸金並に外資の輸入に依つて辛うじてこれを補填したのであつた。民國となつてからは軍閥の抗爭と内政の荒廢に因つて愈産業を不振ならしめ、國民の購買力が低下し、輸出入ともに次第に減退に向ひ、しかも農業國たる支那に於いて當然生産さるべき米麥の類が多量に輸入されるなど、憂ふべき現象を見、かくして今回の事變に及んだのである。

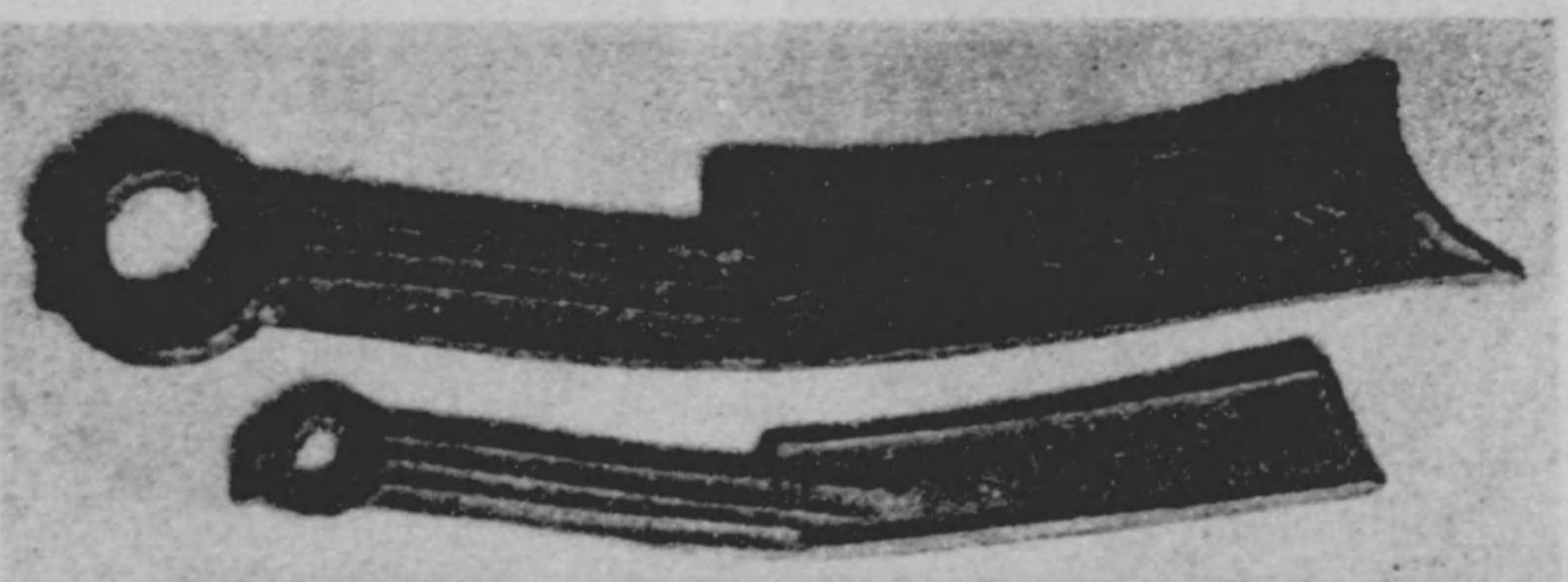
- 1 「經林續記」は萬曆十四年の進士周玄暉の著、滄芬樓秘笈第八集に收められて居る。
- 2 印光任・張汝霖「澳門紀略」下卷、澳蕃篇。
- 3 「粵海關志」卷二五。
- 4 「澳門紀略」上卷、官守篇。

第十圖

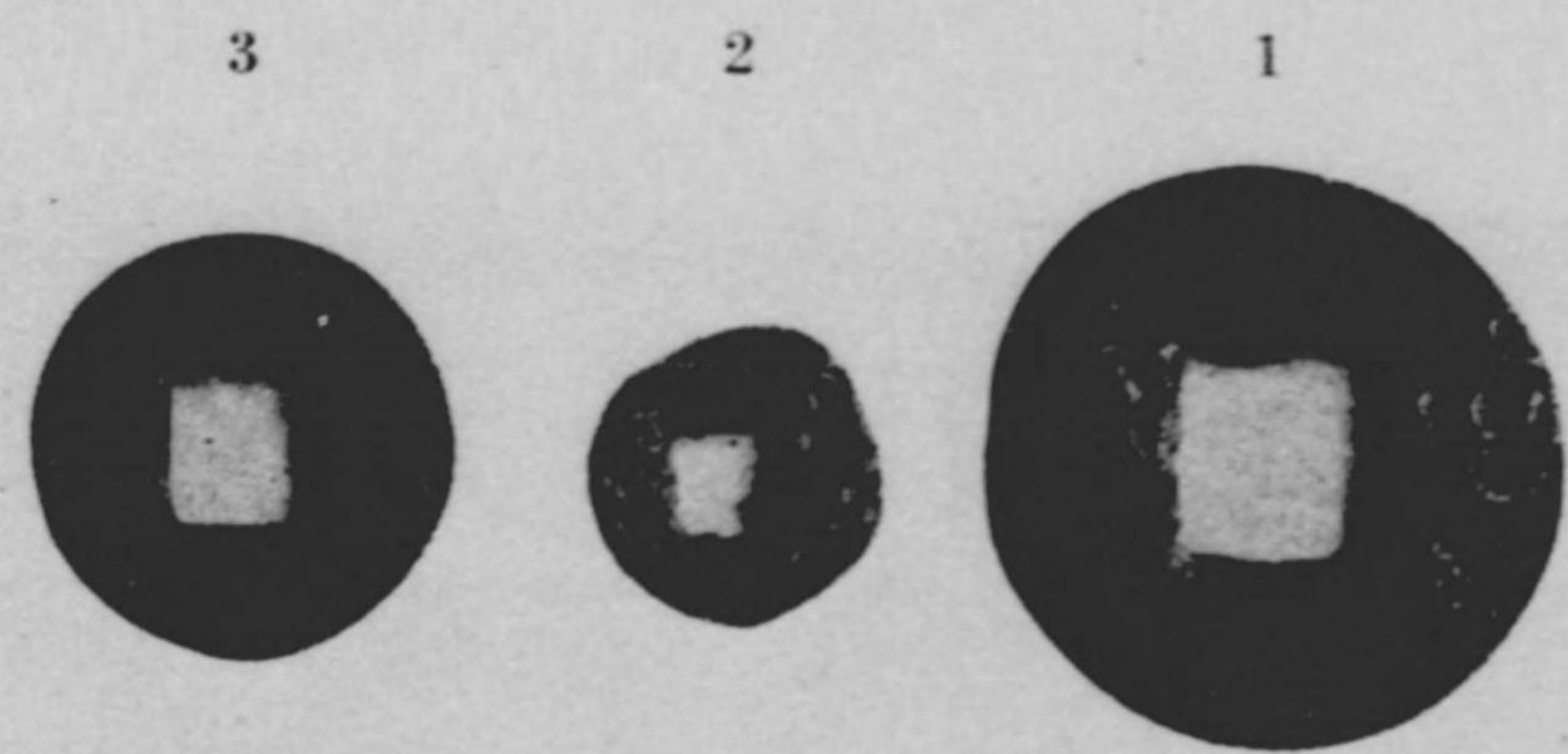


布足方び及布首空・布足尖 以上右
(三の分五の寸原もれ何)

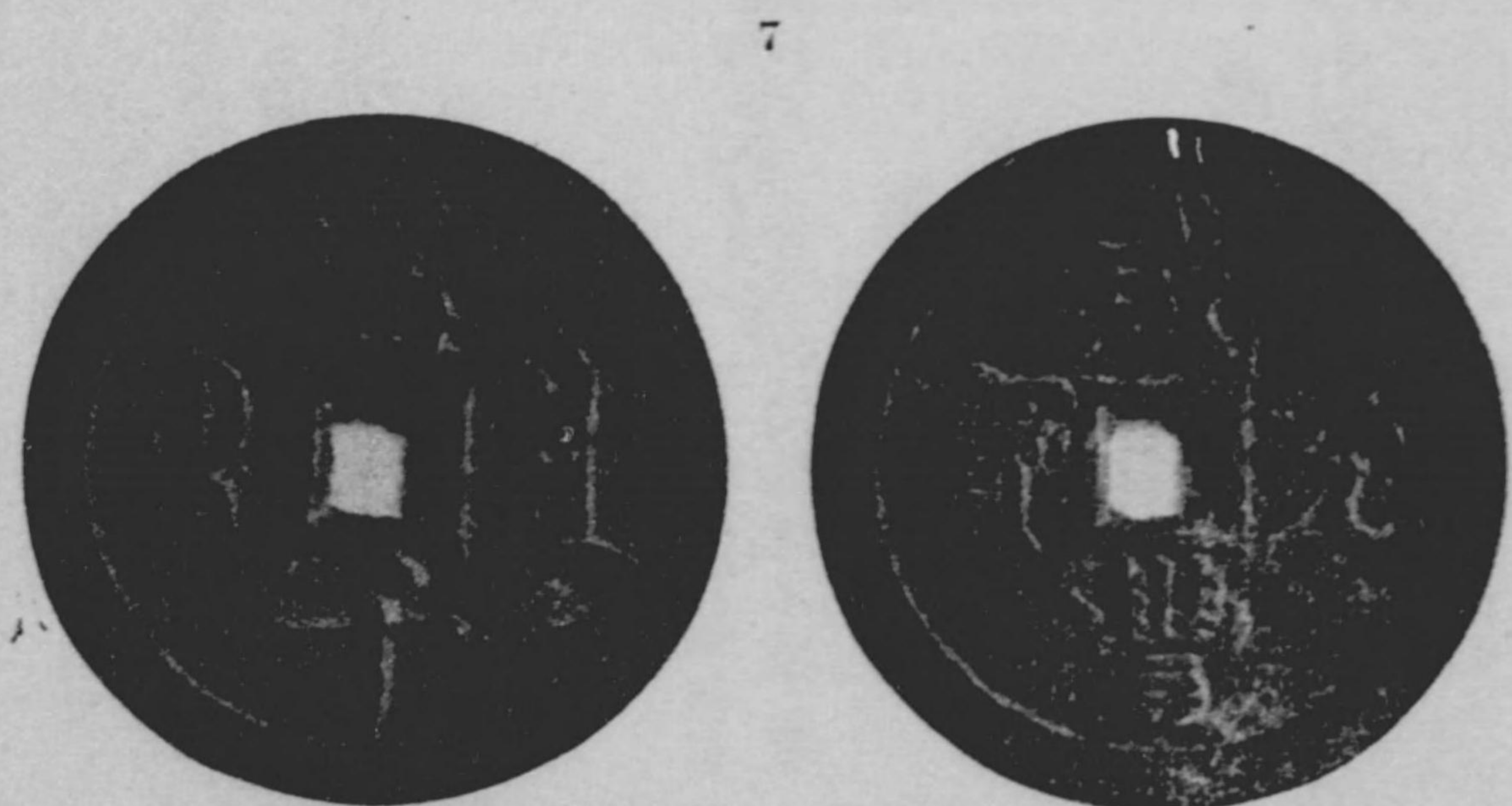
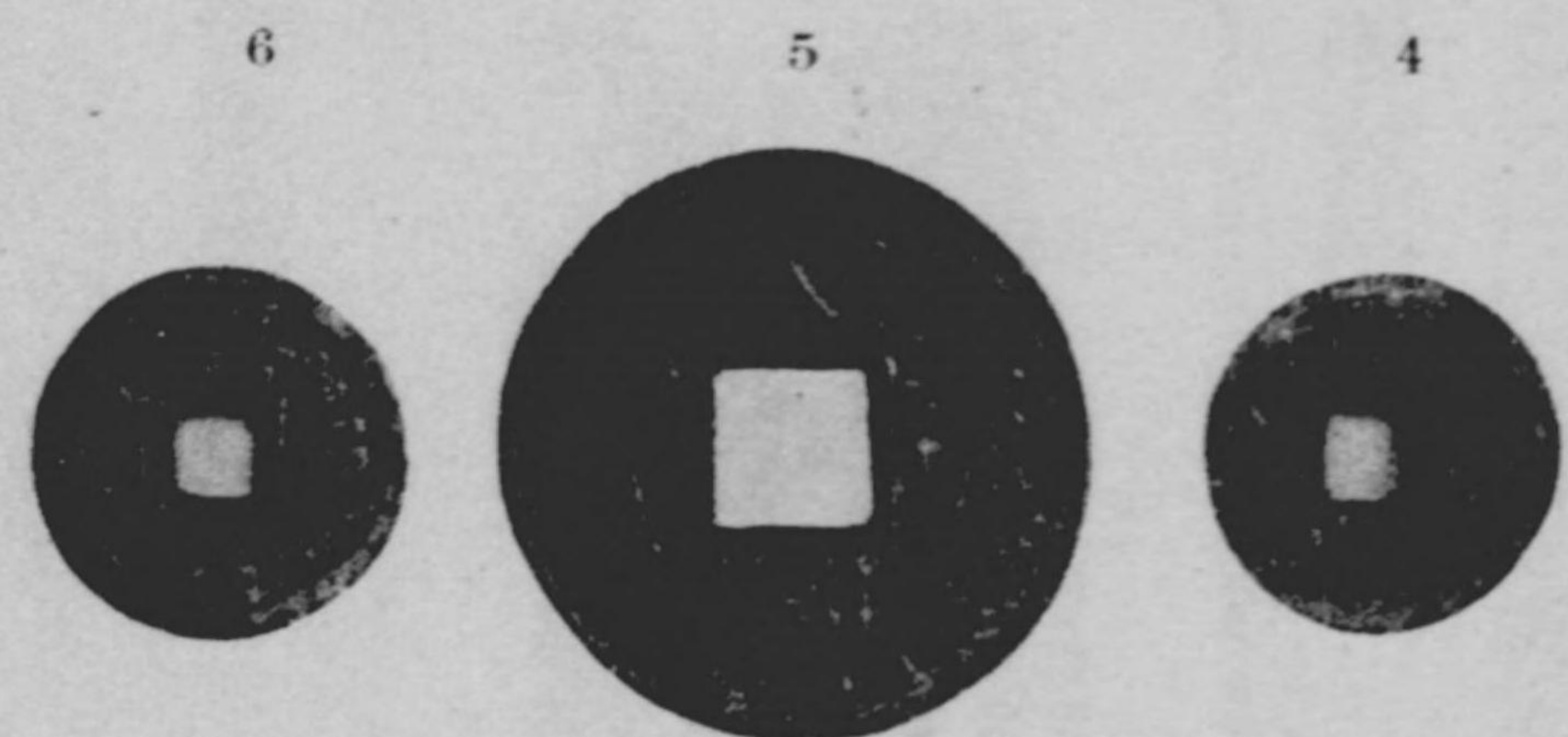
(藏前幣錢)



刀齊び及刀明 以上右



第十三圖

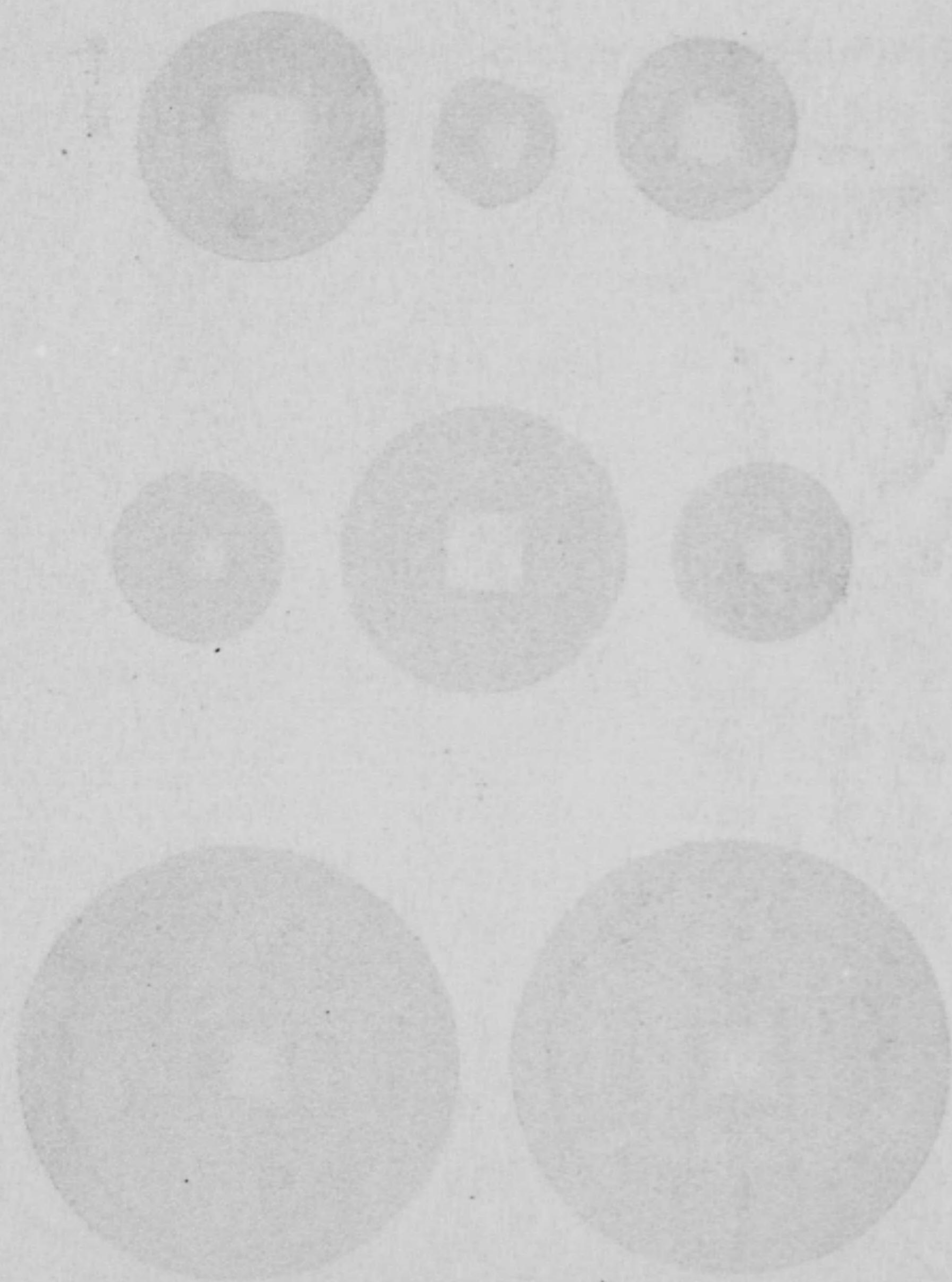


錢銖五の帝武 3 錢 英 榆 2 錢兩半秦 1
 寶通靖嘉 6 (十當)寶通觀大 5 寶通元開 4
 (四の分五の寸原もれ何) 背び及面(千當)寶元豐成 7
 (藏館幣錢)



第十四圖

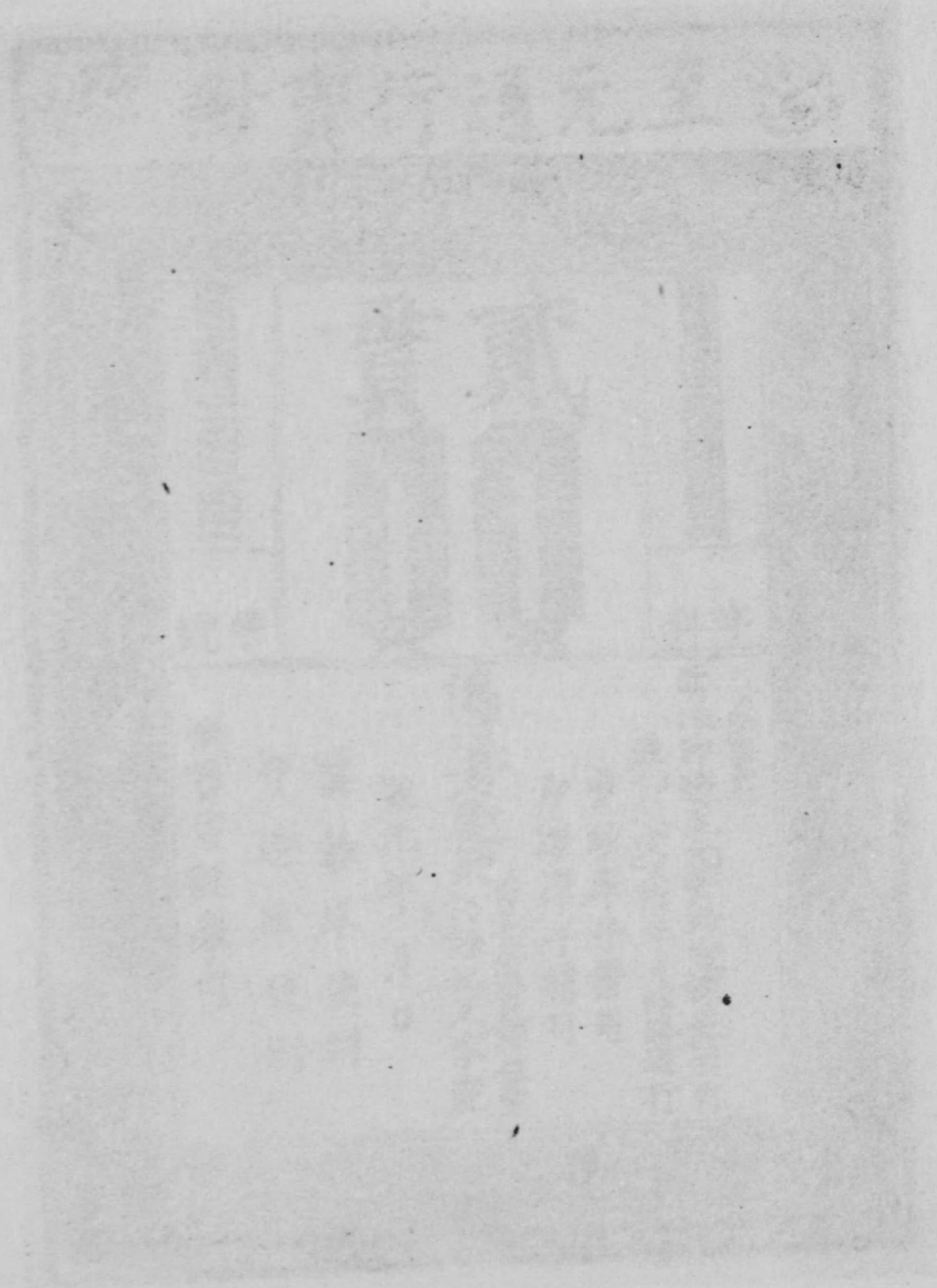
(本拓)版鈔鈔寶元至元
分二寸九高分六寸六幅
(藏館幣錢)





第十五圖

大 明 寶 鈔
幅七寸二分一高一尺一寸
(著者藏)



大 明 寶 鈔
幅七寸二分一高一尺一寸
(著者藏)



第十六圖



清末江漢關鑄造元寶銀
上面平 下面側
(原寸三分之二)
(北京恒祐銀號藏)

銀票は北京東四牌樓恒源銀號(もと錢鋪と稱す)の發行したもので、

馮帖取漕平松江銀貳兩

癸巳爲六百九十七 東四牌樓東北
西角恒源銀號

とある。漕平は秤の種類、松江銀は松江鑄造の銀で、純銀とせられて居る。松江銀はこの場合殆ど純銀の意味であらう。癸巳は、紙質墨色等より見て、恐らく道光十三年かと思はれる。六百九十七は發行番號であらう。右手の籠の目の如き符號は刺印の用を爲すもの。東四牌樓附近には明以來の大錢鋪が四軒あつて、いづれも字號に恒字を冠し、世に四恒又は四大恒といつた。恒源もその一つである。四恒は清末より民國の初に互つて相前後して倒閉した。尙ほ銀票上の丸印は兌換を終つて廢紙となつたことを示す。

錢票には中央に寄存尅現錢四吊とある。尅四吊は墨書。餘は省略す。

第十章 貨幣

一 貨幣制度

上古に於いて先づ貨幣として選ばれたものは、貝・小刀・鏹ツギ・織物等であつて、其中、小刀及び鏹は、やがて銅を以つて小さい模造品を作つて、本物に代へて授受せられることとなつた。從來好事家に依つて傳へられ、又た今日北支那諸地方から間々發掘される刀布は即ち是れで、布は鏹の形に模したものに外ならぬ。布は尖足布・空首布・方足布・圓足布等に分類せられ、刀には明刀・直刀・尖首刀・齊刀等の種類がある。前者は主として今の山西・河南北部及びその近傍で造り且つ行はれ、後者は主として山東・河北地方で用ひられたやうである。刀布に次いで起つたものは錢即ち圓形にして中央に孔を穿つた銅貨であつた。刀布がいつ起つたかは明瞭でないが、先づ西周末期以後のものらしく、戰國時代には方足布・齊刀及び錢がかなり盛

に流通したことが認められる。尙ほ戰國時代、上流社會に於いては黄金を大價格の取引に使用した。

3、秦の始皇帝は、海内を併せて後、半兩錢を鑄て天下に頒行した。半兩錢は圓形にして方孔、半兩の二字を孔の左右に紀し、重さ半兩即ち十二銖であつた。さうして刀布たると錢たるとを問はず、半兩錢以外の青銅貨幣は悉く其の使用を禁じた。これより後刀布は廢れり、錢が専ら行はれた。蓋し始皇帝は文字・度量衡等と共に貨幣の大改革を行つたので、錢の形式を統一し、重量を統一し、且つ其の鑄造權を政府に收めたのである。ついで漢代に入るや、高祖の時、秦の禁令を解いて、民に錢を鑄ることを聽した。此の時鑄られた錢は、其の薄く小ささが爲めに、榆莢錢と呼ばれた。呂后の時、民の錢を鑄るを禁じ、政府に於いて専らこれを鑄造することとしたが、文帝の時、再び民の鑄造を聽し、景帝の時、これを禁止して呂后の舊制に復した。錢の重さは呂后の時八銖とせられ、文帝の時四銖とせられ、文帝の時三銖とせられ、ついで五銖とせられ、而して五銖が輕重宜しきを得たものと見え、爾來久しく錢の標準的重量となつた。八銖錢・四銖錢は猶ほ秦制を踏襲して錢面に半兩の字樣を印したが、三銖錢・五銖錢に至つてこれを罷め、錢の重さ即ち三銖・五銖の文を其の面に紀することとせられた。又た從

來の錢には輪郭が無かつたが、武帝即位の初に鑄た四銖錢及び三銖錢には表面に細い輪郭が附けられ、五銖錢には表裏ともに輪郭が附けられた。此れは錢を銷磨して銅屑を取るのを防ぐ爲めであつた。要するに漢代の錢の制度は、五銖錢に至つて重量・形式俱に完備したと謂つてよい。當時黄金も引續き貨幣として使用され、其の一箇の重さは一斤即ち十六兩であつた。但し此の時代に於いては錢の使用が頗る發達し、黄金はこれに反して次第に衰へたやうである。武帝は財政の窮乏を救ふ爲め、白金（一に白撰といふ）及び皮幣と云ふ二種の貨幣を造つた。白金は銀及び錫を混合したもので、重さ八兩以下三種があり、それぞれ錢との交換價格が定められたが、其の價格が高きに過ぎた爲め、偽造が盛に行はれ、正貨・贗貨俱に流通せず、數年にして廢止するの外無きに至つた。王莽は錢貨六品・黄金一品・銀貨二品・龜寶四品・貝貨五品・布貨十品、合計二十八種の貨幣を造つたが、徒らに民間を騒がしただけで、間も無く廢れ了はつた。後漢は五銖錢を行つた。

三國時代には軍用の不足を補ふ爲め、蜀では直百五銖（一箇にして百文に値す）といふ大錢を鑄、吳では大泉五百（一箇五百文に値す）・大泉當千（一箇千文に値す）・太平百錢（一箇百文に値す）等を鑄た。此の中、太平百錢は錢面に年號を紀した最初のもので、太平とは吳帝孫

亮の年號である。

五胡諸國から後魏の初へ互つては錢を鑄ることが稀で、民間では布帛を用ひて其の缺陷を補つた。後魏の中期以後及び北齊・後周は錢の鑄造に努力した。太和五銖・永安五銖（後魏）・常平五銖（北齊）・布泉・五行大布・永通萬國（後周）等は此の時に鑄られたものである。南朝では、宋は四銖・孝建四銖等を、梁は五銖を鑄たが、その量多からず、**私鑄の惡錢**が市場を横行した。梁の普通年間〔520—536A.D.〕には一時銅錢を罷めて専ら鐵錢を用ひしめた。隋が海内を一統するに及んで、海内一般に復た五銖錢を用ひしめた。

唐は、高祖の武德四年〔621A.D.〕開元通寶を鑄、一箇の重さを二銖四釐とした。開元通寶錢の文字は上下左（錢よりして左、向つて右）右（錢よりして右）と讀めば開元通寶と爲り、上左下右と環り讀めば開元通寶と爲る。孰れが正しいかに就いて古來兩説があり、現に我國でも屢好事家の話柄となるが、これは舊唐書に、開元通寶と讀み、「上より左に及び廻環して之を讀むも其の義亦た通ず、流俗之を開元通寶と謂ふ」と云つたのに従ひ、開元通寶と讀まなければならぬ。其の主なる理由は、六朝時代の錢の面文は、四字の場合には、少數の例外を除いて、いづれも上下左右と讀み、特に唐に近い後魏・北齊・後周・陳の錢は皆なさやうであつたこと、

開元の二字は後漢の班固の東都の賦や晋書傅咸傳などに見え、開國建國の義で、國初に於ける錢の文に最も適當して居り、唐の初の學者もこれを承知して居たはずであることの二つである。しかし間違ひにせよ、開元通寶とも讀まれた爲め、是れより後、錢を元寶と名づけることが起つたのである。開元通寶は唐一代を通じて鑄造された。高宗の時、乾封泉寶とよぶ、一にして開元錢十に當る大錢を鑄、肅宗の時には乾元重寶（大錢）、代宗の時には大曆元寶、德宗の時には建中通寶を鑄たが、孰れも久しからずして停止された。

布帛即ち織物は、是れより先、上古から交換媒介物の一つとせられ、秦漢時代にも一部には引續いて用ひられたが、魏晉南北朝の際、騷亂多くして貨幣の鑄造がとだえると共に絹の貨幣としての使用が活潑となり、主として大取引に使用せられた。此の傾向は唐代に入つても繼續したが、しかし唐の中期以後に於いては稍や衰へたやうである。又た金の使用は前漢末から稍や下火となり、魏晉前後に至つて一旦頗る衰へ、貨幣としての地位を喪失したやうであるが、南北朝中期から次第に勢力を恢復し來り、唐代に於いては戰國以上に盛に用ひられ、立派に貨幣の働を爲した。銀は秦以前には貨幣として用ひられず、前漢の武帝並に王莽の時一時貨幣と定められたけれども、俱に久しからずして廢れたことは既に述べた如くであるが、南北朝の頃

から其の使用が次第に發達し、唐に至つては貨幣として金よりも數等盛に使用せられた。但し金銀俱に主として上流階級に依つて用ひられ、且つ主として大價格の取引に用ひられた。唐代に於ける貨幣は錢・絹・金銀の三種とすべく、就中錢が最も廣く盛に行はれ、絹これに次ぎ、金銀特に銀が又たこれに次いだのである。

宋の太祖は宋通元寶を鑄、其の重さを開元通寶と同じくした。太祖は宋通元寶を宋一代の錢の名稱としようと望んだらしいが、太宗以後の事實はこれを裏切つて居る。即ち太宗の時、太平通寶・淳化元寶・至道元寶が鑄られ、眞宗の時、咸平元寶・景德元寶・祥符元寶・祥符通寶等が鑄られ、爾後歴代改元毎に大抵新にその年號の錢を鑄た。此等の錢には銅鐵二種があつた。銅錢は一般に行はれ、鐵錢は初め四川に於いて行はれ、仁宗の時、陝西及び河東に於いては鐵錢と銅錢と併用することとせられた。四川で鐵錢を用ひたのは、五代以來の舊習に依つたもの、陝西河東で鐵錢を併用したのは、西夏入寇の結果著しく膨脹した邊防の費用を助ける手段であつた。哲宗の時、陝西の鐵錢の價值が頗る下落したので、鐵錢を擁護せんが爲め二回に互つて銅錢使用を禁じたが、命令が行はれないので復た銅鐵併用を許した。此の如く貨幣制度上特殊地域を設けるのは宋代に於いて始めて起つたことである。尙ほ仁宗の時、陝西に於いて

銅錢鐵錢ともに當十錢を鑄たが、期待の如く流通しないので、下して當二（折二ともいふ）とし、神宗の時天下一般に通行せしめることとなつた。此の當二錢に對して一箇一文に直する宋通元寶型の錢はこれを小平錢と呼んだ。徽宗の時には又た當十・當五・當三等の銅錢並に夾錫錢が鑄造された。南渡の後にも當三・當五・當五十等の大錢の鑄られたこともあるが、主として行はれたのは小平錢折二錢であつた。さうして孝宗の時、揚子江以北に於いては銅錢を用ひることを禁じ、専ら鐵錢を用ひしめた。錢の鑄造額は北宋時代に於いて非常に増加した。唐代の其れは最も多い場合でも一歳三十餘萬緡に過ぎなかつたが、北宋に至つては年額通常百萬緡前後で、眞宗の景德中の如きは百八十三萬緡にも上つた。此の如く從來曾つて見ざる巨額の錢が鑄造されたのは、財政の膨脹、一般經濟の發達の爲め、錢の需要が激増し、同時に銅其他の産出も旺盛であつたことに因る。但し南渡の後には、銅の産出が衰へた爲め鑄造額も頗る減少し、概ね十餘萬緡であつた。金銀の使用も此の時代に於いて益盛に爲り、特に銀の其れが發達し、租税・俸祿の一部としても用ひられた。當時の金銀は——前代の其れも同様であるが——鑄貨ではなく、地金であつて、民間の金銀商店に於いて鑄造され、その形式には錠（しやく板形）・餅（饅頭形）・牌（札に似たもの）等色々あり、其の一箇の重量は銀には約五十兩・約二

十五兩・約十二兩五錢の三種があり、金は詳ではないが、十兩が普通であつたらしい。大取引に絹を使用することは猶ほ行はれたが、併し前代に比べると餘程衰へた。紙幣は此の時代に始めて發生した。初め蜀に於いては専ら鐵錢を用ひ、運搬に不便であつたので、十六人の富商が資本を出し合せて交子といふ證券を發行し、一箇の値を錢一緡即ち千文と定め、三年を一期とし、期限満つれば舊券を新券に引換へ、若し見錢の兌換を望むものがあれば何時でもこれに應じた。然るに其の後富商の資力衰へ、兌換が行はれぬやうになり、紛擾が屢起つたので、仁宗の時、轉運使薛田の請を容れて、益州（今の四川省成都）に交子務を設けて交子を發行せしめ、一期の發行高を一百二十五萬六千餘緡とし、本錢三十六萬緡を置いて兌換に備へ、且つ民間に於いて私にこれを造ることを禁じ、犯すものは官印文書を偽造するの刑に處した。是に於いて始めて紙幣が生じたのである。徽宗の崇寧四年（1135A.D.）に至り、交子に倣つて錢引を造り、福建・兩浙（今の江蘇の大江以南及び浙江）荆湖（湖北湖南）を除き、其餘の諸路に流通せしめることとしたが、翌年これを廢した。ついで四川の交子を川引と改めた。南渡の後は會子と稱する紙幣が行はれた。會子には一貫文（千文）・五百文・三百文・二百文の四種があり、一期をやはり三年とし、一期の發行高は一千萬貫と定められた。交子創設の初には、法規がよ

く遵守せられ、其の流通の成績も良好であつたが、後、濫發竝に本錢缺乏の爲め、不換紙幣同様となり、價格下落し、流通が滯滞することも屢で、北宋末には一緡の錢引の市價が僅に數十文に過ぎないこともあつた。南宋の時、北方黄河沿岸に據つた金國は、初め宋に倣つて紙幣を造り之を交鈔と呼んだが、濫發の爲め甚しく停滯した。一面正隆通寶以下の錢を鑄、章宗の承安二年（1197A.D.）には承安寶貨と稱する、重さ一兩より十兩に至る五種の銀貨をも鑄たが、錢は其の原料たる銅の缺乏によつて鑄造が容易でなく、銀貨はその惡質なるに乗じて私鑄が盛に行はれ、遂にこれを廢止するの外無きに至つたので、宣宗の貞祐三年（1135A.D.）からその滅亡（1234A.D.）に至る十九年間は、錢の使用を禁じて専ら交鈔を使用するやうに強制した。併し朝廷の命令は徹底しないのみか、反つて銀塊の使用を旺盛ならしめ、日常零星の取引まで主として銀に依つて行はれた。

②元の貨幣制度も大體金の其れを模倣したものであつて、太宗の時既に交鈔を造つたが、世祖クビライに至つて、中統元寶（十文より二貫文に至る九等あり）及び至元寶鈔（五文より二貫文に至る十一等あり）を印造し、各路に平準行用庫を置いて、凡そ金銀の賣買は必ず平準庫に就いて行ふこととし、民の私に賣買交易することを禁じた。さうして平準庫に於いて中統・至

元二種の紙幣を以つて金銀の賣買を行ひ、且つ鈔母として若干の銀を存貯したから、若し人民が盛に平準庫に赴いて金銀を賣買すれば、此れに依つて、自ら鈔の兌換が行はれ、紙幣流通の圓滑を望むことが出来る筈である。然るに官は金銀を賣溢り、民は金銀を以つて鈔を買ふことを喜ばず、制度の趣旨は初から行はれかねたやうであるが、成宗即位の初(至元三十一年1264A.D.)、諸路平準庫の鈔母の總額を僅々十九萬兩と定めるに及んで、銀鈔兌換の途は殆ど杜絶した。尙ほ世祖クビライは至元十四年(1277A.D.)江南に於て銅錢を使用することを禁じ、繼いで至元二十三年(1286A.D.)天下一般に對してこれを禁止し、銅錢を官に拘收することを命じた。かくて武帝の至大二年(1309A.D.)まで二十三年の間、錢の通用の禁止が繼續したが、この年新に至大通寶を鑄造發行すると共に、古來の銅錢の使用をも許した。又た金銀は、從來私に之を賣買交易することを禁ずることに依つて、その貨幣としての使用をも停められて居たのであるが、至大四年(1311A.D.)四月、仁宗即位の後、此の禁令を除いて自然の趨勢に委ねることとなつた。要するに世祖の紙幣専用政策は遂に失敗に歸したのであつた。

明代では錢と鈔と金銀特に銀とが行はれた。錢は、太祖に洪武通寶があり、成祖に永樂通寶、宣宗に宣德通寶があつたが、其後嘉靖に至るまでの間、弘治一朝の外は錢を鑄ず、嘉靖以後は

復た代々その年號の錢を鑄た。その重量は一錢(一匁)から一錢五六分の間にあつた。尙ほ太祖の時、當二より當十に至る四種の大錢を鑄、世宗及び熹宗も大錢を鑄たが、俱に幾もなくして罷められた。錢の原料は從來銅を主とし、これに鉛及び錫を配したのであつて、明の中頃までも左様であつたのだが、嘉靖(1522—1566A.D.)以來、鉛及び錫を減じて亞鉛(支那にて白鉛と云ふ)を混することとし、是れまで青銅(Bronze)であつた支那錢は一轉して眞鍮(Copper)となつた。

②太祖は又た洪武八年(1375A.D.)大明寶鈔と名づくる紙幣を印造し、これを以つて商税の一部を交納するを聽し、さうして民間に於いて、金銀を以つて賣買交易を行ふことを禁じて間接に鈔の流通を助けようとした。成祖以後も相繼いで寶鈔を印造發行し、且つ鈔面には依然として洪武の年號を用ひた。寶鈔は初から純然たる不換紙幣であつたので人民に喜ばれず、年を経るに隨つて停滯し、朝廷は種々の方法を講じてこれを救はうとしたけれども、効果が擧がらず、孝宗(1498—1505A.D.)以後遂に廢れ了はつた。金銀は洪武の時貨幣としての使用を禁止されたことは上に述べた如くであつて、其後成祖・仁宗・宣宗も其の禁を申明したけれども、これを使用すること已まらず、就中銀の流通が特に盛であつたが、英宗正統中(1436—1449A.D.)遂に禁令を弛め、銀を以て租税納付の用に充ててることを聽すこととなり、此れより銀の使用は一年は一年より旺

盛となつた。是れより先、金國は姑く措き、宋元に於いては、銀の使用が發達したとは云へ、猶ほ主として大價格の取引に用ひられたが、明代に至つては小價格のそれにも用ひられ、貨銀としても用ひられ、上流下流を問はず社會各方面に互つて徹底的に流通した。かく銀が盛に行はれるに隨ひ、金は反つて次第に貨幣として使用せられなくなり、貨幣以上の財寶となつた。

清代の貨幣は主として錢と銀とであつた。錢は制錢と稱せられ、太祖以來これを鑄、表面に年號及び通寶の字樣を現はし、重量は每箇一錢二分を原則とし、原料は銅及び亞鉛を主として、これに若干の鉛を加へた。咸豐三年〔1853A.D.〕太平天國の大亂に際し、財賦の匱乏を補救せんが爲め、當千・當五百・當百・當五十・當十等の大錢を鑄たが、數年にして廢止され、但だ當十錢のみは光緒朝まで北京附近に行はれた。鈔も世祖の順治八年〔1651A.D.〕始めてこれを印造したが、同十八年停止された。降つて咸豐三年、大錢と同様の目的に依つて大清寶鈔及び戶部官票が發行され、前者は錢に擬して五百文より二千文に至る四種が設けられ、後者は銀に擬して一兩より十兩に至る四種が設けられたが、大錢と同じ運命に終つた。銀は明以來の勢を受けてその使用益廣く、貨幣としての重要さは錢を凌駕するに至つたが、その種類は凡そ三種あつた。

4.

一は銀兩であつて、前代から引續き行はれた地金貨幣で、重量を計つて使用され、兩を最も主

要な單位とするところから此の名があるのである。次は洋銀、即ち明末以來歐米人の手を経て輸入された外國銀貨で、その代表的なものは、初には西班牙銀貨（本洋）、後には墨西哥銀貨（鷹洋、墨銀）であつた。次は銀元、即ち光緒十四年〔1888A.D.〕以後、廣東・湖北等七八省に於いて鑄造された洋式銀貨で、光緒末年から盛に流通した。唐宋以來使用された金銀は前にも一言した如く、いづれも地金であつて鑄貨ではなく、秤量貨幣であつて計數貨幣ではなかつたので漢の白金、金國の承安寶貨等一時的のものを除外して云へば、支那に於いて貴金屬を以て鑄造された鑄貨はた計數貨幣は此の銀元に始まると謂ふことが出来る。尙ほ光緒二十七年〔1901A.D.〕以來鑄造された銅圓といふものがある。此れは洋式銅錢であつて、爾來年を逐うて盛に行はれ、現在では制錢は廢れて此の銅圓が代つて流通して居る。

要するに支那古今を一貫して遍ねく流通した貨幣は錢であつた。金は戰國秦漢にも行はれたが、其の後、唐宋から明の初へかけて稍盛に用ひられ、銀は唐宋から明清に互つて最も盛に使用せられ、遂に錢を凌駕するに至り、絹は古代から宋の頃まで引續いて使用せられ、さうして紙幣は宋に起り、元明に盛に、清朝では或短期間の外、用ひられなかつた。此の如く鑄貨たる錢の外、貴金屬地金や絹や種々雜多の貨幣が行はれて統一されなかつたのであるが、其の原因

は姑く措き、貨幣の製造發行が政府の獨占に歸せず、或種の貨物が貨幣として流通したことは、自ら政府の貨幣政策を調節し、その悪影響を緩和するに有效であつたことを認めなければならぬ。尙ほ、清代、大都市に於いて錢鋪錢莊及び銀號などから發行した銀票錢票が流通したことは後段に述べる如くであるが、これも通貨の不便不足を補救し、大に商業の發達を助けたのであつた。

二 通貨商及び貨幣市場

通貨を營業對象の一つとする商人もかなり古くから存し、それは貴金屬商に外ならなかつたのである。唐宋の際、長安・開封・蘇州の如き大都會には金銀行又は銀行といふ町があつて、そこには金銀鋪・銀鋪・金肆など呼ばれた貴金屬商店が軒を並べて、金銀器飾を鬻ぎ、兼ねて金銀地金を賣買した。南宋の時、杭州の金銀鋪は店頭に金銀器及び見錢（當時の語、現金の意）を陳列し、これを看塚錢といつたといふことである。金銀地金（特に銀地金）は當時貨幣として用ひられ、南宋時代には文武官俸給の一部としても支拂はれたのであるから、金銀地金

を錢に依つて賣買することは畢竟兩換に外ならぬ。されば支那に於ける兩換商の權輿は金銀鋪に在りとして妨げあるまい。北宋以來、政府から見錢交引・鹽鈔・茶引等様々の約束手形やうのものが發行され、それがかなり民間に流轉し、それを扱ふ専門の商店「交引鋪」といふものも現れたが、南宋になると金銀と交引と併せて取扱ふものも出來、金銀交引鋪と呼ばれた。尙ほ宋元の交には、銀と錢との兩換を専ら掌るところの兌房といふものが現れ出でたが、久しくは續かなかつたやうである。元代では、政府が金銀の私賣買を禁じた爲め、金銀鋪は一時凋落したが、明に至つて復た起り出でた。

明代では銀鋪は打銀鋪と傾銷銀鋪との二つに分れ、打銀鋪は銀細工を行ひ、傾銷銀鋪は銀塊主として元寶を鑄造した。金鋪はやはり金銀器飾の製造販賣を掌つた。外に錢鋪といふものが起り、これは兩換商であつた。清代になると、打銀鋪は銀樓と呼ばれ、傾銷銀鋪は銀號と呼ばれ、金鋪は大抵金店と呼ばれ、さうして錢鋪は錢莊・錢店などとも呼ばれた。金店・銀樓は貴金屬器飾を取扱ひ、錢鋪・錢莊・銀號等は、本來の任務の外、預金・貸付並に銀行券的の手形（票）の發行を行つて銀行業を營むやうになり、貴金屬商と通貨商との區別が大體明瞭になつた（但し金店は捐納の仲介をも行ひ、清末には銀行的の業務をも營んだ）。錢鋪・錢莊・銀號

等が銀行化した時期は十分詳ではないが、乾隆嘉慶の交としてよいやうである。

宋代、金銀商店の町即ち銀行では、商人が集まつて銀の相場を定めた形跡がある。それが元に廢れて明に復た興つたやうであつて、「世宗實錄」⁽³⁾嘉靖十五年九月甲子の條に北京の錢市のことが見えて居る。北京の錢市は引續いて清代に及び、乾隆七年には錢牙（錢の賣買を仲介する牙行）十二名を置くこととなつた。清中期以後には、北京の外、南北の稍大きい都會には錢市が設けられたやうであるが、處に依つては銀市とも稱へたので、その例は保定府治などに見出される。錢市には一都會の錢鋪錢莊等が集つて、錢銀（清末以來各種の紙幣をも扱つた）の大量賣買を行ひ、日々の相場を定めた。錢市は、明以來、恐らく錢市とも銀市とも又た銀錢市とも呼ばれ、さうして錢市の名が主として用ひられたやうである。

三 信用證券

信用證券の類もかなり古くから存したやうであるが、稍や明かに跡づけることが出来るのは唐以後である。唐の末期、長安を首として大都市に櫃坊といふものがあつて、手数料を取つて人

の錢や財物を預り、その安全を保證した。錢を預けた人が他人に錢を支拂ふ場合には證書を其の人に與へ、櫃坊に齎して見錢の交付を受けしめた。證書は、通例、帖と呼ばれたやうであるが、これは今日の小切手に近い。櫃坊は宋になると墮落して賭場となり、小切手も亡びてしまつた。又た支那では古來賒といふことが行はれた。賒とは貨物を授受して代價の支拂を若干時日延期することであるが、唐宋特に宋代に於いて頗る盛であつた。この慣習は一般商人の間にも行はれたが、客商と坐賈との間に最もよく行はれ、それには牙行の介在が與つて力があり、牙行客商坐賈の三者相俟つて固い信用が成立した。大きい取引に於いては、支拂は大抵一箇年後に行はれ、今年はその價錢を支拂ひ、明年は今年の價錢を支拂つたので、それは蘇東坡の上奏文⁽⁴⁾にも見えて居る。この場合、債務者（通例は坐賈）から證書を入れたことはいふまでもなく、それを夷堅乙志⁽⁵⁾には契約と呼んで居るが、今日の言葉で云へば約束手形であらう。又た第三者に對する債權を振替へて第二者への支拂に充てるところの爲替手形も、唐宋に互つて行はれた。次に述べる如く、唐の飛錢には商人の爲替手形に依つて行はれる場合があつたらしく、南宋の紹興中、臨安で一時禁止された兌便會子も爲替手形と認められる。又た殷實の商人に錢銀を預けて預り手形（一種の約束手形）を取り、それを錢に代へて使用することも宋代に行は

れ、その手形は交子若しくは會子と呼ばれた。交子會子は廣く證書を指す言葉で、必しもいづれが今の何手形に當るといふわけではなく、約束手形にも爲替手形にも、又た其他様々の證書にも用ひられたやうである。この外、當時、文書を意味する語に帖・帖子・照帖などあつたが、此等に依つて各種の手形の云ひ現される場合もあつたであらう。清代になると、銀行的の營業が發達したので、信用證券も同時に發達したのであるが、それは、通常、票と呼ばれた。錢鋪・銀號等が預金者に對して振出す預り手形並に貸出の爲めに發行する手形は錢票又は銀票と呼ばれ、錢銀同様に授受された。銀票は盛に商取引に用ひられ、額面數千兩に及ぶものも稀でなかつた。錢鋪等が始めて錢銀票を發行した時期は詳でないが、やはり乾隆嘉慶の交と見て大過ないやうである。清末には本票（期票ともいふ）・貨票・滙票・支票・向單などいふものも行はれた。本票貨票は約束手形、滙票は爲替手形で、俱に主として商人から商人へ振出すものであり、支票向單は預金者から錢莊銀號等金融業者に對して振出すものであつた。

貨幣を遠距離に送る便法として手形を用ひることも唐以來行はれた。唐の憲宗の元和中（但し六年以前で、西紀八〇六一—八二一）、商賈が京師に於いて錢を諸道の進奏院・諸軍・諸使・富家に委託し、輕裝して四方に趨き、券を合せてこれを取り、號して飛錢と云つたことは、新唐書食貨志⁽⁶⁾

に見え、周く知られて居る。進奏院は節度使の京師出張所で、當時長安に數十個所あり、商人はそこへ錢を持込んで證書を受取り、當該節度使の治所（例へば淮南節度使ならば揚州、劔南西川節度使ならば成都）に趨いて見錢に引換へて貰つたのである。諸軍は神策軍・羽林軍の如き、京師に駐屯する軍隊であつて、地方に出張所やうのものを設け、商人を使つて或る商賣を行はしめたもの、諸使は重要州府に巡院（出張所）を有する度支使・鹽鐵使の類であり、富家は地方商人に對して債權を有する京師の富商を指すやうである。されば進奏院及び諸軍諸使が商人から錢を委託されて發行した證書は他地拂約束手形若しくは爲替手形であつたと見てよからう。かやうな仕組が、上述の如く、飛錢と呼ばれ、又た便換・便錢とも呼ばれたのであるが、その證書も恐らく同じ言葉でも云現され、又た帖・帖子なども云はれたであらう。飛錢は初から進奏院諸軍諸使等官邊に依つて扱はれることが多かつたと思はれるが、元和七年（812A.D.）以後は専ら三司（戸部・度支使・鹽鐵使）に依つて取扱はれることとなり、唐の末近い頃まで繼續したやうである。宋代でも、財政上の便宜の爲め、官府に依つてかなり盛に扱はれ、民間でも若干行はれ、便錢・兌便などと云はれ、その手形は兌便會子或は單に會子・交子などと云はれた。元以後、官府の爲替は罷められ、民間のもののみ多少行はれ、明から清初へかけては

會票と呼ばれ、其後は滙票の字様が用ひられた。唐宋特に宋では官營の送金爲替が相當盛に行はれたが、それは上文に一言した如く、官府の便宜を旨としたもので、窮屈な條件が設けられ商人の自由を許すものではなかつた。民間のそれも、狭い範圍、狭い距離に對して行はれ、且つ信用ある商人に依つて取扱はれるだけで、専門の業とならず、要するに微々たるものに過ぎなかつたやうである。それが専門となり、大規模となり、各省の重要都市に對して如何に巨額の錢銀も託送し得るやうになつたのは、山西票號（一に匯兌莊といふ）が出現した後のことであつた。票號は山西省平遙縣の人雷履泰が嘉慶道光の頃創立したもので、その後、平遙・太原・祁縣・陽曲（太原府治）の四縣人に依つて經營され、支那全土の送金爲替の營業を殆ど獨占し、併せて一般の銀行業をも營み、以つて近時に及んだのである。

票號出現以前には、遠方に財を送るには銀錠其物を輸送することが多く、その護衛を主なる任務とするものに標局（標は鏢・鏢・鏢とも書す）があつた。標局は武術の心得ある壯士（標手といふ）を養ひ、客の需に應じてこれをして財物の護送に當らしめたので、清末まで南北の大都市に存し、票號と雖も現銀移動の必要あるときは、標手を僦うて護送せしめたのであつた。その起源は詳でないが、明の中頃に既に存したことは、それが金瓶梅⁽⁷⁾に見えることに依つ

て知られる。

- 1 「文選」卷一、班固の東都賦に「夫大漢之開元也、奮布衣以登皇位、」とある。
- 2 「晉書」卷四七、傅咸傳、咸の上書中に「泰始開元以暨于今、十有五年矣、」とある。
- 3 明世宗實錄卷一九一、嘉靖十五年九月甲子。
- 4 「續資治通鑑長編」卷四七三、元祐七年五月壬子、蘇軾上奏。
- 5 洪邁「夷堅乙志」卷七、布張家。
- 6 「新唐書」卷五四、食貨志。
- 7 「金瓶梅」六十六回及び六十九回に標船の語が見えて居る。標手の護送する財物は、北では通常車に積まれ、南では船に積まれ、さうしてその船が標船と呼ばれたのである。

第十一章 物 價

先づ物價と貨幣との關係に就いて一言して置かう。秦漢時代には貴重品の價格は金に依つて評定されることもあつたが、一般物價は錢に依つて評定表示された。この後錢に依る物價は清朝末期に至るまで引續いて行はれた。南北朝前後には絹に依つて物價を表示する事が行はれ、延いて唐代に及び、唐律には贓品・寄託物・負債等總べて財物の價を絹何疋の語を以つて表示して居る。唐及び宋では貴重品の價格は金を以つて表示されることもあり、又た錢を以つて表示されることもあつた。銀に依る價格は唐代の文獻には見え、宋代のそれに始めて少しく現れて居る。さうして金銀を以つて物價を支拂ふのは、必しもそれが金銀を以つて表示された場合に限らないので、錢を以つて表示された物價を金銀に換算支拂ふことも履行はれたやうである。金國ではその末年誤れる貨幣政策の結果、奇異なる銀使用の旺盛を來したことは前に述べた如くであるが、これと共に大小の物價も銀を以つて表示された。元代には鈔による物價と錢若しくは金銀に依る物價と、こもこも行はれたやうである。明代でも鈔・錢・銀の三者に依つ